

桂田繁太郎翁傳

桂田繁太郎翁傳



正 誤 表

頁	行	誤	正
三三	八	職したが	なく退職したが
三七	一四	貸 携	賃 携
八六	六	原 鉄 之 助	菅 原 鉄 之 助
九〇	九	順 潤 に	順 潤 に
九〇	九	学者にもなつて あろう	学者にもなつた であらう
九一	四	絶望の深淵に	絶望の深淵に
九一	八、九	教 虔	敬 虔
一二九	六	本 来 乙 彦	市 来 乙 彦
一三七	七	博く隣人を愛し た	博く隣人を愛し た。
一五三	七	業材業	製材業
一六一	一九	発 止	廃 止

この度亡き父繁太郎の一周忌に當り父を知る方々のお力により、この書が出版されることになりました。感謝にたえません。生前いろいろ御厚情賜りましたので贈呈いたします。

昭和二十九年秋

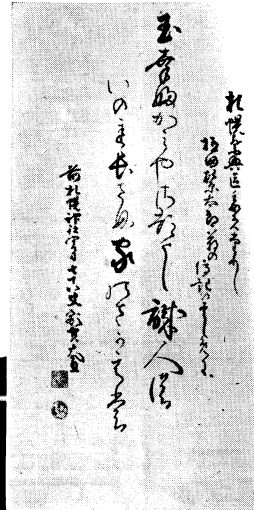
札幌市北九條東二丁目

植 田 英 武

極田繁太郎翁傳



植田 敬太郎



札幌祭典区委員たりし植田繁太
 郎翁の伝記のはじめに

玉幸ふ神やさづけし

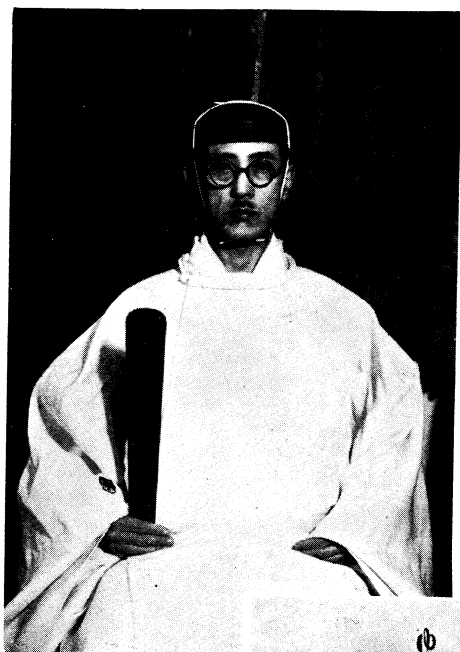
誠人のいのち長さも

家のさかえも

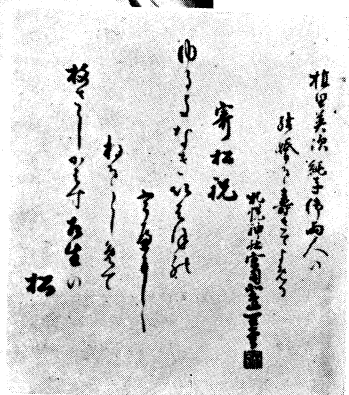


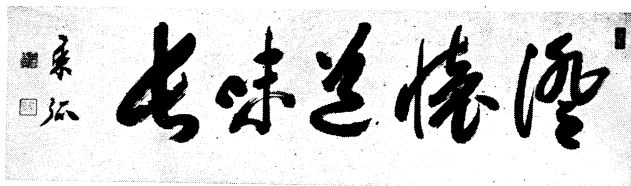
額 賀 宮 司

北島宮司



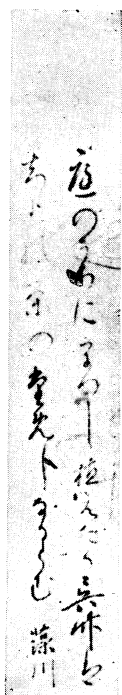
北島宮司の書





三沢元市長の書

三沢元市長



山田幸太郎先生の書



小竹文次郎氏

題植田翁之像

功崇由志業広勤 寿祿併占此一身

雖然乃翁有一願 家門仁風隨時薰

功崇きは志に由り業広きは勤による 寿と祿と併せ占めたり、この一身
然りと雖も乃翁に一願あり 家門の仁風隨時に薫らんことを

植田繁太郎翁には九十一の御高令を以て昨年御他界遊ばされましたこと、御寿命に不十分はない
とは申せ、おいたわしい事であります。

御生前を偲びここに謹んで御弔意をささけます。

御伝記御刊行に当り、只御肖像に題する心で拙い一詩を捧げることにいたしました。

始めの二句は故人が立志奮闘、富と長寿とを併せ得た幸福を祝したもの、第三句四句は満ち足りた幸福のこの翁にもその上になお一つの願望があつたに違いない。それは家門から仁風が常に発散して社会の尊敬を受けるといふ一事であつたらうと推察したのでありまして、故翁の御人格と家人皆々様の御心持をたたえたつもりであります。

昭和二十九年八月十八日

東京都世田谷区成城町

三 澤 寛 一

翁を偲ぶ

故植田繁太郎翁の伝記が編纂せられると聞いて孝心深い当主英武の君としてさもあるべき事を洵に喜びに堪えなう。

故翁もさぞかし悦んでおられる事と思うと、赤銅色の長い顔に皺を寄せたあの笑顔が臉に浮び、何か事があると直ぐに英武、英武と恰かも我が子の名を呼ぶ事が何よりの楽しみ様の様に叫ばれたあの顔に似合わぬ澄んだ声が今にも耳元に聞えて来る様だ。

僕が翁を知つたのは勿論札幌神社の官司に赴任した昭和十五年の秋からの事で、在任中四年半は随分親しくして貰つたものだ。山形県の三山神社に転任してからは渡道する機会もなく、心にかけてながらも翁を訪ねる事も出来なかつたが、確か昭和二十二年の秋であつたか、御帰郷の帰りに御父子同伴で、戦後の最も旅行に困難であつた中を、態々車を枉げて田舎の三山を訪ねて頂いた時には、親に再会した様な感激で、一夜を傾けた事が忘れられない。翁も僕の健在を悦んで令息の言葉では近年にない事だと心配されるまで痛飲し、肩を擁し合つて宿に帰つて来た事を覚えて居る。然しそれが翁との最後の別れとなつて了つた。

僕が在任中に翁から受けた感化や感激は少くはない。翁は敎神家で常に札幌神社には参拝に来られたし、神社の事といえば何かと骨身を惜しまず尽された。当時は顧問として重要な事には悉く参画せられて居たが、それまで既に数十年に亙り奉仕せられ、大総代として衆を率いて活躍せられ、随分難事業をも完成せられた、その功績は神社として忘れてはならぬものである。僕が在任中にも一度その功を表彰した事がある。今でも参集所の大広間の鴨居の上には、大きな翁の尊影が掲げられて居る筈だ。永久に神社の御隆昌を看護つて居られる事であらう。

翁は私人としても中々常人に真似の出来ぬ美点を具えて居られた。何でも極くお若い時に志を立てて郷里を後に裸一貫で渡道せられ、刻苦營々遂にその功を成された様に聞いた。所謂立志伝中の人である。

豪気果断な所があつた一方、又涙もろいというか憐み深く、人間味に溢れて居る好々爺でもあつた。よく招かれもしたが、少し酔がまわると得意の追分が出る。中々の美声でしかも本調子であつた。そんな時でも「人は辛棒が第一だ、辛棒しなさいよ」と手を握つてよくいわれたものだ。骨太な頑丈な手に力を入れて握られると随分痛かつた事を今でも覚えて居る。

当時翁は既に所謂福と祿と寿の三徳を兼ねた余程恵まれた境遇にあつた。大事業家としての祿はいうに及ばぬが、親勝りの世嗣があり、孫あり曾孫ありで、これが実の子福者であつた。自らは齡八十有余に及んで猶矍鑠として壯者を凌ぐ寿を保ち、その上、影の形に添う如く常に傍を離れぬ親

思いの実子に護られて悠々自適の実に恵まれた生涯であつた。積善の家に余慶ありの語のまゝに翁なき後も植田家は弥栄えに栄え行く事であらう。

ありし日の翁を偲び、御冥福を祈りつゝ筆を擱く。

昭和二十九年五月二十七日

出雲八雲山麓にて

北 島 邦 孝

風雅毅然

札幌神社御神威興隆にお尽し下された功勞者植田繁太郎翁が神の世にお旅立ちなされてから早くも一年の歳月が立つてしまいました。

私が植田翁にはじめてお目にかかったのは昭和四年の春のことであり、今から二十六年前にさかのほります。

当時の私は、日光の東照宮から、札幌神社の主典として就任いたしましたので、ほやほやの若者でした。まだ二十八才の生いき盛りでありました。祭典区の方が發起されました私のために歓迎会をいくよ亭でお開き下さいました。その席上のございます。

私はいゝ氣になつて、こんな挨拶を申しました。「私は世界のバダグイスである日光の東照宮から転任して参りました。札幌は北海道の都ではあるが、私の活動するには、あまりに狭ま過ぎる。しかし一旦着任した上は、至誠一貫札幌神社の大神様に奉仕申しあげる決心である。私は大神様に御奉仕申しあげるに参つたので、札幌神社の宮司に奉仕する精神は毛頭もつていない」云々と。どんな氣持で申したのか、今になつて考えると身の毛がよだつ氣もちであります。ほんとうにぞつと

いたします。若い時というものは実に大それたことを平氣で、よくもいわれるものであるなあと、吾ながら寒心いたします。それから四、五日過ぎまして、植田老から電話がありまして、石井主典を自宅によこすようにとの御命令があつたのです。私は早速お伺いいたしますと、植田老は端然とおすわりになられて私に次のように申されました。

「君は若くて元氣があつて誠によろしい。また頼母しい男だ。この間、君の歓迎会の席上で、君は札幌神社の大神様に御奉仕に参つたので、決して札幌神社の宮司に奉仕に來たのではないと、さも得意そうに言われたが、わしの考えは或いは間違つてゐるかも知れないけれども、わしは神職としての君の考えは、誤つてゐると思う。神職というものは、神に奉仕することを職務とするけれども、そればかりが務めではないと思う。神に奉仕するその精神をもつて、人間に奉仕するという務めがあるはずだ。神に奉仕する心をもつて、上官である宮司に奉仕し、神に奉仕する心をもつて人に奉仕し、つまり氏子に奉仕し、社会に奉仕するという大切な務めがあるのではないかと思つてゐる。君がまだ若いことから、そうしたことをよくよく考え直して、もう一歩進めて勉強してくれまいか」と申されました。

その時の植田翁の態度がいかに毅然としてしかも別に理窟めいたことでなく、叱りつけるといふのでもなく、まことに風雅なお姿でありました。慈父という言葉が世の中に用いられているが、ほんとうに文字どおりの慈父の言葉でした。威厳ある、しかも温情あふるゝお言葉でした。私は何

だか電気でもかけられたような感じがいたしまして、それからこの言葉が脳裡に刻み込まれて忘れませんでした。

爾来二十六年、私は再び札幌神社の大神様のみ許に御奉仕申し上げる今日、参集所に掲けられている翁の写真を仰いだ時、この言葉は、昨日のことにように新しい力となつて私の胸に響いて参りました。

あの風雅にして毅然とした御態度、あの言葉、私は今、あの言葉から五十有四才の今日大きな意義と強い力とを戴きました。

神祭りする清く正しい精神と、神祭りする清く正しくそして温かい精神を世のため人のために奉仕する、つまり社会のために下座の奉仕者なるという尊い力を見出したのでございます。

そして今日植田翁の一年祭が執行されますにあたつて私は心から私にお与え下さつたお言葉をありがたく感謝せずにはおられません。御霊前に両手を合わせてお礼を申し上げたいのでございます。風雅にして毅然!! 植田翁は風雅なお方であられた。植田翁は毅然たる信念に生きたお方であられた。この信念によつて当時、一大難業であつた貴賓館と参集所の建設工事も金子久吉さん佐藤善兵衛さんと共に協力され、富岡宮司を助けられて美事に工事を完成されたのであります。

札幌神社宮司 石 井 昌 胤

目 次

翁 の 肖 像

序 に か へ て

一、植田繁太郎翁の伝記のはじめに…………… 額 賀 大 直 ……

二、題 植 田 翁 之 像…………… 三 沢 寛 一 ……

三、翁 を 偲 ぶ…………… 北 島 邦 孝 ……

四、風 雅 毅 然…………… 石 井 昌 胤 ……

は し が き…………… 一 ……

翁 の 生 誕…………… 三 ……

翁 の 先 祖…………… 四 ……

幼 少 の こ ろ…………… 八 ……

父の没後・少青年時代…………… 二一 ……

翁 の 渡 道…………… 二三 ……

亜麻耕作に従事…………… 二七 ……

製麻会社入社・在職時代	一九
翁の結婚・トヨ子夫人	二三
翁の郷里訪問	三五
製麻界の恩人吉田健作氏	三七
北海道製麻会社	三九
製麻会社退職後・職業転々	四一
希望の製材機入手	四三
札幌の製材業	四五
植田木工場の発展	四七
翁の一家	四九
植田家本宅・別邸・墓	五一
翁の逝去と解剖	五三
翁の葬儀	五五
翁の人生観	五七
翁の敬神崇祖	五九
翁と教育	六一

翁の趣味	六三
癸亥和合会	六五
翁の知己	六九
伊藤亀太郎氏	七〇
大島喜一郎氏	七四
小竹文次郎氏	七五
福岡県人会	七九
翁の思い出	八六
あとがき	八五
追記	八九
お礼一言	九三
年譜	九五

植田繁太郎翁傳

はしがき

九十一才の長寿を遂げ、福祿寿の三徳を具現された植田繁太郎翁の伝記については、その最も親しい知友であり、また親戚でもある小竹文次郎さんが、翁の生前からいろいろ調査研究されて、翁の生前に出版しようとされた。

小竹さんは早くから翁に親近し、翁の人格に推服し、その伝記は人の鑑みとするに足るものと信じ、併せて翁の子々孫々に伝えて、翁の精神が植田家の庭訓となつて植田家が栄えるようにと願つて、この稿を起されたもので、その動機も純粹なものであつた。

しかし植田翁は「わしの伝記など読む人があろうか」とそれを固辞して受けなかつた。

しかも小竹さんは翁に先だつて昭和二十六年惜しくも逝去されたので、その貴重な記録は出版に至らなかつたのは、残念至極のことであつた。

たまたま百寿までもと、人も望んでいた植田翁が、昭和二十八年八月逝去されたので、小竹さんの遺稿が徒らに筐底に蔵されているのは遺憾なこととして、人の勧めもあつて、植田翁の嗣子英武さんが、小竹さんの遺志をつがれて、これを出版なさることになつたのである。

これは一つには亡き父上に対しての深い孝心の現われであり、また一つには父上のこよなき知友小竹さんへの信義の表明である。

従つて本書の内容は小竹文次郎さんの遺稿に基づくものである。

編者は小竹さんの資料によつてはじめて植田翁を知つたもので、その資料を整理するうちに自ずと翁の面目を知り、心からなる親愛と尊敬を禁じ得ない。

世には位人臣を極め、功業赫々たる偉人も尠しとしないし、また学徳一世に高く、万世にその教えを垂れる人もまた数多い。そしてそれら偉人傑士の伝記は数え切れない程多く出版されている。

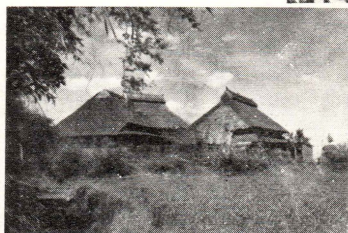
しかし植田翁のように、幼いうちに父母を失い、身を不遇のうちから起して、福祿寿の三徳を身を以て築きあげられた人は珍しい。

小竹さんが強い意欲を以て、この編集に努められたのは、また意義深いことである。

小竹さんの脳裡には、まだ記録に書き残されない翁の人間像が描かれていたと考えるが、今はそれを知る由もなく、果して小竹さんが所期したものになつたかについては、編者はただただ恐縮いたす次第である。

しかしこの一篇を草することによつて編者自身色々と教えられ、翁が福祿寿の三徳を具現された根本には、翁の「敬天愛人」の人格と刻苦勉励の生活態度と信義を以て交る良知己のあつたことがあり、これは色々な意味で人生を真面目に考える時の尊い指標となることを深く信ずるものである。

稻
童
風
景



稻
童
風
景



翁の生誕

植田繁太郎翁は文久三年（西暦一八六三年）四月二十一日、北九州の福岡市は、京都郡仲津村字稲童の地に父彦平さんの二男として生まれた。

仲津村の字稲童というのは、九州の門戸、門司駅から日豊線をはしること約一時間、新田原駅で下車して、それから僅か十五六町の近距離にある農村である。北に山を負い、また海岸にも近く、西方一里半で行橋町に達するところである。

福岡県は今産業・交通・文化等すべての面で、北九州の王座的地位を占めていて、地理的諸条件に恵まれている。そしてその気候も年平均十五度Cの等温線地帯にほぼ一致していて、わが国のうちでも一番住みよい四時温暖な気候の地方である。従つて翁が生まれたこの地も恵まれた農村で裏作もよく行われて、比較的生産も高いのである。

翁はかような温暖な気候の中に幼少の時代は、冬でも足袋を用いず、丈夫に育つたのである。

さて翁の生誕した文久三年を中心に、当時のわが国の情勢を考えて見よう。

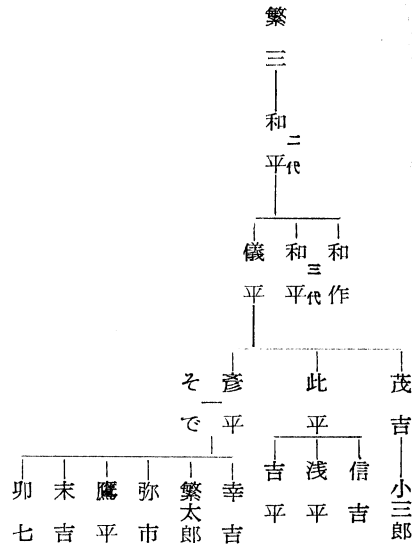
文久三年は明治維新の九年前に当り、徳川治世三百年の夢は破れて、これを外にしては、オラン

ダ、フランス、イギリス、アメリカの諸国が開国通商の要求をしきりに求めており、殊にはその年六月英国代理公使ニールが七隻の艦隊を共に鹿児島に臨み、生麦事件に關する賠償の条件を示して且つ二十四時間以内に回答を強要するなど、外交關係は一触即発する危機にあつた。

また内には、尊王攘夷・王政復古の問題で国論は沸騰し、時の將軍徳川家茂以下幕府の大官らは上を下へと狼狽してなすことを知らず、文字通り内憂外患交々であり、まことに物情騒然たる有様で、わが国の大転換期に當つていた。福岡県地方は九州島の最北端にあり、本州に対しての玄關であり、朝鮮半島にも近く、大陸に対してもわが国の玄關であるので、この時代の嵐はここにも強く動いていたものであつたらう。

翁の先祖

翁の先祖は代々百姓である。翁の記憶と同家の記録によると、植田家の先祖は、曾祖父の父の代までわかつている。その家譜を示せば次の通りである。



この家譜で見ると、植田家は男の子に恵まれた家であることが一見してわかる。

農は昔から国の宝といわれていたが、維新前の百姓は門地が低かつた。封建制度下では武家が重んぜられ、武家は苗字をもち、帯刀して威儀も正していたが、百姓町人には苗字帯刀を許されぬのが普通であつた。

武家社会では祖先以来の世襲制度がしかれていたので、祖先についても、明らかな系図が保たれていたが、農・工・商等にはこれはあまりあきらかでないのは当然である。

翁の生まれ故郷に行つて見ると、その墳墓の地にはあまり古い石碑は見当らぬのである。

これは時代の変遷もあつて、止むを得ないものがあるが、こうした中に植田家ばかりは小さいながらも、古色蒼然たる墓石が現存することは、植田家が祖先を思う念が強かつたのか、また同家が相当の旧家であつたかと察することができる。

植田の姓は勿論明治になつてから附けられたもので、明治維新によつて四民平等の旗風と共に、日本の封建制度下の雑多な階級制度が廃され、武士は士族となり、農・工・商等は一樣に平民とされ、しかも平民も必ず苗字を持つようになったのである。こうして翁の幼少の時に植田の姓を名のるようになったのである。そのころ稲重には、尾崎、古城、城戸、田渕などの姓を名のるものがあったと翁は語つていられた。

翁の示した一番遠い先祖は曾祖父の父である繁三さんである。繁三さんの時代にはかなり裕福な暮し向きであつたらしい。五反百姓の多い内地にあつて、そのころ田九町、山林十町、畑五町を持つていたというから、相当なもので、いい伝えには所有の馬に十五個の鈴をつけて鳴らして歩いたともいわれている。

翁の父上彦平さんは、そのまた父の儀平さんの三男として、父の四十九才のときに生まれ、儀平さんは八十四才の長寿でなくなられたので健康にも恵まれた人であり、彦平さんが思慮深く頑健であられたことも、この父の性をうけついだものと想像される。

彦平さんは家業の農業に従事していられたが、寡黙・謹厳の人柄で、村人にも信頼され、村のもめ事についても、この人が顔を出せば鶴の一声で解決したという徳望家であつた。

しかし性来頑健な人ではあつたが、惜しいことに、男盛りの五十一才で、明治十年七月三十日に当時猛烈に流行していたコレラ病に罹り、就床僅か半日で、幼い多数の子供を残して急逝されたのである。

明治十年は有名な西南の役の起つた年で、熊本城を中心に、九州は戦乱の渦中となつたのであるが、コレラ病が大いに流行し、西郷のたたりがこの流行となつたと迷信され、西郷病の名さえあり北海道も屯田兵の帰還と共にコレラが流行したのである。

父上彦平さんがなくなられた時、翁は十五才であつた。しかも母上そでさんは父の死の前年明治九年になくなられて、ここに長兄幸吉さん十八才を頭に、翁は十五才、弟弥市さんは十二才、鷹平さんは九才、末吉さんは六才、末弟卯七さんは三才で、六人の子たちは、親類はあるが、父母なき家族となつたのである。

父の彦平さんは性来頑健であつたが、コレラ病にたおれ、母のそでさんは元来蒲柳の質であり、養生にも注意されたが、多産のせいもあるが、割合に若く四十二才でなくなつたのである。

翁の先祖代々は長命の人多く、翁の兄弟も末吉さんを除く外は長命で、長兄幸吉さんは昭和十六年八十二才を以て没し、弟弥市さん鷹平さんもそれ／＼八十二才の長寿で逝き、末弟卯七さんも七

十二才までも生きのびた。

なお伯父さんの茂吉さんは七十才、此平さんは六十四才でなくなられたが、この此平さんが井田家に養子にゆき、札幌に永く在住する井田吉平さんはその子であるから、翁にとつては真の従兄弟である。

幼少のころ

翁がおりおり感慨深げに語つた幼少のころの思い出の中から、その生い立ちの一端をうかがうことにする。

「わしの幼い時分には、まだ学校はなかつた。それで寺小屋に通つて勉強した。その寺小屋は家の近くにあり山伏が住んでいて、丹城院といつておつたが、ここで四書や五経などを習つたのだが、もとより不完全な教育ではあつたが、幾分の読み書きの力がつけられた。幼い時の記憶にこの寺小屋へ年末に二合位の鏡餅と二銭の束修を持参し、そのかわり、正月の十一日に寺小屋で一同が楽しく御馳走になつた。

また幼い時は少し足がわるかつたので十一才のとき、両親の勧めで村のお寺の小僧さんになる

ことになつて、幸吉さんに連れられて行つたが、その後また一里半ばかり離れた他のお寺に移り、前後二年あまりはお寺に生活したが、おかげでお経も一通りは覚えたが、何となく陰気なお寺がいやになつて、ついに家に逃げて帰つた。

そして十三才のときから、また父の膝下で農業の手伝をして辛棒した。当時は川に魚が沢山いたので、これを釣つたり、また掬つたりして、獲つたものは幼い弟たちと食べるのが楽しみであつた。

また海へ行くことも好きで、時々蛸など獲つて来たが、蛸をとつた思い出は今も愉快で忘れることができない。

また肥料取りに一里半程ある養島に船を漕いで度々出掛けたが、船を漕ぐことにかけても人一倍上手で、他人には敗けない自信があつた。

また十三才のころ、家事の傍らある士族の子弟で相当教養のある人のところに通つて勉強したが、ここでは相当の力がつけられた。前にお寺にいた時にも、和尚さんから「お前は頭がいい」と賞められたが、この先生からも「記憶力が強い」と褒められたのは嬉しくもあり、励みがいもあつた。

父彦平さんはこの頃一里半ほどある部落に草取りの出面にも行き、その行きがけに、薪を背負つて長さ二尺廻り目二尺、それを六把で僅か四銭から六銭で、全部を売つて、これで母の好きな

焼酎を買つて帰つた。

父は禁酒家で一滴も酒は口にしなかつたが、母は養生のせいもあつて時々これを嗜んでいた。ある時焼酎を新しい土瓶に入れて来たところが、途中で全部瓶に吸われて空つぽになつたことがある。この時は流石酒きらいの父も残念がつたことを覚えてゐる。

またこの時分の一日の出面賃は七錢で、朝早くから夜おそくまで十二時間も働いたのだ。しかし一日の出面賃七錢で、米一升五合は買えたものだから、いまから考えると、世の推移のほどがしみじみ思われる。」

以上は翁が語つた幼少のころの思い出の一端であるが、翁の幼少のころは、幕末から明治初年ではわが国の学制の頒布は、明治五年であり、それまでは近代的な国民教育は行われておらず、学問は士人以上のものとして庶民には閑却されており、わずかに寺小屋に通つて学ぶに過ぎないのが、全国の実情であつた。

また思い出の一端から見ても、当時の内地の狭い地積の農家生活の内面がうかがい知られ、十一才から寺にやられ、十三才から家事の手伝に稼働してゐるのである。

翁はお寺でも、私塾でも記憶がよいと褒められてゐるのは、一つは天稟でもあつたろうが、向学心が強かつたものと察せられる。

しかもはげしい労働に従ひながら、疲れることも知らず、自然に親しみ、学習にはけみ、父母への孝心深く活動したことについて、その逞しい精神力は、幼少のころからあらわれており、その精力的活動は後年苦難に処していよく撓まず、成功の素地をつくつたもので、艱難また自らを練成したものだといえよう。

父の没後・少青年時代

十四才で、母を失ひ、十五才で父をなくした翁は、十八才の長兄と共に、一家の柱となつて、四人の弟を養わなければならなかつた。

家産といつても少く、父の野辺の送りがすんだ後は、徒らに悲歎にだけはおれず、長兄と共に絶対に親戚の厄介にならぬ決心で、家業の外いろ／＼な出面にも出掛けて懸命に働いた。その年弟末吉さんもなくなつた。

かくて兄弟五人は貧しいながらも励ましあつて仲よく暮らし、長兄と翁は父母のかわりに、弟達を守り育てたのである。

翁の語つたところによると、

「働かなければ、その日その日にも事かくので、勢い懸命に働いたが、わしは郷里ではいつし

か『働きの名人』といわれるようになっていた。当時の日傭は賃錢一日七錢であつたが、隣の米屋にもよく米搗に行つた。普通一日一俵搗くのが一人前であつたが、わしは半日に二俵搗いて十四錢を得、更に午後は山の開墾に従事して十錢稼いだ。また浜つづきであつたから、夜は浜の米倉に米の番などに行き、七錢を働き、合計三十一錢という、他人の三四倍も働いたことさえあつた。随分はけしい労働にもたえたので、従つて力も相当にできて、二十四才のとき、友達と力試しをしたことがあるが、四斗二升入を二俵、天秤にかついで薙の上を四角く三べん廻つて歩いたことがある。

この力試しの友達が刀弥久平さん(二十三才)と宝崎亀吉さん(二十八才)で、三人共同で杣夫をやり、その仕事のきりあひの時、三人各自白米七合と小豆貳合ずつ出し合ひ、宝崎さんの妻君におはぎを造つてもらひ、これを食べたがなお足らず、更に三合ずつ追加して、結局一人で一升一合ずつ食べた。これが長い一生を通じての大食のレコードであつた。しかし宝崎さんの妻君には、一つも差上げなかつたことは一生の痛恨事と思う。

それから二十六才のとき、嫂の親類の城戸芳平さんから、小倉の王子製紙会社の分工場の仕事の手伝を頼まれ、昼は工場に、夜は足で踏む水車を動かし、一週間不眠不休の活動をし、自分ながら人間というものは、こんなによく働けるものかと、つくづく感心した。しかしこんなに働いたが左足の悪いのを理由に解雇されたのは残念であつた。

若い時の趣味は義太夫で、語ることも好きだつたが、聞くのも楽しかつた。酒はあまりやらかつた。

昔を顧みれば夢のようで、時勢の移り変りは、ただ驚くの外はない。」

以上は翁の断片的に語つた少青年時代の思い出であるが、翁が生まれ、幼少から青年時代にかけては、封建制度が崩壊すべくして、崩壊した時代で、日本の資本主義の発達も未熟な時であり、下級士族や農民などが困窮したもので、しかも両親の死後幼い弟達を擁して低賃銀のうちに、つづさに生活の辛酸を嘗められたのである。

しかしこのこの辛苦艱難こそは、翁の不屈不撓の精神力を培つたもので、不遇の間にあつても、人生を明かるく考え、近親に対して愛情を深かめ、勤儉力行して、未来に何かを期していたものである。

翁の渡道

父祖の業をつぎ、故郷に兄弟協力して生活の充実を図つていた翁に、一大運命の転回がもたらされた。

それは住みなれた故郷を後にして、遠く北海道に渡航することになったのである。

明治二十三年翁は父上の死後十三年を迎え当時三才であつた末弟卯七さんも、既に十六才となつており、長兄幸吉さんには嫂を迎えられた。

も早一応父母なき家に対する心配も少くなつた翁の二十八才の時である。翁も青年期から壮年期に入り、自ら一家をたてる機会にも際会していたのである。翁は渡道の動機についてはこう語られた。

「わしが二十八のとき、わしの家内となつたトヨ子の親類に当る人で、農商務省の技師をしておられ、北海道製麻会社の建設の責任者であつた吉田健作さんの手引で、北海道で亜麻を耕作することになった。その時、稲童から同志の西武市さん(四十五才位)と加来戸市さん(二十一才位)とが一緒に北海道に渡ることになった。

当時は別に遠大な望みがあつたわけではないが、まあ北海の新天地に働いて、現金の百五十円も持つて帰りたい。というのは当時郷里の水田は反三十円位であつたから、まず百五十円で五反歩の水田が買えるし、またこれまでの貯金と足らぬところは兄の援助を得れば、併せて一町歩の水田を経営することが出来る。当時は一町歩あれば、まず一生食うに困らぬと信じたのである。

こうしたことが直接の目的で郷里で独立したいという希望からであつた。たつた一町歩の水田を得るのぞみ、今から考えると実に馬鹿けた話だが、実際にそう思つたのだ」

この話は決して馬鹿けた話ではなく、凡そ明治時代に北海道の渡航を考えた人の大部分が、一もうけしたら、何がしの金を抱いて、懐かしい郷里に帰らうと思つたのに違いなく、本道の寒冷な氣候も、誇大に考えられていたので、無理からぬことである。

氣候の温和な九州から北海道への移民も、明治十八年ころから次第に増して来ていた。屯田兵として九州地方から入植したのも明治十八年からである。

翁は既に壮年に達して、自ら一家を創設する希望を以て、北海道渡航を考えたのは、当時の希望は一町歩の水田があれば、一生食うに困らぬと考えた抱負は、よし、馬鹿けた小さい希望と今では考えられるが、一步一步基礎をかためた翁の人生にとつては、あくまで真実のことであり、向上・独立をめざして北海道渡航は実に意義深いものである。

渡航の日は迫り、明治二十三年三月六日の早朝城戸熊次郎さん夫妻その他黒田村からの総勢十名位の一行と共に稲童を出発された。

その日から札幌に旅装を解くまでのことを翁はこう語っている。

「出発の日、明治二十三年三月六日、その日は珍らしく雪がちちら降つていた。(九州では二月には梅の花が咲く)その昔井伊大老が櫻田門外で殺された雪の朝などをわしはふと思ひ浮べていた。すみなれた稲童を離れる、また感なしとはいえぬ。見送りの人たちに送られて、わしら一行は小倉まで馬車に乗つた。その馬車の運賃は小倉まで僅か四錢に過ぎない。

小倉についたのはその日の午後三時ころで、直ちに小蒸汽船に乗せられて下関についた。ここに三泊して三月十日品川丸に乗船して、日本海を山陰の海岸を通つて、裏日本の敦賀・伏木・新潟等に寄港したが、船は佐渡にも行き、また新潟に戻り、その後、時化のため、恵比須に逃げ、新潟にまた戻つたりして、酒田・青森・室蘭・函館等に寄港した。函館に寄港した時も風が強く臥牛山のかげに逃げ、風を待つて、小樽についたのは、下関を發つてから十五日目である。

またわれ／＼稲童からの一行は、城戸熊次郎さんを団長格として郷里を出たのであるが、当時の村の人は、今なら南米へでも移住するかの様に、水盃などをして別れを惜しんでくれた。その情景は今なおありありと眼底に浮んでくる。

下関から乗つた品川丸は三百屯ばかりの小さな蒸汽船で、途中の風波もあり、半月もかかつてようやく手宮についたので、当時の航海も思いやられるが、何の施設もないので、船中は全く無聊に苦しんだが、この船賃総計は一人三食付で十五日間僅かに九円余であつた。

小樽で北海道の土に最初の第一歩を印したのは、流石に感慨も深かつたが、その夜は越中屋に投宿し、久しぶりの畳の上にぐつすりと思つた。翌日は客車が満員であつたため、貨車に乗せられて札幌に向い、停車場で、関係者に迎えられて、山形屋に旅装を解いた」

以上翁の語つた渡道の様子を考えて見ると決して今日の旅行で考えるようなものでなく、九州と



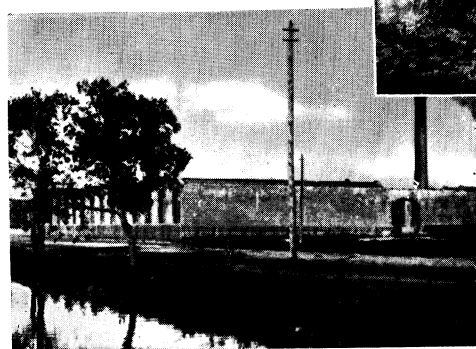
吉田健作氏とその碑



コンスタン・ウヴレヒト氏



亜麻の収穫



北海道製麻会社

北海道とは異境万里の地にも匹敵し、水盃さえして別れたことにも、その片鱗がうかがわれ、三月の末当時漁夫たちが、汽車に乗ったせいにか、翁たち一行が貨車に乗せられて札幌に向うなどは、西部劇の映画に見られるアメリカ開拓物語にも似た様子であり、開拓者の移住に相応しいものが感ぜられるのである。

翁は一家創設の希望、独立の生活を目ざして渡道した。そして直接の目的であつた百五十円の貯蓄の目標も達せられたが、翁が到る処に青山ありとする心境はまた随所に主となる境涯を生んで、北海道を骨をうずめる地と定めるようになつたことは項を改めて説くこととする。

渡道は翁の運命の一大転機であり、後の成功につけても、翁は渡道の手引をした城戸熊次郎夫妻並びに吉田健作さんに対し、深く恩誼を感じ、生涯深く心に銘じているのも翁の人柄をよく表わすものである。

亞麻耕作に従事

札幌に着いた翁たちの一行は、直ちに当時農商務省の技師で、官命によつて北海道製麻会社の建設責任者であつた吉田健作さんに面会して、将来の方針について親しく指導を受けた。その結果、

翁と西、加来の両君は当初の筋書通り、亜麻の耕作に従事することになり、しかも吉田さんの紹介で、千石さんという人の所有する札幌郊外札幌村丘珠の烈々布の土地を借受け、早速亜麻の耕作に著手した。三人とも不慣れではあつたにかゝらず、天候が良かったせいもあり、立派な作がとれ特に翁の作柄は品質良好であると、指導に当つていたベルギー人の技師コンスタン・ウブレヒト氏に賞められた程である。これが後に翁が北海道製麻会社入りをする動機ともなつたのである。

ウブレヒト氏は明治二十二年来札し、翌二十三年帰国されたが、亜麻の耕作・浸水・製線の技術を指導して、その功績は没すべからざるものがある。

渡道することについては、各人それぞれ相当固い決意をもつて来たのであるが、一行三人の内、妻と二人の子供を郷里に残して来た西武市さんは、荒涼たる当時の北海道の生活がいやになり、しきりに郷愁を感じ、また独身者の加来戸市さんもまたこれに共鳴し、翁の語るところによれば「ある夜中に目をさますと、同志の一人がすゝり泣きながら、郷里に手紙を書いている。これには流石に胸うたれるものがあつた」といわれている。

かくて亜麻の収穫を終えた同志二人は帰国することとなつた。

翁もまた同志の帰国につき、自分の前途を考え家兄にこの模様を書信したが、家兄は「いやになつたら、何時でも帰れ、旅費はすぐ送金する」と返事をくれた。しかし翁の肚はこれによつて、却つて固められ、所期の目的を貫徹しようとの意欲は高まり、且つ城戸夫人などから帰国を断念する

よう熱心に奨められたので、断然帰国を思い止まつたのである。この時こそ翁の生涯の運命の分岐点であつたであろうし、薄志弱行の徒でない翁の面目躍如たるものがある。

製麻會社入社・在職時代

同志の二人が帰国した後、明治二十三年九月、翁は勧めによつて北海道製麻会社に入社した。はじめ勤務は琴似製線所で、ついで雁木製線所にも兼務となつた。主として人を使う仕事であつたという。

入社後間もなく琴似製線所から火を発して工場が全焼したので、その責任を感じて、早速辞職をして、予ねて当別太に土地三戸分（十五町歩）を買つて置いたので、婚約中の竹中トヨさんと郷里から弟の弥市さんと呼びよせて、ここに農業を営もうと決意し、単身伐木開墾をはじめたのである。

ところが会社から人が来て、再び入社して欲しいとの切なる申出があり、これを無下に断ることもできず、これに応じて、二度の勤めすることになつた。

入社当時の事情を知るものに出勤簿が今でも残されている。翁は当時植田宅蔵と称しておられ

た。

翁の出勤は明治二十三年九月三日にはじまつており、当時は日給二十銭を給されている。なおこの出勤簿には北海道製麻会社職工規則が載せられており、同規則は二十九条から成り、第一条には工場に雇使するものを職工と称すると書かれており、第四条には工場の業務を蒸汽・正線・屑線・粗紡・精紡・操糸・晒白・製織・整理・修繕・倉庫の十一掛に定め、第六条には技手・職工の男女の等級日給を定めている。

技手は一等日給壹円から十二等三十三銭までであり、職工は一等日給三十銭から十二等八銭までとなつてゐる。しかも第七条の勤務時間は一日十二時間以内となつてゐる。なお徹夜及び定時間外の早出・居残については別に手当を支給される定めがあるので、勤勉な翁はこの超過勤務をしたものと思われる。

翁の最初の日給は一日二十銭であるから、職工六等であつた。当時会社の下宿料は一日二十銭であつたと翁の語るところであるから、既に壮年に達した翁がこの低賃銀のみで働いていたとは考えられぬ。しかも勤勉力行を認められ、年に何回も昇給してゐるのである。しかも復職の際は当別製線所の浸水係・工業係となり、同工場の建設にも当り、会社も望んで無理に復職させたので、優遇する意味もあつて、当分出張にしてくれ、毎日当別から札幌本社に出張させることにしてくれたので、車馬賃・日当等で相当の収入が得られ、貯金も出来たのである。

そして渡道三年後には所期した百五十円を家兄に送り、兄の名義で、山林と田畑を購入された。またその年即ち明治二十五年七月五等技手（日給六十一銭）となり、雁木製線所詰を命ぜられ、翌廿六年三月かねて婚約中の竹中トヨさんと結婚したのである。

翁の語るところによれば

「その時分の支配人は宇野保太郎さんで、後年常務になられた人である。鈴木鈴馬さんはまだ歳前高等工業を卒業したホヤホヤの青年技師で、よく機械の修理などについて議論をしたものである。学問通りには行かぬもので、却つてわたちの実地上りの経験の方が役に立つたものである」

と述懐されている。

翁の勤勉と仕事熱心は上司の認めるところとなつたが、北海道製麻会社の事業も創業当時には亜麻の生育に夜盗虫の被害などもあり、宮部博士などの協力によつてこれを防除し、また二十二年僅か二十町歩の亜麻作付したに過ぎなかつたものが、二十三年には二百八町歩に拡張され、日清戦争がはじまるとその需要は急激に増加し、戦後諸事業の勃興の気運のうちにますます発展して、二十九年には一躍五千町歩近くまで作付が拡張される有様であつた。

翁の当時の追憶には

「このころの会社の景気はすばらしいものであつた。社内の人の上も下も、皆一生懸命に働い

たものである。近頃のように労働争議もなく、骨身惜しまず、真剣に働いたものさ」と述懐されている。

翁はかく累進して二十九年には二等技手となっていたが、この年下半年の賞与として金三十八円を給与されている。

会社の発展と共に翁の信用は上下に加わり地位も向上したが、明治三十二年一月余儀なく退社するに至る事件が発生した。

それは翁が雁木製線所長の兼務をしていた明治三十一年十一月十八日同所の外囲から出火して工場一棟を全焼し、しかも囚人一名が焼死した惨事が出来したのである。その時責任上月俸十分の二の減俸に処せられた。その上また翌三十二年一月七日、その日は会社の恒例の新年宴会が札幌市内の料理屋で開かれ、一同大いに歓をつくしている時、同じくまた雁木製線所野囲一棟が火災に罹り、僅々数十日の間に二回の災厄を生ぜしめたことは、その原因の如何にかゝわらず、監督不行届の致すところと深く責任を痛感され、翁は早速辞表を提出し、辞意を申出たのである。

会社ではいろいろ同情してくれたが、同年一月二十五日附で免職の発令をうけ、同社を退き多年住みなれた社宅を去つた。



トヨ夫人晩年に近い頃の翁夫妻
(昭和4年)



壮年時代の翁夫妻と英武
少年
(明治37年)



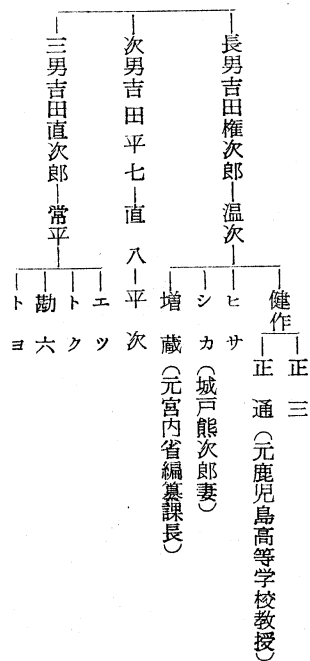
トヨ夫人先祖の墓

翁の結婚・トヨ子夫人

製麻会社在职中、翁にとつて、また植田家にとつて重大なことは、翁が生涯のよき協力者であるトヨ子夫人と結婚し、そして稀なるよき後継者、愛児英武さんを得たことである。

翁は既述したように明治二十六年三月、竹中トヨ子さんと結婚した。

トヨ子さんは日本製麻界の先覚者吉田健作さん及び翁の渡道の手引をした恩人城戸熊次郎さんの妻君シカさんの復従兄弟に当る人である。今トヨ子さんの家譜を示せば左の通りである。



この家譜が示すように、翁の渡道と渡道後の指導にあたり、翁の運命の転回の契機をつくつた吉田健作さんと城戸熊次郎さんの妻シカさんと復従兄弟に当るトヨさんと良縁を結んだのである。

トヨさんも福岡県京都郡の人で、郷里のよい家柄の娘さんだつたが、母が継母であつた関係から復従兄弟の吉田健作さんが札幌に伴つて、翁が渡道した同年の明治二十三年に来て、健作さんのお宅から製麻会社に通勤していた。翁も二十三年の秋から同社に入社し、相知る仲となり、しかも翁の実直勤勉を認める吉田さんや、その人となりを熟知する城戸夫妻の勧めにより婚約を結び、翁が渡道の宿志を果たし、また前記のように五等技手として雁木製線所長兼務ともなつたので、明治廿六年三月琴似製線所の社宅で、質素ながらも希望に燃える華燭の典が挙げられた。

翁はその時のことを追憶して、

「われわれの結婚式は質素にあけられた。結納金は五円で、披露宴の賓客は七人位であつた。

トヨ子は結婚後も本社に勤めて、往復とも馬車で通勤し、夫妻共稼であつた」と語られた。

翁が本道に根をすえたことにはトヨ子夫人を得たことにも大きな原因がある。

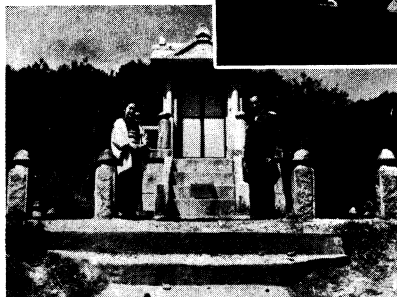
トヨ子夫人の性格は真面目で、且つ貞淑・質素で、働き好きな人の褒め者であつて、その献身的な内助が、翁の成功の半面を荷うもので、当時翁は三十一才、トヨ子夫人は二十五才であつた。

夫婦は琴瑟相和するように、共稼で質素の中に、家産の充実を期していたが、日清戦争が起きて



稲童の植田家墓

稲童の英霊廟



翁帰郷の途中奈良に遊ぶ



会社の事業も拡張の一端を進める時、トヨ子夫人はみごもり、明治二十七年十月十三日、当時の任地札幌郡当別村字六軒町の製麻会社工場社宅に長男英武君を奉けた。父は三十二才、母は二十六才の初児としてよき子に育つに至つた。

トヨ子夫人の苦勞と逞ましい勤勞はその後翁が製麻会社退職後にある。転々と職業をかえる時の翁の精神的支柱ともなり、精米、製材の業を営むようになってからは、朝三時に起床し、夜は十時まで作業を毎日くりかえしたのであり、内助の功は実に大きい。トヨ子夫人は昭和五年九月腸チフスにかゝり、天使病院に三週間入院し、その月二十七日、病勢あらたまらず、なくなられた。行年六十二才であつた。戒名は豊徳院信蒼妙秋大姉といい、豊平墓地に葬むられた。

翁はトヨ子夫人の内助を感謝していたが、夫人の実家の兄の後妻の兄弟が詐欺され親譲りの財産を他人にとられてしまったのを買い戻してやつた。これは水田二町歩であり、この家はいま村一番の供米農家であるという。

翁の郷里訪問

翁は一家の独立を図るため渡道されたが、勤儉産を治めようとして渡道第一年に当別太に土地三

戸分十五町歩を買い取つたことは既述の通りである。

また製麻会社入社後三年目には、所期の百五十円を家兄に送金して、山林・田畑を購入してもらった。

こうして恒産なければ、恒心なしと夫妻ともに勤儉産を治めつゝあつた。

既にして製麻会社入社後は、帰郷を断念して北海道に根を下ろした翁は、到る処青山ありの信念で、札幌に永住と定めた。しかし、翁とても望郷の念なきはずはない。たゞ悉々と徒らに郷里を想うの徒ではない。むしろ望郷の念が強ければ強いだけ、また渡道の決意が固かつた為にこそ、所謂錦を衣て故郷に帰り、懐かしき親戚故旧にもまみえたかつたのである。

翁は既述したように明治二十九年二等技手となり、当時盛運に向いつゝあつた北海道製麻会社の雁木製線所長の兼務となつて、一応地位も向上し、待遇も異数に昇進したのである。

かくて翌三十年、翁が渡道しての七年間、トヨ子夫人と結婚して五年目、その愛児英武君も四才となつたので、妻子を伴つて第一回の郷里訪問を決行したのである。

この旅は渡道の際と異つて旅行も便利になり、一家揃つての和楽の旅は、平素のつましき生活のまゝ、如何ばかりの楽しきものであつたであらう。

渡道の際、水盃までもして別れた親戚故旧に逢い、久々に墳墓の地に祖先の供養を営む翁の心境は察するに余りある。

翁はその後も度々郷里を訪問され、連年これが続けられたこともある。しかも翁はその度毎にトヨ子夫人や英武さんを伴うのを常とした。

翁は郷里訪問の機会に、先祖の墓碑を立派に建造したり、小学校に御真影奉置所を寄附している。これも敬神崇祖の翁の心事を現わすものである。小学校に寄附された御真影奉置所は今も視山中腹に移されて、村の英靈をまつる廟となつてゐる。

翁が郷土訪問は単身で行われず、必ず家族と共に行われ、糟糠の妻たるトヨ子夫人と行を共にし、老いては、英武夫妻にかしずかれて行きお孫さん達まで、翁の故郷に特別な親しみを感じているのも翁の感化の致すところであり、翁が渡道して今日既に六十四年、翁の故郷はすべて黄泉不帰の客となつてゐるが、北海道の植田家と翁の故郷稲童の人の間に、温き交情が結ばれているのは美しく、今年翁の遺骨の一部は故郷稲童の翁の建設したお墓に永久に安らかに眠ることになつてゐる。

製麻界の恩人吉田健作氏

吉田健作さんはトヨ子夫人の復従兄弟に当たり、翁が九年勤続した北海道製麻会社の創立の大恩

人であるので、特に吉田さんのことについて語る必要がある。

吉田さんは翁の郷里に近い、同じく福岡県京都郡の稗田村の出身で村上仏山について学んだ秀才で同門の末松謙澄さんと共に、明治の歴史上の人物である。二十四才のとき上京して内務省の勸業寮に入つて農学生となつたが、殖産興業については大の熱心家で、早くもその才腕を認められて、内務省技師に抜擢され、農工業調査の命を帯びて明治十一年フランスに留学し、彼の地で専攻したのは亜麻紡績のことであつた。明治十四年帰朝し、農商務省少輔品川弥二郎氏に「リンネル製造創設書」という上申書及び予算明細書を提出して、官業としてこれを創設することを主張された。しかしこれは当時農商務省にいられた高橋是清氏が、「製麻非官立意見書」を提出されたので、官業としては成立しなかつた。

高橋是清氏は当時幾多の官業が政府によつて営まれたが、それが失敗しているので、官営は反対であるが、政府が天下にこの事業を知らしめ、民業として興起さすべきであると唱えたからである。しかし吉田さんはこれにひるまず、なお研究を怠らず各地に出張して麻業調査をすること三年、その足跡は殆んど全国に及んだのである。そして遂に明治十七年六月、近江麻糸紡績会社を設立し、十九年九月、大津市の郊外に工場を開いた。これが斯界の濫觴であるが、吉田さんはその機械を購入するために、官命を帯びて再び渡欧し、帰朝後もその建設の責任者であつた。

またこれよりさき、明治十五年に吉田さんは亜麻視察のため来道し、室蘭兵村で亜麻茎を見て、

北海道が亜麻耕作の好適地であること並びに亜麻を原料とすることによつてのみ欧羅巴の製麻事業に対抗し得る確信を得て、当局に進言された。

わが国に亜麻が始めて栽培されたのは、明治七年のことと、当時駐露公使榎本武揚氏が黒田開拓長官に、露国の亜麻種子を送つてこられ、それが開拓使の農園に栽培されたのが起りであつて、その種子は繊維採取の目的で、漸次屯田兵村にも頒布されたものである。

その後明治十九年道庁が設置されてから、各種の民業が盛んになるようになって、岩村初代道庁長官の努力によつて北海道製麻会社の創立に伴つて企業化されるに至つたのである。

この企業化に当つては吉田健作さん及び同じく農商務省の技師横田万寿之助さんに負うところが実に大きい。吉田さんは実に本道製麻事業の育ての親といつてもよい。

しかし、若い時から精根を傾けて製麻事業に尽瘁したことと、結核のため健康を害されて、明治二十五年二月五日逝去されたのは誠に惜しいことであり、享年僅かに四十一才であつた。

本邦製麻事業の発祥地である琵琶湖畔の大津市に、明治二十七年二月、氏の功績を讃える彰徳碑が建てられた。碑文はもとの同僚であつた従四位勲三等田中芳男氏の撰文になつている。

植田翁は吉田健作さんが外国に機械の購入に行かれた際、外国の商社は吉田さんにコンミツションとして五%の金員を寄贈しようとしたのに対し、これを受けず、機械の精良を期してくれるように依頼したことをトヨ子夫人に聞いており、その清廉な人格を殊の外尊敬を払つておられた。

吉田さんと共に村上仏山に教えられた英才末松謙澄さんは「方今工業が旺んに興るの日、君の如き有為の人材を失つたことは国家のために実に惜しむべきことである」と痛歎されたというが、同碑にもこのことが書かれている。以て吉田さんを最もよく知る末松さんが「殖産興業のために偉材であつた」ことを証明するものである。

因みに末松謙澄さんは明治時代の政治家でかつ文学者であつて、吉田さんと共に同郷の村上仏山の門に入り、漢学を修めること七年、明治四年志を立てて、東都に英学を志し、東京日々新聞社に入りその編集に従事し、文名とみにあらわれ、伊藤博文公の知遇をうけて、明治八年黒田特命全權大使に随つて朝鮮に使ひした。明治十年の西南の役には山県参事の幕僚となり功績を表わし、明治十一年、吉田さんと期を同じく外国派遣となつたが、末松さんは英国公使館書記となり、ついでケンブリッジ大学に学び明治十九年帰朝された。そして文部省に入り、ついで内務省に転じ明治二十年県治局長に進み、同二十三年福岡県から衆議院議員に当選し、同二十五年八月法制局長官となり、日清戦役に当つては高等捕獲審檢所評定官に補され、功によつて勲三等旭日中授章を授けられまた男爵を賜わりその後貴族院議員、逓信大臣、内務大臣、枢密顧問官となり、勲一等を授けられ榮譽高官を拝授して郷党の誇りとするところであつた。

また英文成吉汗を著わし源氏物語を英文に抄訳するなど、わが国古代文学を外国に紹介した最初の人であり、明治二十一年文学博士を授けられ、明治四十年学士院会員となり、大正七年には法学

博士が授与されている。

大正九年十月、六十六才を以て逝去されたのである。

吉田さん、末松さんは、明治時代の福岡県京都郡出身の郷党の誇りとする人物であつた。

北海道製麻會社

翁が渡道した契機に縁あり、また明治二十三年九月から三十二年一月まで勤務した北海道製麻會社について簡単に書く必要がある。

明治二年明治維新の政府は北海道の開拓を強く推進するため、北海道開拓使が置かれた。

そしてその年札幌には北海道を統轄される札幌本府の建設がはじまつたのである。明治三年二月島判官の東京召還によつて札幌本府の建設は一時中止されたが、明治四年再び札幌の経営がはじまり、開拓使庁も札幌に置かれて、全道の施政は札幌に発することゝなつた。

札幌本庁では北海道の殖産興業を進めるため諸種の官業が興された。そのうち製麻事業があり、はじめは大麻が主であり、松本大判官（札幌本庁主任）の奨励によつて明治六年ころから次第に発達の機運に向つたのである。しかも屯田兵村が発達すると共に大麻の栽培は兵村の主要作物として盛んに栽培されるようになった。明治十四年の麻の生産高は一万八千二百余貫に達し、札幌区と石

狩郡がその七十五パーセントを占める状態にあつて札幌附近には麻が多く生産されたのである。

然るに亜麻の栽培については、前述のように明治七年当時駐露公使として樺太・千島の交換条約につくしていた榎本武揚氏が露国から同国の亜麻種子を黒田長官に送つて来られ、開拓使農園に試験栽培されたのである。それが大麻から亜麻に転換することについては吉田健作さんの建言によるもので、これも既述したところである。当時は三県時代といつて、開拓使が廃されて、函館・札幌根室の三県が置かれ、この三県分治は弊害もあつて、統一もかけ、しかも時勢は経済界の不況時代であつたので興業の上にも見るべきものがなかつた。

三県分治の弊は国の朝野の論議となつてついに明治十九年北海道庁が設置されたのである。この頃日本の経済界もようやく好調に向つていたが、初代岩村長官は、開拓使時代の官業を民間に払下げ、大いに民業を興すと共に、殖産興業のためには府県の資本を入れ、これを助成して産業の発展を期したのである。こうして諸業が発展する中、特筆すべきものは製麻・麦酒・製糖の会社が設立されたのである。

製麻事業については、明治十九年十月道庁理事官堀基氏は本邦製麻界の先達吉田健作さんの「麻事改良説」に共鳴し、その具体的改良研究を進めるために、農商務省に吉田技師の派遣を願ひ出たのである。この道庁の要請が容れられて、斯界に重きをなしていた吉田健作、横田万寿之助の両技師が農商務省から官命事業監督に任命された。また岩村長官は自ら本省及び東京・京都・滋賀の有

力者の間に奔走し、そして民業としての北海道製麻会社を創立させた。これは明治二十年五月のことである。資本金は八十万円、本社は北七条西一丁目に設けられたのである。

道庁は当時払込資本金に対し六か年間五朱の補償恩典を与えたのである。

北海道製麻会社は明治四十年七月日本製麻会社と合併し、帝国製麻会社札幌支店となり、更に昭和十六年八月太陽レーヨンと合併し帝国纖維札幌支店となり、昭和二十五年七月、帝国纖維は分割して帝国製麻札幌支店となつて今日に至つておる。

翁は裸一貫で渡道し、この製麻会社に勤めて一応生活の基盤をつくつたが、不慮の災厄から余儀職したが、会社の人ともよく親しみ、退職後も会社に顔を見せ、会社もまた退社後何かの記念の会合には旧い関係者の一人として迎えて、後年には折々上座にすえられたりしているが、これも翁の徳の然らしめるところで、天を恨まず、人を恨まぬ翁の人柄を示すものである。

しかも製麻会社に勤務したことが、翁が機械に対する知識を培つて、後年製材業を営むことの上にも大いに役立つたものと翁自身の述懐するところである。

製麻會社退職後の職業轉々

人生には順境もあれば、また逆境もある。翁が不慮の災厄によつて製麻会社を退いてから数年は

逆境にあつて不遇であつた。

会社を辞めて俄かに無職になつた翁は社宅を出て、大通西八丁目に家を借りて畳建具を入れて妻に留守をさせ、自分は蘭越の共同農場に監督となつて赴任したが、すぐその年四月札幌に帰り、徒食の上に家賃が高いので、北三条東二丁目目の郡司肉屋の借家に移つた。この家賃は月毫円五十銭であつた。また元製麻会社時代の小田という友人の勧めで、北八条西一丁目角の元原田という人が経営していた十五間もある大きな下宿屋の跡を借りて下宿屋を始めた。初め畳建具の修理に百円程かけ二年程やつて見たがまんまと失敗して二百五十円ほどの赤字となつて馬鹿らしくてやめられた。

その時分の下宿料は月四円から五円で、三か月分も払わず、喰い逃げをしたものなどもあつた。次には製麻会社の屑糸を買い、これを二本につなぎ一本だけ新糸を用い、三本で綿糸をつくり、鮭網をつくることもやつて見たが、これは少しも売れなかつた。何故なれば鮭網は丈夫な越後麻でつくつたものがあつて、翁たちのつくつたものは弱くて使ひものにならなかつたからである。この事業は元製麻会社の技術屋の村上道太郎さんと西田さんと三人共同でやつたのであるが、うまく行かぬので早く見きりをつけた。もつとも出資は翁のみであつたから翁の損ですまされた。これは一年程でやめて次は麻糸をつくるために野幌から精米機械を買つて来て糸をかけるように改造した。この工場は現在の木工場の場所、建物は三間半に十三間という相当大きなもので白二十本、機械は前記の村上道太郎さん、運転は翁がやられた。これもうまくないので次はこの臼を利用して

精米業を創めたが、精米とはいふものの、実際は賃働きで、雇男二人を使つたのであるが、夜この若い衆が帰つたあとは妻トヨさんが汽罐を焚き翁と二人で懸命に働いた。トヨさんも労役によくたえ、夜は十時までも働き、朝早くから夜おそくまで文字通り共稼を続けた。

その内早搗が流行し出し、又一方道庁の三嵐技師が汽罐の検査に来て、その結果運転差止めをくい廃罐になつた。それから幸い製麻会社に適当な古罐があつたので、一時これで間に合わせたがこれもまた廃罐になつて困つてしまい、今度は大通の野島鉄工場に注文して見たが精米も思わしくなかつた。そして何か別な仕事をと方々尋ねて見て歩くうちに北五条東六丁目あたりの鉄道線路北側に蒸汽エンジンで製材をしているを見た。これはよいと思われて値段を聞くと六百円だといひ、わが家のボイラー蒸汽エンジンも同じものだからきつと製材に使えらうということになつて野島さんに機械の修理を依頼して製材をやつて見ることにした。しかしやつて見るとテンものにならない。その時後藤木工場の使用人が来られて、機械を貸してくれないかと相談をうけ、貸してやつたら改造して一時使用もできるよになつたが、しかし採算がとれず返還して来たので、また翁自身で始めたのである。かように会社を退職してからの翁は職業を転々と換えられたが、いつも幸運に恵まれず、悶々のうちにも早くも七、八年を経過したのである。

翁の語る所によれば、後年「この職業転々の時代の過去を夢に見るのは苦しかつた」と述べてゐる。

希望の製材機入手

こんな風に退社後翁の計画したいろ／＼の仕事は多く失敗に帰した。しかし製材業だけは順調に運ばぬものゝ、この事業だけはあきらめ切れず、なおも適当な製材機械を入手することに苦心し、その希望を棄てなかつた。

明治四十年に東京の博覧会があり、この博覧会に機械を求めることを決心し、そこでは色々な製材機を見ただれども気に入るのが見当らなかつたのである。落胆して遂に期待した製材機も断念して帰路についたが、幸運は不思議な所にあるものである。翁が室蘭に上陸したところ、たま／＼偶然の機会から製材機の掘り出しものを見つけたのである。これこそ翁が幸運へのいとぐちとなつたものである。

翁の当時の追憶には

「室蘭まで帰つて汽車に乗つたところ、人夫を五、六十人連れて乗つた人がある。その人は青柳猶吉さんといい、この人と偶然向い合つて話をしてゐる中に自分は秋田からの帰りだが、あなたの欲しいという蒸汽エンジンは私が持つてゐる。それは今遠浅駅にあるというので、百聞は一

見に如かずとすぐ同地に下車してこれを見見すると自分のところに丁度手ごろなもので、これこそ目頃から欲しい欲しいと思つていたものである。幾らにするかと問えば「何程でもよい。安くするから是非買つて下さい」という。そこで極めたかつたけれども出先であるから帰札の上返事をすることにしてその場は別れた。

然るにその人はすぐその機械を当方に送つてよこした。そして一月たつと青柳さんが札幌に見えられ「もう運転してゐるかと思つて見に来た」という。しかし当方ではまだ運転はしてゐなかつた。わしはあんたは代金も送らぬのに何故機械を送つたかと問うたのに、その人の曰く「あなたの顔には悪いことは決してせぬということがよく現われている」といわれた。

さて商談の際には悪い切つて値をつけたら僅か九百円で話がまとまり、その上鋳物製のテーブル機械なども追送して来たので、また野島さんに一応機械を整備してもらい、本式に仕事を始めるに至つたが、偶然の機会に念願のよい機械がしかも捨て値で入手できたのは実に有難かつた。

当時工場にはわしの外トヨが汽罐の焚き方及び製材の先取りをして他に若い男が一人雇つていたが、三人ともよく働いて、その内伴（英武君）も手伝うようになつた。ようやく順調に仕事が運ぶようになつたのである。その頃は夜は貸掲き、昼は製材をやつたが、その後貸掲きがなくなつて製材専門となつた。

なお当時の材価はシナ丸太、札幌当工場渡七九掛百石六十円位で今から考えるとウソのような

話であつた」

と述懐されているが、以上のように会社退職後不遇の境涯にあつたが最後に製材業を終生の業と選び、念願の良い機械を得て希望を達して成功へと生涯を切り開くことになつた。

さて次に札幌の製材業界について述べて見よう。

札幌の製材業

今も昔も本道は木材資源は頗る豊富である。従つて本道の開発に伴つて製材業も自然発達したのである。

古い記録によると、宝暦二年飛弾屋久兵衛が石狩山伐木を出願し、宝暦五年（一七五五年）今から約二百年前から毎年伐採高一万二千石、その運上金六百両として九年間の請負の切換を以て開始されたとある。石狩伐木は漁川の上流、夕張川の上流等に及ぶもので、その木材は石狩川口に流し出されて、石狩から船に積まれて移出されるものであり、その販路は、江戸、大阪であつた。この伐木のために、作業路がつくられて、伐木、搬出等には多数の出稼人も入り込み、アイヌもまた多く使役されたとある。飛弾屋は有名な山師で、飛弾国益田郡の出身で、松前藩の木材業を請負つた。

もので、飛弾屋の事業は石狩地方の地理調査の上にも、石狩の発展のためにも貢献したものであつた。

こうして札幌地方は昔木材が豊富であつたことは、飛弾屋の事業の古い記録でも知られる。

明治二年から札幌本府の建設がはじまつたのであるが、島判官の経営には、秋田地方からの職人夫が入り込み、建設の歩武が進められた。札幌再経営の際には、明治四年函館の中川源左衛門が棟梁となり、土方頭吉川源次郎を率い、割頭大岡助右衛門、福原亀吉等も指揮し、また木材の伐採には、水原寅藏が当り、山鼻、月寒、豊平等の森林から盛んに木材を伐採し、また南部地方から、桧材、秋田地方から杉材の家屋切組材料三百戸分を移入して、大いに建築事業が起されたのである。

こうして再経営は岩村判官によつて行われたが、大岡助右衛門、水原寅藏は札幌創基の功績ある人として、石川正叟、対馬嘉三郎と共に、中島公園にはその表功碑が建てられている。

黒田次官による札幌の経営には、米人の開拓に参与させなものが多く、先進国の知識技能が、札幌の建設の上に大いに取入れられたのである。

即ち札幌の官庁、官舎、民家の建築が多く建設されるのには、明治五年六月、蒸気木挽機械所が設けられて、職工八名を雇い、サンド・ホルト・クラーク及びエヌダブリュー・ホルトの二人の外人の指導によつて製材を行われたのである。ここには洋式鋸機械数基を据えつけ、木材の挽割、家

材、屋根桁等の製材をはじめ、七年六月工場の増築をなして円鋸、廻転鋸、鉋鑿柄付（建具類、額縁等を製するもの）の五機械を装置したと記録に残されている。

また明治五年七月には、水車機械所を設け、創成川の水により、水力を利用し、明治六年二月に円鋸機二、堅鋸機一、桎挽機一、鋸機一、木工円鋸床一、小鉋機一、粉磨機一を装置し、また同年五月更に円鋸、堅鋸、桎挽鋸、側削鉋等の運転を行い、官庁等の營繕に役立てたのである。

また明治八年六月には木工所を設け、作業が開始され、翌九年五月には木材枯燥所も置かれ、十年二月には円鋸及び薄板挽堅鋸を米国から購入するなど、製材業の発達のためには、海外の機械、技術が大いに取入れられたのである。また明治十二年三月には、新たに厚別水車機械所が設けられ、木材の豊富な厚別で、桎挽三、大円鋸一、桎鋸一、横切鋸二、鋸床一を備え、八十二馬力水車元車二基を装置し、十三年二月から事業を開始している。

かように札幌の製材業は、主として開拓使の官業によつて起つたのである。

明治十五年開拓使が廃せられ、これら官業は工業事務所で取扱われたが、明治十九年三県が廃されて、新たに北海道庁が設置されるに及んでは、開拓使時代の官業はすべて岩村長官によつて民間に払下けられるに至つた。従つて木工場もまた払下けられたのである。道庁設置当時製材業を営んだ人は、森源三、後藤半七、対馬嘉三郎の三氏である。

森源三氏は札幌木挽所を經營し、当時職工十二、三名を傭い、官庁の建築用材の製材を行つてい

明治二十五年札幌に北海道物産共進会が開催されることになつて、これを機会に一大發展を予期されたにかかわらず、未曾有の大火があり、ために当時の中心街の八百八十七戸（全市の五分の一）を焼失したのである。この復興のためには、多く製材を要したので、製材業者もにわかにふえ、小田庫吉、林次郎吉、高橋喜作、太田助次郎、森木久蔵等の諸氏が製材業に従事していたと記録されているが、この年札幌挽材組合も発足したのである。

また明治二十七、八年の日清戦争後の好況に伴つては、建築も多く行われ、明治二十九年には北海道木材会社が設立され、札幌木挽所と共に有力な会社であつた。またこの頃から拓殖計画の進展と共に、また鉄道の布設も多くなつて、鉄道枕木の製材が行われるようになったのである。

その後明治三十四年には重谷木工場が設立され、これは当時札幌の財閥谷七太郎氏の後援を得て、盛大であつたが、この翌年には札幌材木商組合が設立している。

明治四十年にはまた札幌に大火があり、これは札幌の中心街三百六十六戸の民家を焼失し、札幌支庁、札幌警察署、札幌郵便局、北海銀行、北海道貯蓄銀行、北海タイムス社等も類焼し、これが復興のためには大いに製材を要し、その後製材業が、にわかに起るようになった。

その年重谷木工場も谷氏の没落によつて札幌木材株式会社と改称し、当初の資本金は二十数万円であつたが、東京の中沢家の後援を得て松田学氏がこれを統べ、翌年には百数十万円の大会社とな

つたのである。(数年にして解散した)

植田翁が木工場を経営しはじめたのもこの年である。

明治四十一年には大場木工場が設立し、三井物産札幌挽材財売所も設立したのである。

また明治四十二年には伊藤組が製材業をはじめ、同四十三年には西野木工場、大島製材所が設立し、弘安製材会社も創業し、同四十四年には藤沢木工場、四十五年には安彦木工場が設立している。

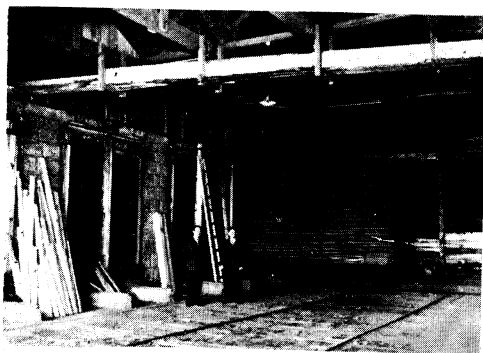
製材工業は大正時代には著しく発達した。それは第一次世界大戦によつて欧州からの資材が杜絶し支那、朝鮮への建築資材はわが国から求められるようになり、しかも本道からその輸出を見たからである。

それで明治四十二年の全道の移輸出の建築資材の生産は二百九十四万円になっているが、大正十年には千七百余万元に達しているのである。

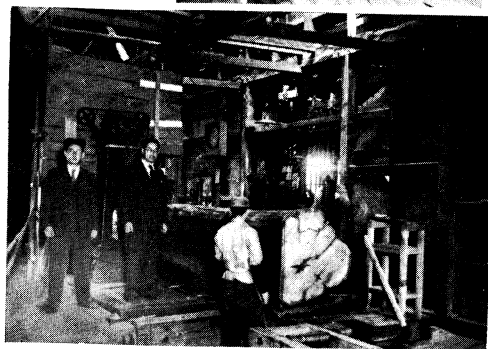
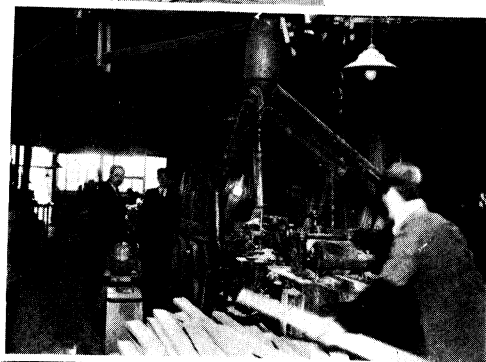
この状態において、大資本が本道に入るようになったのである。

大正時代には大正八年小川合名会社の木工場、九年三木製材所等も設立されているが、北日本製材株式会社が、大正九年に設立され、資本金は五十万円であつた。

このころ札幌の製材は官庁、会社の建築材の外木工業の勃興と共にその原料供給もあつて発展したのである。またこの期間に組合は賃挽の協定賃金の協定など活潑に動きつつあつた。



植田木材工業工場内部



また大正時代に特記すべきは大正十二年の関東大震災である。その影響によつて建築資材の値上に伴つて板類その他の値上げを協定し、価格表を配布したりしている。

しかし大正の末期から昭和のはじめには、大戦の麥態的好況の反動が来て、不景氣時代を現出し、その影響は製材業にも大きく響き、沈滞の狀態が來たされた。この不況の対策には、製材業界はじめ木製品製造業界は貸倒れ防止などを図つてゐる。

その後滿洲事變が起き、なお支那事變に發展すると、戦時徴兵が増加し、木工業界にも勞力不足を來たされ、それが生産にも大いに影響を來たすようになって、一面これと共に動力化が著しく進んで来るようになった。

また戦争の長期化に伴つて軍需の受註も増加して来て、その上諸物価の昂騰によつては製材も数度にわたつて値上げされたが、これによつて活況が資せられるようになった。

しかし、民需は著しく制限され、多く軍需にむけられるようになって次第に統制が一般に強化されるようになった。

昭和十六年三月木材統制法が公布され、北海道地方木材会社（地木）が設立され、その配給統制下に生産も制限が加えられるに至つた。この地木の設立に伴つて、従前の組合の機能は自然消滅し、翌年ついに解散するに至つた。

昭和十九年には製材工場はすべて地木の借上げ工場となり、札幌地区もまた札幌市、小樽市、石

狩支庁、後志支庁管内をもつて支部が組織され、木材の配給統制が行われるようになった。

昭和に入つて製材の上に特記すべきことはベニヤ、フローリングの加工が行われるようになったことである。

長期にわたつた戦争のためには、造船、車輛材、航空用合板等の製造も盛んになった。

終戦後は進駐軍用材または一般復興用材、ベニヤ、輸出用インチ材などの製材が目立つて來たが、戦時中濫伐されて原木事情は必ずしもよくはないが、製材業は、外貨獲得の一翼ともなり、重要な産業であり、札幌市においても業界はいよいよ發展しつつある。

植田木工場の發展

以上札幌の製材業界について略述したが、現在札幌の製材工場中最も古い歴史を持つてゐるのは植田木工場である。

前述したように札幌の製材業界の歴史が示すように、そこに隆替興廃があるが、順調な時代にも不況な時代にも翁の経営は堅実であり、トヨ子夫人の内助協力と嗣子英武さんの活動によつて發展街道を辿つて今日に至つたものであるが、一家が和合協力したことと、翁が稀な長寿を保たれ、

終生その豊富な経験を以て、技術の改良を図り、また時勢に適應した経営をされたからであり、英武さんまた常に業界についての研究を怠らず、世間の信用を得たことがその大きな原因である。

創業当時の植田工場の規模は三尺×八尺の多罐式、ボイラーを備えつけ、エンジン内径八吋、ストローク十六吋、当時の一日の製材実績は原木七九掛五石程度で、従業員は翁自身と夫人、英武さんの外若者一名で計四人であつた。今日の一日百石程度とすれば正に二十分の一に当る。当時の原木代は一日三円（五石）程度で、現今の価格にすれば毫萬円程度に相当する。

創業当時の鋸は三十吋——五十二吋までの丸鋸を使用して鋸の厚さは八ゲージで二分から二分五厘の鋸目を食つてゐた。

翁も初めてのことであつたため鋸の扱い方をよく知らず、目立、狂い直しを学ぶため、名古屋から技師を招いて翁自ら研究修得されたのである。然し丸鋸では他の工場と競争出来兼ねるので、後五十吋バンドソーに変更し、これも内地から技師を招いて研究した。翁の研究心は誠に旺盛なものであつた。

英武さんが翁の仕事に協力するようになったのは明治四十五年三月、英武さんが札幌中学校を卒業してからの事であるが、英武さんが上級学校進学の希望をすてて、断然父をたすけて家業に専念するようになったのは、恩人加賀村庄吉さん、恩師大橋渉先生や村上道太郎さん、東繁造医学博士などのすすめもあつたのである。翁はこの時から金般にわたつて指揮し、金庫は一切英武さんに任

かせた。そのためこの年の純益金は三千円を超え、これが神棚に供えられたのは、父子とも深く記憶するところであつた。その後逐年順調に向上の一途を辿つたが、大正十四年秋から新たに造材事業も開始するようになった。

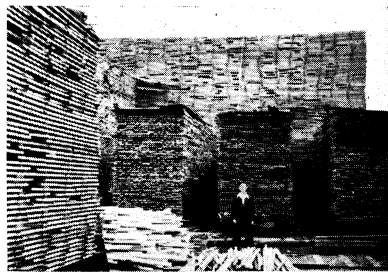
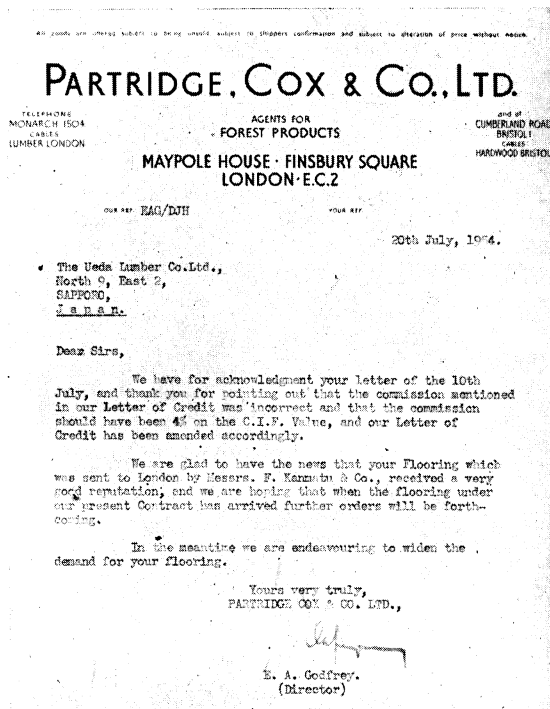
事業は細心の注意をしても時勢の影響はまぬがれぬ、植田家にとつても、大きな傷手を蒙つたことがある。それは昭和五年のことで約六万円の欠損を生じたのである。それは浜口内閣の金解禁に伴うもので、当時六万五千石の造材には約五百人の人を使用したのである。また昭和六年一月十二日工場の残業から火災となり、工場を焼失し、これを機会に大拡張された。そしてその後また植田家の事業は順調に進み、戦争によつて統制のうちにも事業を進めて行つたが、十九年に入り、造材事業は中止するの止むなきに至つた。

戦後統制が次第になくなると共に植田家の事業もひびて昭和二十一年度の所得税は百五十万円となつて、札幌第一流の高額納税者となつたのである。

昭和二十二年十月、これまで植田木工場は翁の個人経営の形をとつて来たが、会社組織に改め、資本金九十五万円とし、翁が社長となつて、植田木材工業株式会社と改称し、専務は嗣子英武さんである。

またこれよりさき同年六月鉄工場を新設し、株式会社植田鉄工場として資本金十九万五千円、翁は顧問となり、嗣子英武さんが社長であり、木工機械の修理製作を目的とし、実際の経営は町野

パトリッジ・コックス会社よりの書信



工場外部のフローリング
平板

植田木材工業株式会社

一九五四年七月二十日

拝啓 七月十日附貴書簡拝受致しました。

信用状に記載せる手数料に誤りあり、手数料率は、O、I、F価格の四%なること御指示戴き厚く御礼申し上げます。従いまして信用状訂正致しました。

扱て兼松株式会社を通じ、ロンドンに輸出された貴社の床板が非常に好評を博している事実を喜んでお伝え致します。又現在当社と契約中の床板が当地到著の上は同様の好評を受けより多くの注文を受けることを信じます。

当方と致しまして貴社の床板の需要を拡大するよう努力致します。

敬具

パトリック・コックス株式会社

イ・エ・ゴットフレイ

取 締 役

守弘さんが当るものであり、従業員は十五名であり、この鉄工場は逐次名声をあけつつある。

またこの年八月北海道知事から人工乾燥室を有せざるフローリング工場は認可しないとの通知により、まず全道の乾燥室を見学し、ついで東京目黒の林業試験場に教えを受け、スターテバンド型を採用し、昭和二十三年春著工し、翌二十四年十二月試験運転をするに至つたのである。

現在一か月二千石の能力がある。

また二十二年秋から蒸気力を電力に改めるなど戦後の経営は著しく改められた。

これらは英武さんの時勢と共に進む明識に発するものである。

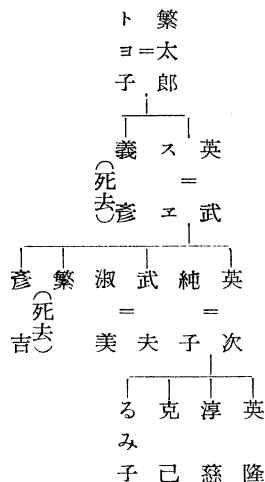
十九年以来中止していた造材事業も昭和二十五年から再開した。

昭和二十八年翁逝去の後、英武さんが植田木材工業株式会社の社長となり、翁の精神を守つて斯業の隆盛を計っているが、最近同社の業績はインチ材及び床板等の輸出材をも生産しているが、床板はその輸出が全国第一位といわれ、工員は七十名をこえる状態にあり、国策に沿う外貨獲得の一翼も荷い、ますます発展しつつあるのである。

なお植田工場製品床板の価額が海外にも好評を博していることは最近ロンドンのパトリック・コックス株式会社から寄せられた書状によつても知られるので、写真にもかかけその訳文をその裏面にかかける。

翁の一家

翁の一家を表示すれば左の図となる。



翁とトヨ夫人の間に二人の男の子がもうけられた。長男は現当主の英武さんで、次男義彦君は不幸二才でなくなられ、英武さんは唯一人の翁の後継者である。

さきにも述べたように英武さんは翁とトヨ夫人結婚後翌年の明治二十七年十月十三日、翁の任地たる当別村字六軒の製麻会社社宅に生まれ、産後肥だちもよく、丈夫に育ち、後弟義彦君も生まれたが、二才で夭折した後は父母の寵愛を一身にあつめた。翁の不遇時代、はじめ私立大通渋谷学校

に入学し、その後北九条小学校、西創成小学校と転校したが、頭脳もよく、身体も健全であり、進んで当時道内の秀才のみ入学する札幌中学校（後の一中）に入学し、翁夫妻の激励と共に優秀な成績で同校を卒業したのは明治四十五年三月である。一人息子ではあり、成績もよかつたので、翁の考えもまた英武さん自身も更に上級学校に進学する希望に燃えていた。当時札幌には札幌農学校が東北帝国大学農科大学となつていて、大学も札幌にあつたのであるが、英武さんの希望は東京に出て第一高等学校に入学したく憧懷は遙かに東京にあつたのである。

しかしその後英武さんは将来の自分と一家の事情を洞察し、ここに心境の変化を来し、翁と篤くと相談の結果、断然進学を思い止まり、翁をたすけて家業に就くことを新たに決意したのである。かくて英武さんは十九の年から父君翁の片腕となつて、協目を振らず専心家運の隆昌をねがいついに今日の事業の基礎となつたのである。

今にして思えば、同期生の進学を徒らに羨まず、父子一体となつて、家業を守つたことこそ植田家の繁栄を来したものである。

因みに当時の札幌中学校には、全道の秀才を集めていて、卒業後今世に活躍する人多く、英武さんの同期である第十六期卒業生には相内石蔵さん、伊藤豊次さん、寿藤富弥さん、大島幸吉さん、室谷慶一さん、三宅捷さん等があり、その一期前の第十五期生には青木楠男さん、阿部謙夫さん、

栗原寛さん、小林国治さん、富樫長吉さん達がおられ、第十七期生には、佐藤藤佐さんなど、いずれも重きをなされている。

英武さんは大正六年柳沢善五郎氏の三女スエさんと結婚された。当時英武さんは二十四才、スエさんは十八才であつた。スエさんの兄上善作さんは道庁官吏で留萌支庁長などを勤められた方である。翌大正七年長男英次さんが生まれ、ついで武夫さん、繁さん、彦吉さんの四人の男子をもうけられた。

この四人の兄弟もまた祖父母の寵愛をうけてそれぞれ丈夫に育てられたが、中学教育はいずれも父上の英武さんと同じく札幌第一中学校である。

札幌第一中学校は明治二十四年に堀基氏がつくられた北鳴学校（校長新渡戸先生）を廃して明治二十八年に創立された札幌尋常中学校に起り、明治三十四年札幌中学校となり、大正四年札幌第一中学校と改称され、終戦後は六、三、三、四制によつて現在札幌南高等学校となつてゐる。

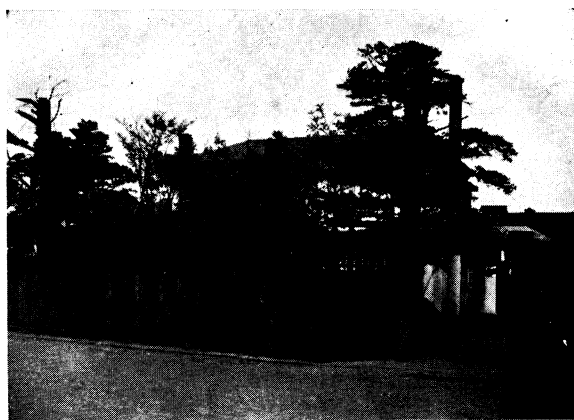
札幌第一中学校には明治四十一年以来山田幸太郎先生が校長として昭和十二年に至るまで勤められ、同一校に勤続三十年に及び、その寛厳並び備わり、総明大度よく剛健な一中魂を育成された方で、英武さんが心から恩師を尊敬し、その四人の子息もこの教育をうけしめたのである。

山田先生の雅号は藻川と号され、心淨く氣高きこと藻岩山の如く、邪心妄心を洗い淨めること豊



翁の一家

宅本



平川の如くあれどの先生の教えのまま名づけられたものである。

植田家には今に至るまで御交際並びに御指導を賜っているのである。

植田英次さんの結婚に際しては藻川先生は左の歌をお祝いとして歌われ、これは植田家の応接室に掲げられ、日夕英次夫妻の修養の鑑みとなつてゐる。

庭のうちにうつし植えたる呉竹は

ちよの栄のためしなるらむ

世の中の山白みちを石ふみて

二人しゆかむ妹とふたりして

四人の孫さんを一中に入れたことは翁の自慢の一つであつたが、卒業後英次さんは更に小樽高等商業学校に進み、これを卒業し、武夫さんは日大音楽部を卒業され、繁さんは神戸高等商船学校航海科を卒業され、彦吉さんは東京商科大学専門科を終えられ、それぞれ高等教育を受けて立派に成人せられた。

また戦局の苛烈な時代となつては、この四人のお孫さんはそれぞれ応召して、大義国に殉ずる奉公の意気も高く、それぞれ軍務に服されたが、幸にも四人とも戦死をまぬがれて帰還されたことはまことに幸福なことであつた。

しかし繁さんは海軍少尉となり、きびしい奉公の為、それが原因してか、終戦後病氣となり、療

養の甲斐もなく昭和二十六年九月三十才を以て永眠されたことは翁の長寿にひきかえて、残念なこととで、これも戦争の犠牲といつてもよい。

英次さんは昭和十九年一月二十三日札幌神社の北島宮司の媒酌にて小竹文次郎氏四女純子さんと結婚された。

北島宮司の翁を偲ぶ序文は巻頭にかかけられているが、写真にある色紙にある通り、

植田英次純子御両人の結婚を寿ぎてよめる

ゆるぎなきいはほのうえに根をしめて

枝さしかはす相生の松

とあり、福祿寿翁とはじめて讃えられた北島宮司が、翁が築いた盤石の礎の上に植田家がいよいよ栄えるようにと祝福されたものである。

武夫さんは戦時中帯広の被服廠の支所長を佐長の階級を以て勤められたのであるが、その清廉潔白は認められるところであり、現幌東中学校長三原先生は当時帯広に在勤せられ、その人柄を買い、帯広市の功労者とされる人の子孫高橋文雄さんの長女淑美さんをお世話し、自ら媒酌の勞をとられ、芽出度華燭の典を挙げられたのである。

英次さん、純子さんの間には現在英隆、淳慈、克巳の三人の男の子、女の子るみ子さんと四人のよき子を設けられ、翁の寵愛も深いものであった。

植田翁は糟糠の妻、トヨ子夫人を大事にされ、一人子の英武さんを心から信頼していた。この協力力は植田家の家風ともいうべく、発展するこの家の伝統は、孫さんたちの親密にも表われているが、今は武夫さん夫妻が東京井の頭にいられる外は皆札幌の自宅にあり、英次、彦吉さんも植田木材に家業を守り、和合まことに羨しき限りである。

植田家本宅、別邸、墓

植田家の現在の本宅は昭和十二年春著工しその年十二月竣工したものである。

二階建百六十二坪余の建坪である。蒸気暖房を設置し、便所は水洗式、材は蝦夷松、天井は日向の神代杉、総工費は参万円であつた。

昭和十三年庭園をつくり、石は軽川より運び、中心に水松を広島村より移植した。庭師は手稻の栗原さんである。

山鼻の別邸は土地二千坪、家は六十坪で昭和七年購入したもので、翁の悠々自適の処で、園内に五十坪の池を作り、築山また三十坪、これにはトラック十台の石が運ばれ、水松、櫻、かえで、梅、ななかまどなどが植えられている。特に目をひくのは、水松の太木でこれは島松から運ばれたもの

であるが、翁自身現地に選定したものであり、開け行く札幌郊外の中に、一樹林をなしたこの庭園は後には名園の一つになると信ぜられる。

またつつじ、ほたん、しやくやく等も植えられている。翁はこの別邸に自適の生活を送り、庭園の手入をされるのを健康法とも考えて楽しんでた。

美しいしだれ紅葉は翁が自らつぎ木をして育てたもので、これは五月の花よりも美しい色をしてゐる。

植田家の墓地は豊平墓地内にある。昭和十年頃英武さんが翁に住宅の建築を申し出た時住宅よりもまず先祖の祀りが第一であるからと墓を築くことになった。

墓石は広島県から取り寄せ、総御影石で、岩崎鶴吉さんの設計施工になるもので、墓の形体、雄豪にして翁の気持を現わしているものである。

翁の逝去と解剖

翁の語つた追憶の中で、「自分ながら人間はこれ程までに働けるものかと自分でも感心した」といわれた程、意地もあつたであろうが、その体質も父の頑健をうけつがれて、しかも青年時代から労働によつていよいよ頑健になられたものと察せられる。

かくてこそ九十一才までの長寿を遂げられたので、老年になられてからは特に足が丈夫でなくては弱つてしまうと考えられ、つとめて歩かれて、自動車などには減多に乗られず、乗ることを好まれなかつた。

年をとつたことの証左に、足腰たぬといひ、よほよほは年寄りの表徴であるが、足から老いこむことを翁はよく知られていたのは実に賢明なことである。

札幌の名誉市民として死してなお尊敬される宮部金吾先生もよくお歩きになり、ステツキをふりふり散策されたお姿は今も目に浮ぶのである。

また体も頭も使わねば老もうすると宮部博士は自ら仰せられたが、九十才をこえて博士は頭脳も明せきであられた。

植田翁もなくなられるまで、植田木材工業株式会社社長として現役でお仕事をされたことも頭がはつきりせられていた原因とも考えられ、軽い労働が養生法であることを熟知され、山鼻の別邸二千坪の植樹の手入れを自らしたのは翁の健康法であり、また趣味であつたろう。

九十一年の永い生涯に病氣もあまりなさなかつた。

しかし昭和三年には胆石病を患つて、この時は随分苦しまれたが、故秦博士の執刀で開腹手術をして戴き、胆嚢をとられたのであるが、小石のようなものが胆嚢から数箇出て、それから後はあま

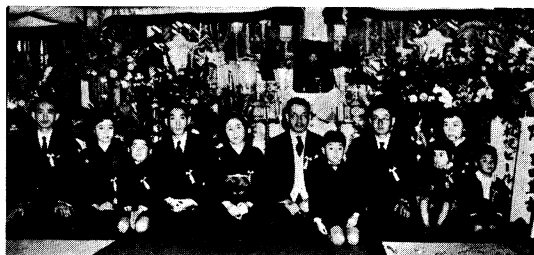
り異常がなかったといわれているが、昭和二十二年には北大で膀胱の手術をされたが、これは岩下博士をわずらわしたのであるが、日本での最新の手術方法によつたものであり、その結果も頗る良好なものであつたといわれている。

その後は元気でいられて、晩酌七勺を楽しみ食欲もよく、英武さんが翁より食が少量の場合は「それ位しか食べれぬか」と冷かされた程と聞いている。

翁はこの分だと理想の百寿まで生きのびられるかとさえ思わせるものであつたが、昭和二十八年八月初旬から、また膀胱が少し具合悪く、北大附属病院に入院の手筈をさだめたのが八月五日であつた。しかし当日は伊夜日子神社の祭典であつたので、一日のぼして、その祭典に参拝し、六日に入院された。入院中東京から歌舞伎の名優中村吉右工門、松本幸四郎、中村歌右工門一座が来られたので、八日と十日は英武さん夫妻と共に観劇され、非常に喜ばれた。勿論医師の承認も得たのである。またその十六日は孫繁さんの参周忌にも当り、この法要にも病院からわざわざ臨席されるなど、誰にも病人とも見えぬ元気なものであられた。しかし十八日から病勢が悪化し、ついに二十一日午前四時三十五分逝去されたのである。

死体は北大で安保重博士によつてその日解剖に付された。

解剖の医師は翁の肺臓と心臓とを両手に持たれて「実に見事で羨ましい」と思わず独言され、また血管の切開によつて、これは五十才台に相当するものと申されたと聞いている。



翁の霊前の一家



翁の葬儀



植田家の墓と一家の人々

この解剖によつて摂護腺のところに小さい癌があり、二十五年に切り除いた胆嚢の管に、またまた胆石ができていた。胃と腸に出血があつて、これが大原菌という赤痢菌であつて、これが死因であつたと思われる。

翁の葬儀

秋風ようやく北海の天地に吹き、札幌名物の唐黍も熟する頃、八月はじめの微ようを養ううち、八月十八日翁は自ら作つた唐黍を喜んで食べられたが、これが障つたものか、その夜からにわかに腹痛を起し、翁の一家の手厚い看護と、医師の細心の注意の下にの治療の甲斐もなく、ついに二十一日午前四時三十五分、九十一才を一期として大往生を遂げた。

日頃百才までも生きのびようと自らも称し、人もまたこれを願つたのであるが、突然の訃報は人を驚かし、これを惜しむのであつた。

かくて弔問客はしきりであつたが、翁の葬儀は八月二十四日に行われた。その日午前十時からの植田家本宅における告別式には、植田家家族及び親族は勿論札幌の名士多数の臨席裡に厳修され、且つ多数の弔詞が捧けられ、今更に翁の徳をたたえ哀悼の意が披露されたのである。

その弔詞の主なるものには、翁の属する業界たる札幌地区林材協会の会長たる伊藤豊次氏はじめ、翁が渡道の動機をつくり且つ十年に亘つて勤務した帝国製麻株式会社札幌工場長森川喜八郎氏や、翁が奉仕申し上げた市内各神社寺院等からのものであり、特に植田木材工業株式会社職長島仁三郎氏の永き恩顧と適切な指導を賜つた旧社長を慕う綿々たる言葉は胸をうつものがある。

これら弔詞は、みな翁の面目をよく語るもので、翁の渡道以来の苦心と世のためにつくした功績を讃えるものであり、九十一才の長寿を保ち、天寿を全うしたるにかかわらず、なお百寿までの長生を念う情も加つていて、哀悼の意も深い。

札幌神社宮司代務者伊藤喜六氏は特に同社の敬神講社に対し、六十年間翁が残された有形無形の努力功績は枚挙にいとまなしといい、新善光寺檀徒総代大竹愛二郎氏は同寺門興隆に対し、翁の永年の尽瘁を感謝し、三吉神社宮司佐藤桂氏は四十余年間氏子総代としての翁の奉仕を追慕し、伊夜日子神社宮司中村竜太氏は翁が特別崇敬者としての敬神をたたえており、札幌養老院理事富樫長吉氏は昭和二年以来の同院事業に参与し、その間二十六年にわたる協力を感謝し、特に同院及び病院の焼失の際には失意の職員を鞭撻され、再起の力となつて下さつたことに深き感謝をささげている。

なお弔電は四十七通に及んだ。その芳名は左記の通りである。

東榮氏、東繁造氏、岩倉朝次氏、稻重親族一同、植田英安氏、大谷敏治氏、大原久友氏、岡田伊太郎氏、尾崎芳之助氏、額賀大直氏、北島邦孝氏、菊地寅藏氏、古賀キク氏、小竹信夫氏、小竹俊夫氏、古城幸太郎氏、三友木材KK、斎藤木材KK、佐藤善兵衛氏、沢村欣子氏、下津屋俊夫氏、塩谷タカ氏、篠塚庸之助氏、新宮商行、清水工業、城戸悦之氏、城戸敬英氏、城戸鐘太郎氏、高橋文雄氏、工内実氏、宝崎高藏氏、竹中安太郎氏、出居清太郎氏、伝法タカネ氏、中山敏雄氏、平元正雄氏、船矢健喜智氏、松崎亀二氏、松本増藏氏、松井義雄氏、三浦秀夫氏、三浦任作氏、三田村フミ氏、森川増次郎氏、吉里蘭子氏、渡辺新海氏

以上

かくて文久、元治、慶応、明治、大正、昭和にわたる九十一の植田翁積徳院殿貫誓諦道鉄賢居士の告別式は喪主たる孝子、英武さんによつて静肅壮嚴裡に営まれて、葬列また四百五十余名の参集をみて、栄光にみつるものであつた。

因みに弔詞は、それぞれ翁の面目を語るものであるが、左に五文のみを掲げることにした。

弔 辞

朝露に秋風颯々として襲い来るを覚え、樹の間の蟬の残んの声仄かにして、心自ら寂寞を感じしめる葉月二十一日朝、元老植田翁は忽焉として他界せらる。

嗚呼！ 夢か、現つか、幻滅の悲しみや深し。

翁は実に人間稀に見る齢を重ねて、茲に九十有一年。しかも若き時代の元氣を忘れず、顔色常に豊かにして矍鑠たり。

思いを過去の札幌神社敬神講社の事に馳すれば、毎回到姿を現わされ、斯道のため激励を与え

られた事は誠に涙ぐまじきものがあります。

熟々老翁の生涯を顧れば、うら若き二十八才の年、天さかる九州福岡県より北海の涯札幌へ移り、鴻鵠の志を完遂すべく、茲に六十余年、翁の残した有形無形の努力とその功績は枚挙にいとまなく、これに酬ゆる術もなく、唯々敬服しておるところであります。

今や翁の豊富な経験と識見は新しい世代の文化のためにも、市民の幸福のためにも生成化育して行かなければならない現在、にわかに衰弱を増し、幽明境を異にせる事は、返えず返えすも痛惜の情に堪えず、弔うべき言葉なし。

茲に札幌神社役職員敬神講社を代表して謹んで哀悼の意を捧げます。

希くは植田老翁の祖先累代の霊と共に安らかに常住せられん事を

昭和二十八年八月二十四日

札幌神社宮司代務者

伊 藤 喜 六

弔 辞

吾々製麻業に従事している者の尊敬のまゝとある大先輩植田繁太郎殿、突如翁の悲報を聞き、吾々は奈落の底に引き込まれた様な言うに言われぬ悲しみに閉ざされたのであります。

翁は文久三年四月福岡県に生まれ、長ずる及んで、明治二十三年三月、茫漠荒涼として、當時の人々としては誰もが移住を恐れていた北海道へ、同郷の二人と固い決心の下に協力相励まし合つて北海道開拓の礎となろうと渡つて来られたのであります。札幌に着いた翁の一行は当時農商務省技師であり、北海道製麻会社の建設責任者であつた吉田健作氏に面会し、将来の方針等について親しく指導を受け、亜麻耕作に従事することとなり、吉田健作氏の紹介で丘珠の地で亜麻耕作を始めたのであります。

一行三人は不慣れた作業であつたにもかかわらず、全力を集中して耕作に従事したため、天が一行の努力を賞でてか立派な亜麻が收穫され、殊に翁の作られた亜麻は当時白耳義から招聘されて亜麻耕作技術指導をされていたコンスタン・ウブレヒト氏から優秀な亜麻であるとその品質を賞讃された程の出来栄でありました。これが翁の製麻会社入を決心する動機ともなつたのであります。

福岡県を後に郷里を出発した三人は死なば諸共如何なる困難苦行も三人同心協力で突破し、必ず成功しようと固く誓ひ合つて来たのでありますが、妻と二人の子供を郷里に残して来ました西武市氏は、俄かに郷愁に誘われ帰郷を思い立ち、また独身者であつた加来戸市氏も西氏の帰郷をきいてこれに共鳴し、亜麻收穫も早々に帰郷してしまつたのであります。しかし翁は二人の帰郷にかかわらず、固き初志は少しも変ることがなく、鉄石の意志は益々固さを増すのみで、明

治二十三年九月北海道製麻会社の従業員となつたのでした。

翁の勤勉と優れた力量手腕は直ちに上司の認めるところとなり、毎年何回となく、同僚を追い抜き昇進して終に雁木製綿所長兼務となり、会社にはなくてはならない有力な人物となられ、將來を益々囑望されていたのでありましたが、明治三十二年一月、惜しまれながら退職されたのでした。

「会社には約十年間在職したわけで、在職中機械に関する智識と経験を得た事は非常に有益であつて、後年製材業を創めたのもこの経験があつたからであつた」

という翁の述懐を聞いた事がありました、この製材業にも翁の熱と手腕は遺憾なく發揮せられ、札幌市有数の製材業者となられたのであります。

翁の亡き後は孝心篤き嗣子英武氏あり、卓越した経営手腕は翁の良く知れる所で、安心して頂く事が出来ると信じます。

大先輩植田繁太郎翁の訃報をきき、本日その告別式に参列して翁の偉業を追想し、いささか無辞を述べて弔辞といたします。

昭和二十八年八月二十四日

帝国製麻株式会社札幌工場長

森 川 喜 八 郎

弔 辞

謹んで故植田木材工業株式会社社長植田繁太郎翁の靈に告ぐ。

翁は文久三年福岡県に生まれ、若年にして志を立て北海道に渡り、現在の帝国繊維株式会社の前身である北海道製麻会社に入り、孜々としてその職務を遂行し、挙げられて、雁木製綿所長をも兼務し、同社に勤続すること十年にわたり、明治三十二年退職し、その後製材業を創め、營々努力し、今日業界に重きをなした事は、誠に偉とすべきであります。

殊に近年フローリングの輸出に着目され、業界人の顧みざるブナ材の床板製造に着手し、その成果益々挙がるを見るにいたしました事は、本道林業界に寄与するところ頗る大なるもので、業界の等しく敬意を表するところであります。

君は齢既に九十有余に及び、現実に事業の隆昌家門の繁栄を視たことも、日頃の敬神の念の厚きによるものと申されましょう。

茲に蕪辞を呈し、弔辞と致します。

昭和二十八年八月二十四日

札幌地区林材協会会長

伊 藤 豊 次

弔 辭

伊夜日子神社特別崇敬者植田繁太郎九十一翁の御前に慎みて白す。
そもそも翁は福岡県の小農に生まれ、弱冠本道の開拓に志をたて、二十八才にして渡道後札幌に居を卜し、刻苦精勵植田家不動の基礎を確立せられたるは、実に立志伝中の人というべし。
翁資性剛毅闊達夙に敬神の念厚く、当神社に尽されたる処勢なからず、去る五日当神社例大祭に嗣子英武君を伴い参拝せられ、矍鑠たる容姿に接し、窃かに百才の長寿を保ち、斯道のため一段の貢献を念じたりしに、図らずも病を得、俄かに長逝せらる。まことに痛惜の至りに堪えず。
翁は福祿寿の三徳に恵まれ、加うるに嗣子英武君の尽きせぬ孝養を享受せらる。誠に翁こそは札幌一の幸福者というも過言にあらざるべし。

本日告別式に列し、翁の生前の功績を偲び、恭しく弔辭を呈す。

昭和二十八年八月二十四日

伊夜日子神社宮司

中 村 竜 太

植田福祿寿翁の身退れるを悼みて

枝も葉も昔ながらに萎らねど

植えにし主の無きぞ悲しき

弔 辭

北国の天地にも秋の色がようやく濃く、清涼の気が四辺に漲つてまいりました。この静寂に澄み渡つた秋の夜の夜空には、遙かに高く、無数の星が燦めいております。

仰ぎ見る秋の夜空のこの無数の星は、幾千年、幾万年も変らぬ光りを放つかに見えますとき、一瞬光芒を放つて巨星の消えるのをながめますとき、また無限の感一入なるものがあります。

わが植田木材工業株式会社社長植田繁太郎翁は、九十一才の生涯を終えられ、突然永遠の眠りにつかれましたことは、まさにわれわれにとつては巨星おちるの感がございます。

社長には九十一才の御生涯、まさに稀に見る長寿であり、天寿を全うせられたというべきであります。日頃矍鑠として老を忘れたかのようにお元氣であられ、常に温容を以てわれわれ従業員に接せられ、われわれも温情溢れる社長のなお百寿までもと願つたのでありますが、ここに忽焉として永遠の眠りにつかれましたことは、生者必滅会者定離は人の世の常とは申せ、私どものひとしく驚愕するところで、真に一家の慈父を失つたにも似て、悲しみつきないところであります。

社長には今を去る事既に六十有余年前、若冠二十八才にして、青春の情熱と燃える希望を以て、懐かしの故郷、九州福岡を後にして、遠く津軽海峡の波濤を越えて、当時まだ半開の北海道に渡り、つづさに辛酸苦勞を体験し、今日を築き上げられたのであります。

社長はじめ、北海道製麻会社に勤務し、後には同社の雁木製線所長なども勤められ、同工場の重責を荷われたのでありますが、故あつて同社を退職せられてから、数年いろいろな業務をたずさわれ、ついに幌都の工場地帯、鉄北の一角に位置を選び、現在の製材業をおはじめになつたのであります。

それから既に数十年、以来幾多の時勢の変遷の中に、いつも不屈不転の決意を堅持せられ、只管事業の改善を図り、生産の拡張を図られたものであります、そこには血のにじむような努力が続けられたのであります。

かくて植田工場は翁の豊富な体験と努力によつて今日の盛運を見たのでございます。

私も植田工場に働くものとしては、翁の創業の苦心を顧み、その不断の研究を今更のように偲ばれてなりません。

今や植田木材工業株式会社も全道有数の工場となり、翁また製材業界の一惑星としてその名を知られるに至つた時、社長をにわかに失うた、巨星おちるの感が深いわけであります。

永眠に当り、今更に温情にみちた社長のありし日を追懐すると共に、われわれ工場従業員は、今は亡き社長の御遺志を継承して微力ながらも、誠意と真心を以て、一層協力団結して、本工場の隆昌を期して、生前の御高恩の万一に報ゆることをお誓ひいたします。

ねがわくは在天の御霊よ、とこしえに安らかな眠りにつかれますよう、ここに不肖島仁三郎、

従業員一同を代表しまして、謹んで弔意を述べる次第であります。

昭和二十八年八月二十四日

植田木材工業株式会社職長

島 仁 三 郎

なお、葬儀に参列なされた方々の御芳名は左記の通りである。(敬称略す)

粟飯原邦夫	朝比奈英三	藍原恒太郎	安部憲二
安西秀三郎	朝日銘木建材商会	秋田清	新敷つぎ
有田嘉一郎	浅倉勇吉	天野銀市	穴釜升夫
荒沢重治	阿部房吉	足立石造	青木三哉
東賢勇	阿部謙夫	阿部友吉	伊藤豊次
岩下健三	岩井商店	井上節男	今井本店
石垣開一	井田吉平	井田吉儀	石崎弥一郎
井上光則	伊藤木材株式会社	磯部木材工業KK	石村機械製作所
今井鉄平	伊藤夜日子神社	岩田建設KK	岩本愛吉
伊藤喜造	五十嵐松五	伊豆谷新介	出居菊一の
岩朝武夫	岩倉朝治	石丸文造	伊藤藤照一
石井榮雄	今田栄太郎	伊藤藤雄	伊藤千代太郎
池田憲一	岩川栄太	池田定雄	伊藤藤敏
石井正功	岩沢丈夫	板垣芳子	石川敏雄

鎌田周太郎	笠松英治	金沢木三郎	鎌谷半三郎	祿根壬子郎	奥川賢次郎	岡田正蔵	大田敬太郎	大島木材工業	大上啓蔵	大室行蔵	岡崎才次	奥村和一伯	遠藤宗伯	植田鉄工所	上野一男	植田信七郎	伊藤二郎	池内商店
片岡	上島	金田庄松	河合美佐雄	加賀林英之助	及川萬次郎	小倉四郎	大場武俊	小島喜代治	小川唯久	小谷竜雄	大谷広次郎	大橋康次郎	遠藤勘次郎	上杉重三郎	上田義幸男	植田秀男	一谷秀男	
柏岡	河井昭毅	加藤喜市	川崎文治	奥山弘具店	大橋未吉	大場一郎	面屋静夫	尾崎初枝	小笠原玉蔵	大川大緑丘会	小樽商大緑丘会	落合定雄	大川太郎	江連定一郎	上野勇次郎	上島商店	植田松太郎	泉谷松太郎
加茂盛保	紙谷忠八	笠間与三	川原雄作	小倉次郎	長内敏明	大谷真治	大星	大竹愛二郎	大島誠二	大久保木材工業	小川長夫	お崎芳之助	尾崎	榮草産業K	植田木材工業K	上村保一	植田英安	石井竹彦

佐々木勝太郎	佐々木小一郎	札幌南高等学校	札幌養老院	斎藤義太郎	斎藤義太郎	佐藤秀雄	酒出省三	小池広次	興国企業	小林ハル	小竹信夫	黒岩軍三	栗原松吉	北沢清博	北沢博	北日本製材K	加賀林敬三	鐘下伊太郎
山藤国八	札幌グランドホテル	佐藤富蔵	佐藤源太郎	佐藤千代吉	札幌地区林材協会	札幌神社	小池九次	小島秀次	近藤英夫	小竹賢一	小林商店	久保哲	栗田三郎	北九条小学校	木曾栄作	川原商店	片石光洋	岸石兼松
札幌フローリング	斎藤ハツ子	坂場吉之進	佐藤久光	酒井勝造	札幌外勤役	斎藤豊吉	後藤豊吉	小林誠治	小野誠治	小森伊五郎	窪田稔	黒松内営林署	北浦延次郎	菊地欽弥	川島啓利	加藤金助	加藤正助	加藤正助
札幌木友会	坂本竹次郎	酒本与七	佐藤源五郎	坂本彦一	札幌青年会議所	佐野浜吉	笹原健三	古賀規矩之	小林三郎	後藤ヨシ夫	小竹俊夫	窪田磯兵衛	工藤悦信	京谷武英	北谷方一	片山兼吉	加藤幸吉	金子公

坂口栄之助	札幌村農業協同組合	札幌三鉢石炭	清水孫四郎	白井咲子	渋谷丈夫	島田弘	鯉田信	菅原鉄之助	妹尾博一	大成木材工業K	田中重兵衛	高木政次郎	田中留次郎	田井直治	武田信之助	武田信之助	帝國製麻K	辻孝雄	富本吉松
坂正俊	坂井幸蔵	札幌北署北光出張所	篠塚庸之助	新宮商行	渋谷蔵吉	新善光寺貞光婦人会	諏訪神社敬神講社	関谷広吉	清楽会	高昌孝喜	竹中三郎	田辺建具製作所	田中市太郎	高田商工K	大正海上	竹中武男	鉄東西部	富樫長吉	東京海上火災
札幌林検駐在員	三部末喜	札幌木材青年倶楽部	塩谷タカ	島朝一郎	下野昌業	彰徳神社	杉野目晴貞	千橋隆信	反橋隆信	拓殖銀行営業部長	高橋文雄	田村静男	高谷新一	高谷新一	高野新吾	津田広助	壺井孝雄	戸津高之吉	土井忠吉
佐藤武夫	境由松	島内三郎	芝谷三郎	島谷敬三	白井三郎	新川信次郎	鈴木寛紀	関口勘治	曾我部直治	高城乙三郎	立原市之介	田川精三郎	高田二朗	高桑達雄	高倉清	津田清五郎	富田政儀	道家齊次	東洋木材企業

吉米地英優	中村孝徳	納内栄一	中山康一	中村信一	丹羽信一	日通札幌支店	日本木材K	野沢シヅ	服部正二	橋本吉雄	花田緑郎	彦田吉充	弘睦子	平元正雄	洲田重治	福山甚三郎	本間善明	本井鹵科	星井鹵科
富田一男	内藤リサ	長岡政一	長島松太郎	日本麦酒札幌支店	西村食品K	西村歌	西村元	野沢才鳳	林常夫	原田泰	早山カネ	東サミ	東サミ	古谷辰四郎	古谷辰三	船大健喜智	北海道林業保険組合	北海道林材新聞	星井鹵科
長沢栄一	中山敏雄	中山敏雄	中田松三郎	丹羽三郎	二の神	西川千二	布川栄助	原田清女	長谷川亮	林節子	東繁造	東福太郎	松田福太郎	飛ヶ谷孝三	房川米一	藤山隆雄	堀山武雄	穂刈銘木K	星野木材店
中島商	名越瑞枝	名越瑞枝	日本電報通信社	新田啓二	西佐久一	日通北海道事務所	根尾舜策	林敏雄	羽石源之進	長谷部栄二	原田啓	弘好文	平田農機具製作所	福島利雄	藤屋鉄工場	古川武雄	北門証券	堀田彦七郎	星野木材店

北光小学校父母と先生の会	北洋木材KK	北海道製材協会	棒誠会道支部
棒誠会オミナ会	北海道木材青年クラブ	松永敬	町野角市
町野守弘	松永長次郎	真崎健夫	前田善三郎
牧野正弘	増田泰市	松川鶴松	松下広安
前川弥輔	牧野末次	松村幸雄	前田幸安
松本菊次郎	松岡木材産業	三越札幌支店	見方登世七
水上恒二	宮岸志鷹	三好利一	三好健二
三丸呉服店	宮本為利	宮崎吉利	三輪吉次郎
三橋吉四郎	宮村湖一	三原武彦	三輪善太郎
水野元治	三関武治	三浦秀夫	三輪善太郎
三田村フミ	室谷慶一	向井真吾	村上道太郎
村川嘉一	村田不二三	村田常雄	村上道太郎
武藤徹治	森島靖雄	森川竜太郎	門馬功夫
森正義	森川喜八郎	川増次郎	森下茂樹
柳沢均和	山上亀久治	柳沢善作	敷下基裕
敷下藤次郎	山沢ヨシイ	山浦安一郎	山浦義雄
八木保寿	柳沢正夫	山田幸太郎	山下義雄
山田正男	山本正夫	山口忠	山下松吉
山崎文治	山口末一	山田豊稔	弓野松吉
雪印乳業KK	横田みどり	吉田豊吉	四十栄助三郎

翁の人生観

翁の人生観を一言でいえば、ゲエテがいわれた「勤労即人生」につきるといつてよろ。

十三才のときから、家事の手伝に精励し父の死後は一層働き抜いて、兄と共に一家をささえられた。

そして出面に行つても人の五割以上余分に働かなくては、帰つてその日不愉快で堪らなかつたと翁自身でいわれていたほどで、若い時から全く精力的に働かれた。

しかしこの頑張り屋の翁でも、生涯中全く唯一度へたばつたことがある。

それは翁が二十五才の時、ただ一人で、郷里の英彦山に登山した時のことである。この登山の行程は往復二十五里で、しかも山路も含まれるのは当然であるが、これを日帰りで決行し、帰宅は無論夜中になつたが、流石に家についた時は、わらじをぬぐ気力もなく、嫂にぬがしてもらつたが、

そのあとは前後不覚、疲れて熟睡数刻であつたといわれているが、へたばつたといつても、これはむしろ超人的なことでもある。

嗣子英武さんは翁を追憶して

「父は老年になつても決して楽隠居することは思いもよらぬところで、七十に近くなつた時でも、壯者をしのぐ元気なものであつた。思い起せば昭和四年の十二月のことであつた。父は既に六十七才であり、私は三十六才であつた。六十七才といえば、普通の人なら、まずよほよほというところであろうが、父は私を伴つて造材現場に進んで出張された。この旅は下川さんる下川駅から七里造材地へ向い、ここに一泊して山を廻り、直ちに下山し、列車に乗つて元紋別からまた鴻舞の奥八里の造材地に行き、ここにも一泊して、翌日山を廻り下山するという風に四日間で三十四里の雪道を歩んだのである。しかも父は和服に重い二重まんとを着け、尻をはしよつての視察の旅であつたが、血氣盛りの壮年の私が、その行程の途中、両ももにじんましんのような張れが出来て弱つたのに、父は案外平氣のようであつたのには、一層閉口した」と語つてゐる。

されば翁は信頼している嗣子英武さんが、事業熱心によく活動し、その経営の才もみなみならぬものであるが、隠居されることなく、逝去されるまで植田木材工業株式会社の社長として現役であつた。

もとより嗣子英武さんが同社の専務で、事業の経営は専務の力量によつて発展したものであるが、決して社長の空名をおかすものでなく、長い経験と著実な経営方針は翁が指示し、また監督するところであつた。

生涯を働き抜く精神即ちゲエテがいわれた「勤勞即人生」こそは翁の文字通り身を以て実行した人生觀といつてよい。

翁の処生觀には「自分より強い者には絶対護るな」ということがある。ここには不屈の意志がひらめいていて、艱難汝を玉にするの譬のように、難関に逢著しても屈せず、例えば製麻会社退職後の幾多の不遇に対しても屈することなく、遂に一家を好運に導く製材業に成功されたのである。

翁は初志の貫徹の上には、決して右顧左弁しなかつた。経済思想には「入るを計つて出するを制する」の方針をとり、渡道の際行李一つ、裸一貫から、今日の植田木材工業株式会社の盛大まで発展させたのである。

信ずることには投資もし、寄附もしたが、決してみだりに資を投じなかつた。

翁の処生訓の一つに「金を貸してはならぬ」がある。人は借りる時には笑顔であるが、返えず時には浚面となることが多い。

翁は渡道して幾年にもならぬうちに、勤勞と節儉によつて、相当蓄財し、雁木製線所長となつたころには、頼まれては百円二百円の金の融通もしたが、その利子も一か月一分五厘か二分であり、

これは一応利殖にもなりそうであつたが、利子どころか、元金もとれぬようになってその証文は高さ一寸位にもなつた。人がどうして強く請求しないかと問うのに対し、翁は「相手を見ると可哀想で請求できぬ。とれぬものを請求しに行く位なら、苦しくとも仕事をした方がよい」といわれたと云ふことである。

そしてその借用証書は全部嗣子英武さんの目の前で焼かれてしまつたのである。

こうして翁は五十才以後は他人に金を貸さぬことを方針とされたのである。

翁はまた事業の経営者としては、堅実主義で、みだりに事業の拡張のみを計るようなことはなかつた。翁は「梅の木はあまり大きくなつたら、実がつかなくなる。事業も手を拡げるだけではいかぬ」と訓えている。

いま植田木材工業株式会社の盛大も、根を培つて、枝も葉も繁り、そしてその実を結んだもので、今後も翁の方針が継承され堅実な経営がなされることを信ずるものである。

なお翁が堅実な経営をされて、その取引についても、相互の信に立脚して、永い取引が多く、且つ交情も濃かなものがあつた。

その一例はビール会社のことでも知られる。

本書の出版に当つて、日本ビール、札幌支店長穴釜升夫氏はわざわざ一書をおくられたので、左にその全文をかけることにした。

植田繁太郎翁を偲ぶ

九十歳の齢を重ねられて、しかも尙嬰鑠として壯者を凌ぎ、その御事業は益々發展して財宝は山と累なり、御子孫はいやが上にも繁栄して、その幸いを一身に集められたわが植田繁太郎翁の如きは、古来世に謂う福祿寿の三徳を兼備えられた珍らしいお方と申さねばなりません。

その御逝去に先立つ数旬、わが社の庭園に於いて麦酒会が開催されましたが、翁は名誉会員として出席になられ黒の紋付羽織に赤い紐、足どりもしつかりと竹の杖を片手に「鴨緑江節」を舞われました。そのひく手、挿す手は恰かも古えの東遊びもかくやと許り、庭上に鶴舞い、亀遊ぶの感がありました。今も尙私の眼底に烙印されております。

翁とわが社との関係は大正十三年五月当時の藤田支店長時代に始まり、昭和十八年十二月に至る迄約二十年間麦酒の函材を納入せられたのでありますが、そのお取引は伊藤組さんに次いで古く深く、その堅実なる取引振りは当時他の模範となつておられたと聞いております。

不幸なる戦争は色々の事どもと共にこの御取引も流し去つて仕舞いましたが、翁は最後迄麦酒会員として月に一度の集いを楽しみに御出席になりました。

北海道の開拓と共に伝統既に七十八年、わが社の麦酒は滾々として今後も流れ続ける事と思ひますが、麦酒会のある限り、翁のお姿は何時も彷彿として、私共と共にある事を確信致します。この混沌たる現世に、温顔を思い浮べつゝその御事蹟を追懷する事は、正に一眼の清涼剤であると存じ

衷心より敬意を表する次第でございます。

昭和二十九年七月

穴 釜 升 夫

因みにビール会社は明治九年開拓使のビール醸造所に端を発し、明治十九年大倉喜八郎氏に払下けとなつて民業に移つたが、翌年札幌ビール会社となり、その後明治三十九年札幌、日本、大阪の三麦酒会社が合同し、大日本麦酒会社となり、更に昭和二十四年九月日本麦酒会社に改められたが、北海道の良質の麦とホップの生産に併せて、その製造技術も優れており、サツポロビールの声価は名高く、社歴も最も古く且つ札幌の誇りの一つである。

翁の敬神崇祖

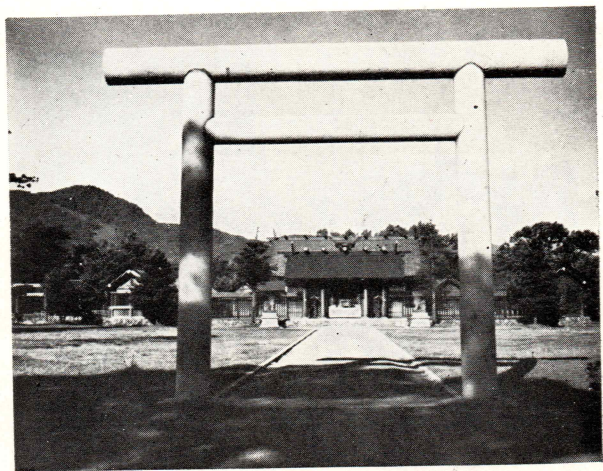
翁は神仏を尊び、自ら信仰に生きると共に、家庭にもこの精神を植えつけられた。

幼少の時、お寺にやられて二年も過して、当時陰気な寺院生活は、潑刺明朗な少年には堪え難く、ついに家に逃けて歸られたが、その時習い覚えたお経は、後年宗教心を芽ばえしめるものとなつたと想像される。

寺から逃げ歸つた翌年十四才で慈愛深い母が二才の弟卯七を残してなくなられ、更にその翌年一

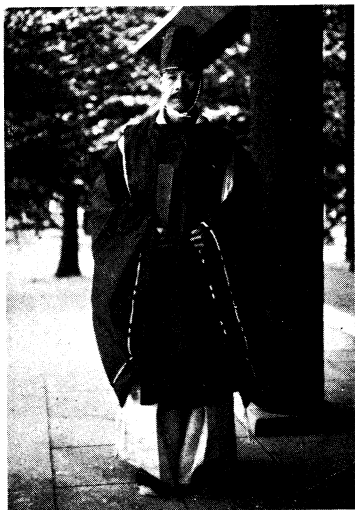


札幌神社



彰徳神社

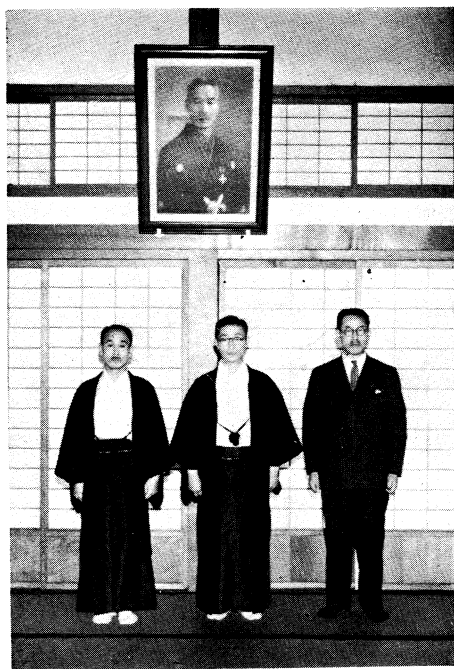
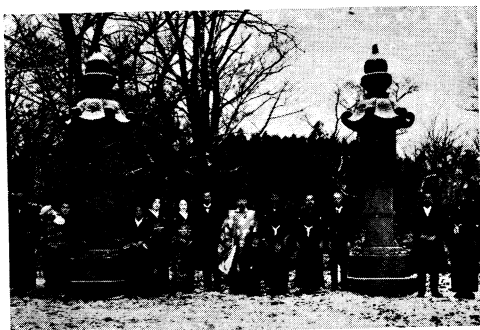
祭服をつけた翁



祭典奉仕する晩年の翁



翁が寄進した石燈
籠と親戚一統



札幌神社参集所内の掲額
と石井宮司、伊藤権宮司
英武氏

家の柱と頼む父上を失つたのである。

人生の無常はこうして少年期から感ぜられたのである。そして長兄と共に一家の苦難を身を以て支える翁の心には、徒らに無常を歎くよりは、神仏に祈るのは、一家の幸福を導く積極的なものであつたろう。この力強い信仰は、自ら祈り、崇めると共に、後には神々への奉仕の心となつて、神社の祭典奉仕などを進んでなさるようになったのである。殊に自ら独立して事業を行うようになってからは神社の祭典奉仕などは市民の先に立つて、翁の敬神家であることは、一般の強く認めるところで、家での敬虔な祭祀と共に、よく神社仏閣にも参拝された。次に翁が特に奉仕された神社の由来や翁の事蹟を語ることにする。

札幌神社

北海道の総鎮守たる札幌神社は札幌市の西辺宮が丘にあり、神域も広く、社殿も壮麗で、全国に誇るべき大社である。

北海道開拓使が置かれた明治二年、開拓長官東久世通禧がいよく北海道に赴任されるに先だつて、同年九月一日、明治天皇は神祇官に詔されて、開拓の三神、大國魂神、大那牟遲神、少彥名神を祀らせ給うた。この三神こそは、国土経営、殖産興業の祖神であり、北海道総鎮守の御神靈である。

こえて九月二十二日東久世長官は、この御霊代を奉じて、開拓使の役人や農工移民等を率いられて赴任の途につかれ、二十五日には函館に到着された。一行中の開拓判官島義男は、更にこの御霊代を奉じて札幌に向われ、その年十二月三日札幌の当時政庁たる第一番役宅（集議所）の竣工と共に、ここに奉遷されたのである。島判官は雄大な構想を以て札幌本府の建設を図られたが、この御霊代を奉安する北海道の新大社も造営しようと思われ、まず、その社地を当時最も札幌地方の地理に明かるい早山清太郎を案内として、円山に定めたのである。その時の島判官の詩には

三面は山に囲まれ一面は開け、清溪は四方に繞りて二層の堆

山溪の位置は豈たまたま然らんや、天造まさに社地を期して来たる

とあつて、新しい北海道の経営、しかも殖産興業の祖神をまつる大社を建てるに相応しい天然の佳境を得た喜びを賦している。

しかし島判官は明治三年二月東京に召還され、その雄志を実現し得なかつたが、その年五月、今の北六条東一丁目に仮社殿がつくられ、勅祭社「一の宮」が建てられ、ついで明治四年札幌再経営がはじめられ、四月東久世長官が札幌赴任後直ちに自ら円山の宮地の予定地を検分され、仮社殿の建築に著手された。そしてこの年六月二十二日太政官から国幣小社に列せられ、札幌神社の称号も新たに賜つたのである。

翌明治五年一月には官幣小社に列格し、翌六年七月には例祭当日は業を休み、参拝または遙拝す

べきことが全道に布達され、ここに全道総鎮守としての地位が明らかにされたのである。

こえて明治二十六年十一月には官幣中社に昇格し、更に明治三十二年九月官幣大社に列格した。

明治四十四年伊勢神宮材の下付を受け社殿の造営に著手し、大正二年これが竣工し、社頭境内を整備して面目も一新し、爾来名実ともに全国有数の大社となり、一時は北海道神宮への声さえあつたが、終戦後昭和二十一年官制の廃止と共に、宗教法人神社本庁に加入して今日に至つてゐる。

しかし、北海道の総鎮守として道民の尊信は厚く、その例祭は毎年六月十五日に行われるが、札幌祭の賑わいは全国的に有名なものである。

翁が札幌神社の祭典区代表委員になつたのは明治三十五年からで、翁の四十才の時からである。それから没せられるまで、五十一年にわたつて委員として奉仕されたのである。

その間明治四十二年及び大正十二年、昭和十二年の三回に第十二区年番祭典委員長をもつとめ、昭和十八年からは、札幌神社顧問に推されたのである。

明治四十四年大正天皇が皇太子殿下のおり、本道に行啓あらせられ、札幌神社に御参拝あらせられた際には、翁は献奉迎送委員となつて奉仕申上げ、その年また明治三十六年以来の札幌神社の改築のことが熟して、伊勢神宮材の下付を受けて社殿を新築することとなつて、その木材の木曳式が行われ、その行列にも翁は先頭に立つて奉仕された。この改築は大正二年に工を竣えて、御遷宮の折には翁は狩衣を新調して奉仕し、当時札幌区の祭典は十二区に分けられていたが、各区から二名

すつ代表委員を出したのであるが、翁もその代表委員の一人であつた。

大正三年四月、翁は額賀宮司、長田主典、阿部主典と四人で札幌神社の裏山に、神酒をたずさえ、新築の神社のけだかさを讃えながら、酒を傾けて歓談したが、翁はたまたま当時の神輿殿が狭小であり、また戦利品の展覧所もあまりに粗末なのをつらつら感じ、その後主唱して各区代表委員の参集を願つて、神輿殿と戦利品展覧所を新築することをはかり、委員の賛同決議を経て、新築する運びとなつた。この請負金は僅か千五百円であつたが、その中五百円はその年寄附され、残りは別途支出された。

こえて大正十年宮沢宮司の時代、翁は札幌神社の本殿から北一条に至る道路の開さく案をたて、これを宮沢宮司に発起させ、請負は翁と意気投合する札幌の実業家として第一人者であり、且つ敬神家である伊藤亀太郎さんをお願いし、この参道は面目を一新された。しかしその寄附金は請負金額だけ集まらず、五百余円は伊藤さんの負担となつたのである。

翌十一年翁がこの道路開さくの起願者であることから、宮沢宮司は翁に石燈籠一对の寄進を奨められ、翁も喜んで快諾し、出雲石の石燈籠を奉納された。これは後札幌神社境内の整理上、神殿の御垣の御正門前に移された。

また大正十年屯宮が炎上し、大正十二年翁の名儀で札幌神社旧神殿の払下げを申請し、札幌市大場与作さんの請負によつて改造され、屯宮社殿を再建したのである。

また昭和六年いままの貴賓館参集所の新築にも翁が参与されたもので、これも伊藤亀太郎さんの請負によつて成つたものである。

さらに昭和八年札幌神社社務所の移転にも、翁はその委員となり、これもまた伊藤亀太郎さんの奉仕的に請負うところであつた。

昭和十五年時しも紀元二千六百年に当り、北島宮司の折、社務所参集所内の大広間に札幌神社の発展に奉仕協力された敬神家として、大竹敬助さんと共に、翁の肖像が掲げられ、いまま故人の敬神を偲ぶよすがとなつている。

(因みに大竹さんは本道第一の称があつた旅館山形屋の主人で、敬神の念篤く、市内各神社にくされた人で、社会事業にもよくつくされた篤厚の士である)

翁は晩年にもたえず、神社に参拝されていた。昭和二十七年八月十日、札幌神社がお世話申し上げていた伊勢神宮式年遷宮奉議会北海道本部、札幌支部の発会式を産業会館に挙げられた。この時北白川房子祭主様や佐藤尙武参議院議長、佐々木大宮司が臨席された。その際翁も出席されたが、佐々木大宮司は特に翁を房子祭主様に「この人は額賀宮司以来今の宮司に至るまで、八代に互る間札幌神社に奉仕した人である」ことを紹介申上げ、晩餐会場では特に房子祭主様がにこにこ笑顔を以て翁にお酌を賜つたのである。傍らにいられた高田札幌市長は「長命はすべきものですね」と賛じて下さつたのである。

また北白川房子祭主様から札幌神社責任役員福島利雄氏を通じて伊勢神宮の木彫のお守も戴いたが、翁には「お達者ですね」との慰めの言葉をかけられ、翁の長命は、余徳も自らあつたのである。

彰徳神社

明治十年西南の役には北海道の屯田兵は出征し、武勇を發揮して武勲を樹てた。

黒田長官はその総指揮官であり、この乱の平定の殊勲者として勲一等旭日大綬章を授けられ、優渥な勅語をさえ賜つた。

こえて翌十一年開拓使は屯田兵の希望を入れて太政大臣の許可を得て、その年七月二十一日北六条西七丁目官有地に招魂碑を創建し、その年から屯田事務局において祭典を行うところとなつたが、日清戦争後の二十九年屯田司令官から札幌区の有志がこれを引継ぎをうけた。そして明治三十二年五月二十二日札幌招魂碑保存会が設立されて祭事を執行することとなつた。因みにこの年は札幌区に北海道区制がしかれて自治が発足したのである。

明治三十七・八年の日露戦争には北鎮勇士の武名も輝いたが、第三軍司令官たる乃木大将の揮毫を願つて新しく札幌忠魂碑が中島遊園地に建てられたのは、明治四十三年二月のことである。（黒田長官が有栖川宮熾仁親王の御揮毫を願つた招魂碑はその台下にほうむられた）

西南の役以来日清、日露の戦役、大正九年鉄嶺及び西伯利亞出動の英霊を加えた。これらの神霊は札幌神社に奉斎されていたが、別に神殿をたてる希望が区民に高まり、これが実現したのは市制がしかれた大正十一年である。まだ市にならぬ七月一日内務大臣から札幌招魂社創立の許可を得て取りあえず拝殿を造営したが、本殿ができなかつたため、御神霊は従来通り札幌神社に奉斎し、例祭毎に招魂社拝殿に奉遷して祭事が執行されたのである。

然るところ昭和に入つて満洲事変の勃発に伴つて戦死者も増加し、昭和八年四月、札幌招魂社奉賛会理事や一般崇拜者の発企によつて資が募られ、中島公園の隣地南十四条西五丁目に社殿を起工し、同年十一月竣工を見たのである。そうして神霊は札幌神社からお遷しされた。かうして清楚閑雅、真に忠魂義胆を祀るに相応しき社殿となつた。

その後支那事変が起り、英霊讃仰の念は一入まして全国の招魂社は護国神社と改まることとなつて、昭和十四年四月一日内務大臣指定札幌護国神社と改称した。翌十五年札幌市は紀元二千六百年記念事業に神域の拡張、造苑、記念造林を行い、昭和十八年十月新社務所参集所の改修案がなされた。

戦後昭和二十一年四月社格をぬぎ、護国神社の名を廃して札幌彰徳神社と改称したが、祖国のために死した忠魂は永えに讃仰さるべきである。

翁が関係したのは、招魂碑が北六条西七丁目にあつたところからで、この碑の時代から現在までに

尽力した人には、向井次郎さんや大竹敬助さんなどは特筆すべきであるが、その期間も永く、長寿と共に尽力した翁も珍しき功績者の一人であろう。翁と共にこの神社の発展につくした人には阿部宇之八、助川貞次郎、阿部弥市などの諸氏の旧い名が現われている。

札幌招魂社の出来た大正十一年翁は招魂社奉賛会の評議員を嘱託され、翌十二年には崇敬者の総代を嘱託され、昭和六年からは招魂社奉賛会理事を嘱託され、昭和八年の社殿の改築等についても翁の尽力するところが少くない。また翌九年には同神社の神符守札授与所の建築に当たっても翁と原鉄之助さん外二名で寄附した。

昭和二十二年翁は高田市長と共に同神社の顧問に推され、これも死に至るまで続いた。

彰徳神社の発展には翁は記憶さるべき功績者なのである。

三 吉 神 社

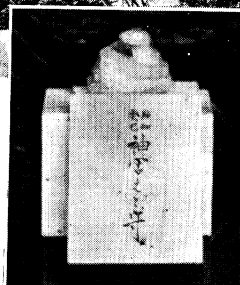
三吉神社は明治十年秋田の出身者が秋田の三吉大神の分霊を奉じて初め豊平河畔にまつり、翌年五月南一条西八丁目の現在地に遷して三吉神社と称し、十三年無格社に列格した。

その後十五年十月村社となり、明治三十年二月郷社に昇格し、昭和五年県社に列格したが、戦後社格をぬいで、神社本庁に加入したことは各神社と同じである。

この神社は大正五年以来札幌区一円を氏子区域として、例祭には市内各学校休校参拝することと



繁寿園（英武夫人と武夫夫人）



北白川祭主様から戴いたお守



常盤台造材部を視察する翁

（昭和二十八年二月）

なつて、市民に親しまれる市内有数の神社である。

翁がこの神社に関係したのは、札幌神社の尊崇の余波といつてもいい。大正十年札幌神社屯官が炎上し、その後屯官に神官をしていた佐藤桂氏が三吉神社の社掌となつたのである。屯官時代からの縁で翁もまた同神社の氏子総代となるに至つたのである。

翁と夫人とで三吉神社前に石燈籠が寄進されている。

昭和十五年三吉神社の創立満六十年記念には神社から感謝状が贈られている。

翁はその他市内の神社にはどこにでも参拝を楽しみにしており、晩年の二十八年にもこれをかかさなかつた。そして祭典のなおい等には鱸すくい、裸踊りなどの余興をして一座の人気を集めたものである。

またお寺は新善光寺であるが、これにも努め、同寺の社会福祉施設であつた養老院についてもつくすところであつた。

翁の敬神は厳肅壮嚴なものでなく、日常化された生活的なもので、いわば神集いに集う一種の自然な神代の神話にあるようなしなやかな人間味が流露しているものであつた。

そして自然市民のうちにも利害を超越してその敬神の心から心へ通ずる知己も生まれたのである。

巻頭にかゝつてある第三代札幌市長三沢寛一氏なども、翁の敬神にひかれて翁に親しみ、翁のお

宅にもよく訪れられた方であり、三沢市長の精神的な真直な性格が自ら翁を親しく思われたものとうなづかれる。また本市に重きをなす福島利雄氏（市議会議長などをつとめた人）の如きもまたその一人である。

本書の刊行に当つて福島利雄氏が左にかゝける一文を寄せられたが、この事情がよく書かれてもいるし、また愛の人植田翁の面影も偲ばれる。

植田翁を偲んで

福島利雄

人間は棺を覆うて後定るといふ諺の通り、存命中も立派であつて世人の愛慕を受け、人生の幸福を味わい、死んでなおいろ／＼追憶に残つた人を僅か札幌開府八十年の過去帳から拾つて見ても案外に多い。中には政財界に一大貢献をした人で、その人の小葉すらないという人もある。人生の興亡浮沈の酷しさをまざ／＼と見せつけられるのだ。

私と翁とは親と子ほど年令は違う。事実翁の家督英武君より私はアンチャンである。

その私が植田翁と特に親しくして頂いた奇縁は他人様とは違つて事業関係でもなく、又公職の面でもなく又度々の私の選挙にだつて一度も頼んだことがない。それならば何が縁か、それは翁が永

年に亘つて壮年立志の時代から死ぬる逝去の日まで只ひたぶるな敬神家であつた、この一事である。

多分想像するに翁の一生に事業の順逆もあつたであらう。七転八起のときもあつたであらうが、兎に角稀に長命して総鎮守の札幌神社を始め、市内各社にも差別なく必ず例大祭や大きな行事には、あの温厚な長身を紋服に包んで運んで参拝される姿は誠に立派なものであつた。

先年札幌神社の参集所の懸額のときは、翁は全く重心に還つたように喜び、また二十七年八月に伊勢遷宮について市内産業会館において北白川御祭主様の歓迎パーティーの際は、翁は最年長者として親しくお盃を頂いたとき「ワシは倅者だ、何時死んでもよい」と文字通り欣舞雀躍したあの姿が臉に写る。

私は翁を訪ねてお宅が常に清潔で又暖房設備から湯や水が自由に採れるお部屋からお客の接待も凡て食堂といつた所謂能率を考へての生活設計の中で、九十年の長い生涯を晩年は朝夕敬神念仏三昧の生活を送られたことはまさに文字通り極楽の境地であり、人間として何と幸せな徳の人かなと今更ながらありし日が偲ばれる。

翁は子供が好きでした。お宅にも沢山の孫さんや曾孫もおられるでしょうが、私の宅の外孫美津子を非常に可愛がられて御来訪のときは、嬢や／＼と可愛がられたのが、翁の死去を新聞広告に見付けて泣き熄まず、翌日上京準備中の私をせめて喪中の霊前に詣でて合掌しましたが、笑えば幼児

もなつき事業とならば只ひたぶるな精進努力が今日の大植田木工場の礎地を磐石の上に築かれたものであつて、嗣子英武君を始め御一門の濃がれた愛情で、これ程有難いものはないと思う。光陰実矢の如し、翁逝いて一年、出版の企を聞いて割込みを強要して故翁の在りし日を偲ばせて頂いたことに感謝を捧げる。

翁と教育

翁の少年時代にはまだわが国の学校の制度も整つておらず、且つ父母にも早く死別されたので学歴としてはない。しかし人間の修養練成は学校教育にのみよるものでなく、翁が学校教育を受けなかつたといつても教育がないとはいえない。

生れつき伶俐であり好學心も強かつたので若し順涸に學問をされたら優れた學者にもなつてゐる。

父母なきあとは、幼い弟たちを擁して長兄と共に一家を支える翁には、文字や書物による學問に親しむ余裕はなかつた。しかし教育の第一義である人格の完成に対しては常に努力されたものと信ぜられる。

不遇のうちにあつて肉親の弟たちを愛してこれを護り育てる翁が真面目に逞ましく勤勞するうち

に、自ら人の愛と信との勉強を積まれたのである。しかも不遇のうちに翁の心境をはけましたのは神への信仰でなかつたかと筆者は思うのである。

近代の國民教育の父ともいえるペスタロツチ先生は「神は震える悲慘の唯一の支柱である。不安な悩みに際して、身を神に向けない人間はすべて絶資の深淵に陥る」、「神への信仰こそ一切の深淵から救う」と述べているが彼の教育は神への信仰を基調とするもので、そこに総ての人間に独立的な聰明な生活をするになくはない識見と思考力を一般的に与ようとするものが、生まれたのである。

翁が不遇の少年時代から神への信仰から人間を愛し、信じ、人間に感謝し、従順であることを學び得、従つて落着ある教虔な有徳な人間生活を営むことを続けたのである。

仏語に「発心正しからざれば萬行空し」とあるが、翁が教神の芽ばえにより発心正しくその行うところ澄み切つていたのは生涯を輝かしいものにした所以である。

ともすればかきにごしけり山水の

すませばすます 人の心も

これは明治天皇の御製であるが、翁がにぎりなき心境を保持したのは神への信仰の賜であり、また目に見えぬ神の心にかよふこそ

人の心の誠なりけり

目に見えぬ神に向ひて愧ぢざるは

人の心の誠なりけり

の御製のまゝに、神に対しての崇敬、帰依が翁の真心を磨き上げたものであろう。

元札幌市長三沢寛一氏が翁に「澄懷道味長」の書を贈られたが、神への信仰に澄みきつた翁の雅懷、道味長えなるを表わしており、額賀宮司が翁の長命も一家の繁栄も誠人なればこそ神の授け賜いし所との意で

玉幸^{たまきわ}ふ神やさすけし誠人の

いのち長さも 家のさかえも

と歌つて下さつたのである。

かように翁は早くも神への信仰により心田を開拓し、曇らぬ心に自ら聰明な生活をする識見と思考力を培つて行かれた。またこれは実業についてはその逞ましい勤労と共に常に実地について創意と工夫をかさね、しかも人についても謙虚に教えをうけ入れて事業を成功に導いたものである。

かく翁は自己の修養についてすぐれたものを持つてゐるが、翁はまた家庭の教育についても大いに留意するところであつた。

家庭教育についてもまず翁の根本觀念は愛と信である。夫人に対し、英武さんに対し、翁は心から愛しました信じた。

そこから一家の同情と協力が生まれ、一家の繁栄が来なされたのである。

戦後不良児の問題は由々しきものであるが家庭に愛と信の缺如からこの社会悪が生まれていることを思えば翁の家族を心から愛じ信じておられたことは大いに学ぶべきことである。

神に仕えて誠心誠意の翁は社会の人に対して感化を与えた実例も少くない。例にしてははばかりもあるが、現札幌神社宮司が風雅毅然の序文を物された中にも、誠を以て論ず翁の風格が偲ばれる。

また学校教育についても翁は熱心あり特に初等教育については常に関心を払われておられた。

お孫さんたちの学校の保護者会の役員としても積極的にお尽しになつたのである。

左に当時の校長先生であつた笹原健三先生の追憶をのせてその一端を偲ぶこととする。

植田繁太郎翁の追憶

植田翁は大正十三年に北光小学校創立の当初、保護者会副会長に選出され、昭和三年初代宮村会長の後をついで第二代会長に推されて昭和十二年退任されるまで、十五年の長きにわたつて勤続された。校下父兄の信望がいかに厚かつたかが窺われる。私が在任中に挙げた昭和八年の同校開校十周年記念式の際には勿論会長として多大な御尽力を頂いた。

私が始めて翁に接したのは二昔余りも前の話である。西創成小学校の首席訓導であつた私は、昭和八年七月六日付で北光小学校に補すの辞令を戴いた。赴任間もなく挨拶廻りの折、会長の翁

をお宅に訪ねたのが初対面であつた。爾來昭和十一年の春私が幌西小学校に転するまで三年間、公私共大変お世話になつた。

初対面の際「学校には必ず長所や短所があるが、校長さんは変り目にはあせらずじわじわ実情を見てやつて欲しい」と物静かに穏かな調子で若い私を諄々と諭すようにいわれたことは今なお忘れられない。

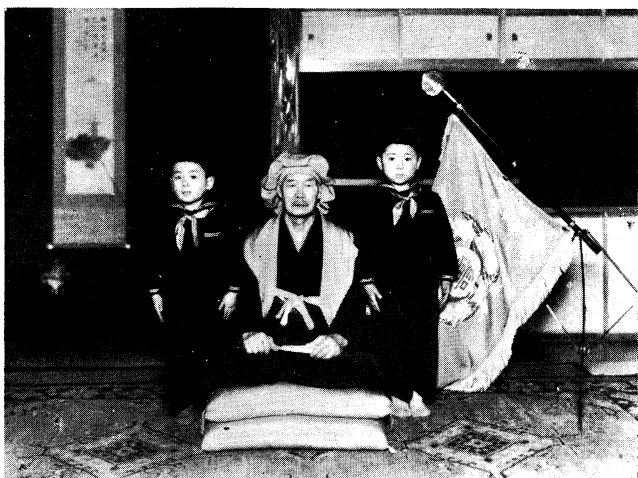
学校の卒業式や大切な行事、儀式には必ず顔を出された職員、新年会、忘年会、花見等の催しにも卒先出席されて親睦を深められ、二次会に自腹を切られたことも再々であつたと聞かせる。

卒業式等で必ず児童に「喜んで働くこと、勤労を尊ぶこと、苦勞をこらえ、頑張つて働き通すことが大切である」と話されたことも思い出深い。

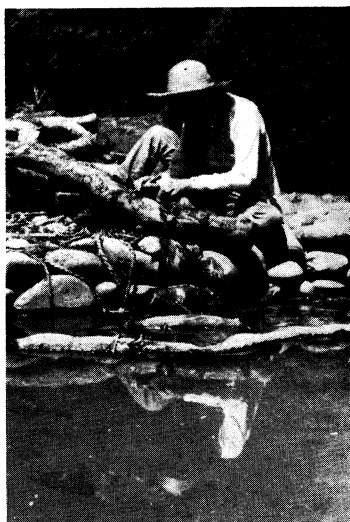
体軀はさして頑健とは思われなかつたが、長寿を全うされたのは、矢張りしんが健康の上に、物事無理をされず節制に留意されたためかと思われる。いつも和服姿に羽織袴をつけられ、やうつむき加減で静かに歩いてこられたあの姿、温容がはつきり目に浮んでくる。

始めて学校長の重任についた私が北光在任三か年を愉快にしかも大過なくすごし得たことは、偏に翁の温情と御指導によるが多かつたことを想起される。

笹原健三



米寿の翁と百々寿旗



繁寿園の手入をする翁

笹原先生は現在北九条小学校長である。この文の中に「児童に喜んで働くこと、勤労を尊ぶこと、苦勞をこらえ頑張つて働き通すことが大切である」ことを話されたのは翁の体験から割り出した教育觀であり、勤勞即人生の哲理を平易に述べたものである。

翁はお孫さんや曾孫を愛したように、他家の子供を愛し、明日の日本の繁栄は子供を愛することであり、また愛することは立派に成人させることであり、教育に俟つべきものとその教育を尊重されたのである。

翁の趣味

少年時代の追憶にあるように、翁は川や海に魚をとりに行くのが楽しみであつたようで、自然に親しむことがうれしかつたのであるが、青年期には独立心に燃え、自立するためには、恒産なくば恒心なしの信念で、營々致々として働くことが、苦勞よりもむしろ楽しみとしたといつていい。

翁の仕事熱心はかくてその勤勉を上司にも認められたので、仕事自身が一つの趣味といつても過言ではなかつた。

またようやく事業のめどがつき、事業の成功を祈る上からは、神への信仰が高まり、それが祭典等の奉仕となつて生涯の敬神的事績は楽しんで行われたものとも解される。

翁が青年時代の趣味として挙げられたものに義太夫であり、浄瑠璃を口ずさむこともまた聞くことも楽しかったのである。六十過ぎては自宅に同好の士をも集めて、その温習会などを開き、野沢才鳳師もよく同家に見えられた。

翁を語る逸話の中に、「札幌在住の名士連をメンバーとするビール会には枯木の様なシワクチャなお爺さんが鰯掬などの踊りをやつていつも人氣の中心となつてゐる。これは名誉会員の植田木工場社長繁太郎翁である」と或日の北海タイムス紙上に書かれてゐるが、洒脱なこんなかくし芸もあつて、これは癸亥和合会でもしばしば行われて、一座を賑わしたのではないかとほく笑ましく想像される。

癸亥和合會

大正十一年の秋、翁と同年生れの大島喜一郎さん及び伊藤龜太郎さんと翁の三人が、明年お互に六十一才の還暦の年を迎えるので、札幌市内に文久三年、癸亥の年に生まれた人六十一人を募つて和合の会をつくることを計画した。まず市役所の戸籍の係の人に協力を求めて戸籍簿によつて調査した調査の結果六十人を調べ上げられたが、もう一人足りない。なんとか年の数だけの会員にしたい

と話し合つてゐた處、一人の印半纏を着た男がわしも六十一才になるから入れてくれるかと申込んだので、ようやく、所期の六十一人の会員が出来上つたのである。かくて大正十二年一月、札幌神社の社前で和合会の結成式をあげ、且つ共々還暦のお祝いをし、会の名を癸亥和合会と命名した。

癸亥和合会の会則は十条から成り、第一条には本会は癸亥和合会と称し、文久三年生れにして札幌市在住者を以て組織すと定め、第二条には本会は会員の親睦を旨とし、冠婚葬祭に当り互いに慶弔し、且つ共済互援をなすを以て目的とすると会の目的を示し、第三条には、役員について定めて會長一名、幹事十三名以内、會計一名、評議員若干名となつてゐる。第四条には毎年一月総会を開き且つ新年宴会を開催することを定め、第五条には以後古稀（七十才）喜寿（七十七才）長寿（八十才）米寿（八十八才）百寿（百才）の祝賀盛筵を開催することを定めた。また第七条には百寿の賀筵を徹したるときを以て解散するとあり、第十条には百々寿旗使用内規を定めてこの会旗は総会または花見等の本会員の団体集合の節にその場所に掲揚し、会員死亡の通知を受けたときは本旗を出して葬列に加わるものとするを定められたのである。

こうして同年生まれの人が還暦を機会に癸亥和合会を発足させたのである。

思うに昔は人生五十の語が用いられていて五十にもなれば老年の部に入り、六十になると次第に友人知己もかけて行き、そぞろに寂しい思いがするのである。還暦は大陰暦で干支が一周りして元に戻るのので、六十一才がほんけがえりと称して賀筵をしるのが、わが国の古い習しである。科学

の上にはほんけがえりが、根拠のないものであることは今更いうをまたないが、孔子は六十にして年順うというから人生の完成の上からはあながち意味がないわけではなく、教え子が恩師の還暦を機会に祝意をしてその徳をたたえたり、家庭にあつて父母の還暦を子らが祝うなどは心豊かな行事で、むしろ美風として存続させたいと考える。いまは医学が進歩し、衛生思想も保健生活も発達したので、六十で老人扱いを考えものとしても翁たちが、自ら同年輩の老人たちが余世を楽しくしかも健康に留意して慰め合いながら長寿を保とうとした考えの下にこの会をつくつたことは珍らしくもあり、また意義なしとしない。

この会の会員はその郷国や職業や地位を異にした、しかも男女を含むものであつた。会員名簿には金貨業の五十嵐佐市さん、土木請負業の櫻庭百太郎さん、印刷業の本間清蔵さん、米穀商の吉岡佐一さん、洋物商の松越忠蔵さん、写真館の三春忠次さん、木材商の岡佐平さん、小間物化粧品卸商の小泉清吉さん、湯屋業の中垣内美太夫さん、仲立業の石川金次郎さんなどの外、清水轍三、阿部庄治、中野万太郎、庄司亀次郎、岡村三治などの諸氏などの名も見られ、女の会員は十三名になつてゐる。

最初の会長は大島喜一郎さんがなつていたが、大島さんは昭和十三年十月二十五日死去されたので、その後は翁が会長となつて、会計幹事も兼ねられたのである。

この会の結成された年からも、なくなる人や、また札幌市から転居するものも出来て、年を経る毎に次第に会員の数も減つていつたが、生き残つてゐる人たちは会合毎にこの会を作つた昔を語つたり、また花見などの会を催して仲よく余生を楽しむものであつたが、翁の語るところによると喜の字の祝いをした時には、半数に減り米寿のお祝いはわずかに翁を入れて三人となり、九十才の関門を突破したのは翁のみで、その翁も九十一才を一期として、昭和二十八年八月二十一日、百才の夢は空しくも、よきお爺さんと曾孫たちにも慕われながら、癸亥和合会最後の会員として天寿を全うして永眠されたのである。しかもその霊前には百々寿旗が置かれて、翁は死してもその旗は永久に獲得されたのである。

翁の知己

翁の知己として最も泥懇であつた人に、伊藤亀太郎さん大島喜一郎さん、小竹文次郎さんなどがある。

伊藤亀太郎さんと大島喜一郎さんとは翁と同じく文久三年の生まれで、三人が發起して癸亥和合会を結成したことは既述したところである。

翁は最も信頼したこの二人の方に、何くれとなく相談し、交情を常に温めたことは、数々の事例

があることであろうが、その嗣子がともに札幌中学校の同窓生であり、父子二代その交情また濃やかなるものがあるのも奇しき因縁といわねばならぬ。

「人を見るに友を見るに如かず」の語もあるが、良友こそはその生涯に最も関係があり、「類は友を呼ぶ」ともいい、また「朱に交われれば赤くなる」の譬もあつて、伊藤さん大島さん及び翁がともに敬神家であつたのも故なのである。

小竹文次郎さんは翁と年齢の開きもあるが、翁と親近した、最も翁の面目を熟知した知己で、本書の起草を思い立つた人であり、翁の信頼も特に篤かつた人である。

伊藤亀太郎氏

本道の土木建築請負業界の巨頭として、また多額納税者としても有名であつた伊藤亀太郎さんは、札幌に住んだ最もすぐれた方の一人である。

伊藤亀太郎さんは文久三年生まれであることは前に述べたが、その年十二月二十六日、新潟県三島郡出雲崎町字尼瀬の出身で、岳父栄吉さんの五男に生まれ、はじめは亀五郎といつたが、兄さんたちがなくなられて、後亀太郎と改名された。明治十八年五月二十三才で渡道して札幌に住みつたのは、明治二十四年である。

伊藤さんが渡道の際は大工職であつたが、大工道具一つ持参されず、それこそ文字通り裸一貫で

あつたが、粒々辛苦の末、奮闘生活十年、ついに明治二十七年土木建築請負業をはじめ、ついで木材製材業及び鉄工場を兼営された。本格的に製材業をはじめられたのは明治四十二年からである。

古い時代に刊行された「札幌の人」の書には伊藤さんについて「札幌成功者の第一人者、礼讓寡黙の人、仁侠に富み、公共事業に多額の寄附を惜しまず、よく産をなすと共によく世のためにつくした」と書かれていたが、伊藤亀太郎翁の人柄については、生前から札幌の市民の敬仰するところ、今なお忘れ得ず、欽慕する人が少くない。

翁は寡黙の人で、陰徳を積まれて、決して自分の善行を語つたことがない。しかし積善の数々は、いつしか巷間に伝わり、その床しき美談は、心ある人の胸をうつて自ら人心を淨め、温めたのである。

伊藤翁が恩義を重んずる情誼の厚い人であることは次の逸話でも知られる。

翁が札幌にわらじをぬいだのは豊平にいられた小林さんというささやかな大工職の家であつた。その後独立して刻苦精励の結果、ついに土木建築請負業を営まれるようになった時、翁の家紋は◆と定められた。これは札幌にわらじをぬいだ小林さんの小の字を形どつたもので、初めにお世話になつた小林さんの恩を永久に忘れぬためであり、小林さんに対しては常に交誼を厚くしていたが、小林さんの死後はその未亡人に対して、そのなくなられるまで常に仕送りを続けられたと伝えられる。

伊藤翁がまた神仏を崇め、人を愛し、信ずるの念が厚かつたのも有名である。

札幌神社の諸事業を請負された時にも、神社の世話方の意向は、敬神家の伊藤翁に請負いしてもらつてこそ、事業の意義は一層深まると信じたからである。

また円山の瑞竜寺の建築の請負についても同様であつた。当時中川検事長をはじめ札幌の有識知名の人達が、瑞蔵寺管長になられた盤竜和尚を中心に北海道場をつくつて参禅していたが、新たに一寺を建立することが企てられ、これには是非精神家である伊藤翁に請負ってもらうことを決議し、松本菊次郎さんたちが、このことを伊藤翁にお願いをした。翁は「私は門徒宗で、禅宗のお寺は然るべき人に」と固辞し、「そのかわり私も応分の寄付をさせて戴きましよう」と返事されたのである。しかし参禅の道場瑞竜寺の建設は、精神高潔な伊藤翁の請負によつてこそ意義深いものとして、強つてお願いして、ついに伊藤翁の請負によつて、まことに立派な出来栄に建築されたのである。

しかも寄附金は思つた程集まらず、伊藤翁にはまたしても損がかけられたが、翁はこの類のことについては、終生一度も愚痴や苦情を口にされたことがなく、ましてや誇りがまじきことのなかつたのは、如何ばかり肚の出来た人であつたであらうか。

また南一条橋の私設の際にも、同様市民有志の懇望によつて請負し、これも同じ結果となつたが、これに類することはけだし枚挙に暇がないであらう。

人を愛し、人を信ずるの心の厚かつた例としても数多いことであるが、まず翁の事業を成功させた協力者の田中銀次郎さんのことを語るのが適當であらう。田中さんは伊藤組の支配人で、その人格も立派であつたが、卓越した事業家であつた。翁は田中さんを信ずること誠に篤く、絶対的に田中さんを信頼して、すべてを委ねた。主従一体といつても、これ程の名コンビは見られないと今にも語り草になつている程、互に敬愛し、信頼しあい協力し合つて、数々の美談は、当時の関係のなす市民の心さえ温めたものといわれている。

田中さんの後嗣には翁の愛孫で、当主豊次さんの長女スミさんによつて立てられている。

伊藤翁はよく隣人を博く愛し、陰徳を積んで、博愛博施、しかも施して思わすの心境は実に澄み切つたものであつた。

また翁は早くから失明されていたが、心眼はいよ／＼澄み、その温容は実に風格のあるもので、逢う人をして慈顔自ら敬意を感じしめるものであつた。

伊藤翁は昭和十九年六月二十七日八十一才を以て逝去されて、植田翁も市民と共に哀惜惜かぬところであつた。

嗣子伊藤豊次さんは翁の後を襲い、各事業を分離して、株式会社改められ、その事業はいよ／＼発展されている。

植田翁は、伊藤翁と親しみ、且つ翁の人格を最も推服する一人であつたが、昭和二十一年十月、

栗林徳一さんが終戦後追放の嵐の中に貴族院多額納税議員をやめられたのに伴い、その補缺選挙を行われるに際しては、小竹文次郎さんの入れ智恵もあつて、伊藤豊次さんを当選させたく、まず豊次さんに立候補をすゝめ、伊藤豊次さんははじめは渋られたが、翁の切なる奨めによつて立候補され、無競争で同氏は当選されたのである。しかしこのかけには植田翁が同志を糾合し、伊藤さんの説得及び選挙を有利に運ぶ活動をして、これは全く翁の一人舞台の感があつたと称される。

これも実は先代への恩慕の強きあらわれでもあつたであらう。

大島喜一郎氏

翁の親友として、翁を信頼させ、交情深かつた大島喜一郎さんは、文久三年八月八日加賀の国に生まれ、明治十六年五月二十一才で本道に移住された。大島翁はかつて「他の人はよく北海道に渡るとき、行李一つだけ持つて来たというが、わしは行李どころか風呂敷包み一つしか持つて来なかつたのさ。全く裸一貫といつてもいい」と語られたといわれている。しかしこの裸一貫二十一才の若さで渡道した氏が土木請負業並びに木材業に従事して産をなし、札幌実業界の重鎮と謳われるようになったのは氏のなみなみならぬ人柄を示すもので、氏はよく公共慈善の事につくしたのもまた有名なことである。

明治三十二年十月、札幌区に北海道区制が施されて、十一月第一回の区会議員の選挙には一級より当選し、三十六年には札幌区第九衛生次長となり、三十八年札幌区常設委員となり、四十一年札幌水力電気株式会社取締役役に当選しており、また札幌商業会議所の同社代表議員ともなつてゐる。明治四十三年五月北五条東三丁目製材所をたてたが、これは当時としては最新式の機械数台を据えつけ、盛んに製材を行い、今も市内有数の木材工業が続けられている。大島さんは癸亥和合会の初代会長であるが、昭和十三年十月二十五日逝去された。

小竹文次郎氏

翁と親しき間柄にあり、後には四女純子さんを翁の嗣子英武さんの長男英次さんに娶わせて親戚となられたが、翁の人格に最も深く親炙した第一人者といつてよく、翁の生涯を記録にとどめ、これを世に出し、翁の一家や知己に残されようとされた人であることは、はしがきにも書いておいた通りである。

小竹さんは明治十五年十一月二十七日、京都府丹後国支那郡宮津町に岡本金四郎さん（母はきん）の二男として生まれ後、小竹和七さん（養母はトメ）の養子となつて小竹の姓を名乗られたのである。

小竹さんは小さい時から明敏な方で、長じて上京し、早稲田大学専門部政治経済科に学び、これを卒業されたのは、明治三十八年七月で、直ちに名古屋市の明治銀行に入り、明治四十年三月都合

上退職され、同年九月北海道拓殖銀行に入社し、大正三年九月為替課長兼割引課長となり、大正八年一月拓銀頭取の推薦により株式会社拓殖貯蓄銀行常務取締役就任され、また同行が組織を変更して普通銀行となるに伴い、大正十一年一月新設された北門貯蓄銀行専務取締役就任された。またこの年十月札幌市の第一期市議員選挙には一級から立候補して当選されて、市政にも参与せられた。

その後北門貯蓄銀行は北海貯蓄銀行と改称されたが、同じく専務取締役をつづけられ、昭和二十年五月同行が北海道拓殖銀行に合併されるに伴つて、北海道拓殖銀行の監査役に就任し、昭和二十五年札幌証券取引所が開所されるに伴つて、同所の理事長となられ、なくなられるまでつづけられた。

小竹さんはかくの如く、渡道されて以来役せられるまで、本道並びに札幌市の金融につくしたが、経済界においては、札幌グラントホテルの創立に参画されて、終始監査役であつたこと、また晩年北門証券株式会社を創立して社長となられており、また札幌商工会議所議員も永く勤められた。

公共的なことにも常に意を注がれたが、札幌育児園理事長を永く勤められ、戦後共同募金北海道委員会会長にも就任されている。

また小竹さんに学校教育にも常に關心を払われ、各種学校の寄附金募集等には卒先して勧誘して自らも分不相応の寄附をされるなど熱心であり、多くのお子さんを持たれたことから、学校にも多く關係があり、旧市立高女、西創成小学校等の保護者会長（後にPTA会長）にも就任し、その尽力するところが大きい。

また學術の振興に対しても関与するところ少なくなく、対癌協会、北方結核研究所等に創立当時から關係されたこともその一例であつた。

小竹さんは本職の銀行事業に卓越した才腕を持たれた人ではあるが、稀に見る多方面の活動をされたもので、戦後は裁判所の各種調停委員として活動されたり、また母校の早稲田大学の校友会についても、熱心で同校札幌校友会の会長（後名誉会長）を勤められた。

小竹さんの家庭は夫人温子さんとの間に、長男俊夫さん、二男英夫さん、長女光子さん、三男信夫さん、四男邦夫さん、二女明子さん、三女清子さん、四女純子さん、五女弘子さん、六女とも子さんの十人の子があり、いずれも成人してよき家庭をつくられている。

小竹さんが植田翁と厚誼を結んだのは拓銀在職当時からで、それから三十年余に互り特別親しくしており、翁の生涯は北海道開拓史の一断面であると共に、刻苦奮闘の生活記録は世の人の龜鑑であると信じ、翁の伝記の編集を思いたち、本伝記を纏めつゝあつたのである。昭和二十五年の暮翁の米寿のお祝いに出席することを樂しみつゝあつたが、胃癌の症状が重なり、ついに外出不能となり、その年十二月十六日のお祝いにも出席出来ず、一書を認められて、長男俊夫さんに賀筵式場に

代読してもらった。そのお祝いの言葉は、翁の面目を躍如とさせ、また植田家の将来を心から祝福するものであるので、左にその全文をかくけることにした。

お祝の言葉

今日の栄えあるお宅のお祖父さんの米寿のお祝には、是非出席させて頂いて、席末を汚しますことを、前から楽しみとしていましたところ、図らずも病床の人となり、参列できませぬことは、私の終生の恨事とする所でございます。

この米寿のお祝は、この幸福を神仏と祖先に奉告感謝し、今後もその御加護は勿論、周囲の縁故者の御協力を得て、百寿の寿を保ち、植田家の家運長久を祈られんとする御趣意に出たものと拝しますが、このお祝は人生最大最高のものでありまして、この喜びに会う人は万人中一人か二人しかなく、真に慶祝極りなき次第であります。

世の中で真に幸福な人は、福祿寿を兼ね併せた人だと申します。ここに福と申しますのは、自然的に仕合せの意味で、祖父、父、子、孫と缺けなく、よく家系が整っていたり、不時の災厄に遭わなかつたりすることもこの福のはたらきかと思いますが、この植田家におかれましては、大祖父さんを大黒柱として第二代の英武さん、第三代の英次さん、第四代の英隆さんに至るまで世

継ぎが確定し、基礎は万代不易と申してよろしいかと存じます。

次に祿は福の自然的に仕合せなると異り物質的、経済的の意味を含むものと解しますが、この点におきましては、ここに御列席の伊藤さん大島さんの御先代と同様、大祖父さんが、渡道以来文字通り日夜不眠不休の大努力をつづけられ、或程度基礎ができたとき、これまた伊藤さん大島さんと同様であります。英武君という非凡な二世の協力によつて更にまた英次君という明敏な三世の協力によつて事業に一層拍車を駆け、今日の盛運を築かれたもので、祿においては万点と申してよからうと思います。今日植田家の事業、その他について詳述の要はございませぬが、大祖父さんは立志篇中の人と申しまして何人も異存がないと存じます。

最後に寿につきましては申すまでもなきことで、八十八才の今日、心神共に矍鑠としてなお壯者を凌ぐの慨があり、自ら社長として社業を統轄し、社交にも家政にも触れておられます姿は実に敬服にたえませぬ。この分なら百才までの長寿は疑いなきかと存じます。

世には祿に恵まれ、生活の豊かな人は沢山ありますけれども寿を欠き、相続人を早く喪う人があり、又長生きする人も可なりありますけれども祿に見離されてその日の生活に苦しみ、中には「命長ければ恥多し」といわれる人さえ相当にあり、福、祿、寿の三つを兼ね併せますることは人

生至難中の至難でありますが、御当家におかれましては、これを最高度に兼ね併せておられますことは誠に珍とし、慶賀すべきことであります。而してこれは大祖父さんの御精進、御努力の結晶であることは勿論でありますが、神仏の御加護と祖先の余徳もまた与つて大いに力あることかと忖度致します。

どうか大祖父さんにはこの栄えあるお祝を機会に、一層加餐自重、百歳の寿を保たれまして、今後愈々益々家業の發展に努力せらるると共に、社会公共の事に尽瘁せられんことを祈つて已みませぬ。所懐の一端を述べてお祝の言葉と致します。

昭和二十五年十二月十六日

小 竹 文 次 郎

その後病が重つても小竹さんは瞬時を惜しみ、その執筆に当られたが、完成を見ずして昭和二十六年一月五日惜しくも七十一才で永眠された。しかしその記録は本書の刊行を見たわけであることは既述の通りである。

因みに、翁の米寿の祝いには同業の大場木工場大場末吉さんは米寿を祝つて

魂こめて君が植えたる一本の

米は繁りて今みごとなり

播きし米見事みのりて植田翁の

米寿の祝かゞみ餅かな

の歌を献じている。

また札幌神社大坪富宮司は

八十とせにやとせをかぞへすこやけき

おきなはよろしうたけせすかも

と歌い、藻川山田幸太郎先生は

うまし国植田にしける八束穂を

いのちの杖と人はいうなり

米の坂やす／こえし君なれば

たかねの百々も手折りますらむ

と歌われた。

福岡縣人會

九州と北海道。交通の發達した今日ではその距離感は著しく短縮されている。快適な旅をすれ

ば、日ならずして九州から北海道に来ることも、また北海道から九州へ行くことも楽なのである。

しかし、蝦夷と呼ばれた本道が北海道と改められ、十一国八十六郡に分けられた開拓使のはじめから、明治三十年代までの旅は今日では想像もつかぬ不便なものであつた。

北海道といえ、すぐ雪と熊とが想像され、寒さは用を足している小便が直ちに小枝のように凍つてしまうと本当にされたり、熊が人家を時々襲うのが普通と考えられたりしたのであるから、アイヌの住む荒涼未開地と信ぜられた往時と、いま日本再建のホープとされているのと考えあわせてこれも隔世の感が深い。

北海道の開発のはじめ、北海道に近い奥羽、北越の人々が多数開拓に従事したことは当然と考えられるが、歴史を繙くと、最も遠い地方と思われる九州人こそ本道開拓の重要な役割を果しているのに驚くのである。

まずはじめの開拓使長官鍋島直正は佐賀藩主たりし人であり、また札幌本府創建の開拓判官島義男はその寵臣であり、更に札幌再経営を強調した権監事西村貞陽も佐賀の人であり、開拓使の黒田か黒田の開拓使かとさえいわれた開拓使のワンマン黒田長官は鹿児島出身である。

また開拓使の権大書記官兼准陸軍大佐堀基、第四代開拓長官を兼任した西郷農商務卿、三県時代の時任、調所、湯地の三県令、安田北海道事業管理局長、永山第二代道庁長官（初代第七師団長）

園田第八代長官、河島第九代長官、山之内第十一代長官、大迫第二代師団長などはみな鹿児島出身である。佐賀出身には中村第十二代長官、西久保第十三代長官、池田第二十代長官、宇都宮第六代師団長などがあり、安場第六代長官は熊本出身であり、上原第四代師団長は宮崎出身であり、内野第八代師団長は福岡出身であり、佐藤第十二代師団長は大分出身である。

数え挙げるときりがないほど本道の枢要な位置について道史の上に輝かしい足跡を残した人に九州人が多いのは、維新の大業に九州人が多く参画したことも偲ばれるのである。

かように官界または軍人に大物がおられたのみならず、学界や産業界にも貢献した人は数多い。学界では南鷹次郎（長崎）八田三郎（熊本）時任一彦（鹿児島）などがあり、産業界には磯村豊太郎（大分）宇都宮仙太郎（大分）持田謹也（熊本）中村卯太郎（福岡）植田繁太郎（福岡）林常夫（長崎）吉田健作（福岡）松方正熊（鹿児島）等がある。

また地道に本道開拓につくした人は、或いは屯田兵として、また許可移民として、または自由移民として入植し、その開発の努力は大きい。

屯田兵は明治八年東北の士族が零似に入つたのはじまり、はじめは多く奥羽、北越の移住者が多かつたが、九州地方からの移住は屯田兵の大量移住が計画された明治十八年から始まる。即ち十八年には佐賀、鹿児島、熊本の各県から江別、篠津に入り、二十年には鹿児島、熊本、佐賀、福岡の各県から新琴似、室蘭に入り、二十一年には大分、佐賀、福岡の各県から新琴似、和田に入つ

ており、二十二年には熊本、福岡、佐賀の各県から太田、滝川に入り、二十四年には鹿児島県から上川郡、空知郡に入り、二十五年には大分、鹿児島、鹿屋島の二県から上川郡、空知郡に入り、二十六年には長崎、佐賀、福岡の各県から上川郡、空知郡に入つてゐる。そして明治二十七年九月屯田兵条例が廃止されたのである。

団体移住としては明治十六年当別村に二百余人の福岡県人が移住し、豊平町字平岸には熊本県から団体移住者があり、篠路村福移は福岡県から団体移住した部落なので、名も福移と呼んだものとされる。

その他由仁村字熊本は明治二十七年及び二十八年に計二百二十五戸熊本から移住したものである。この他団体移住は相当あるものと思われるが、審かにはもつと記録を調べる必要がある。

また大正十二年許可移民の制が出来てからの九州地方からの移民は、昭和九年までの累計では、福岡二四五、佐賀四六、長崎三一、熊本一〇八、大分一五、宮崎三七、鹿児島六、合計四八八となつてゐる。

さて札幌市において福岡県からの移住者はどうであらうか。

北海道の製麻事業に不滅の功績を残された吉田健作氏は福岡県京都郡の出身であり、吉田氏は北海道製麻会社の事業に同県人を多く用い、豊前人が従つて多く来道した。宮村朔三、吉村徳義、千葉鶴雄、城戸熊次郎、村上道太郎、植田繁太郎、古賀為次郎、井田吉平、福田金五郎、大池小弥太

東政太郎、成松市松などの諸氏及び後には納富喜雄、白石三郎、竹田小庸など諸氏いずれも福岡県人である。従つて製麻事業は福岡県人によつてよく発展したものといつても過言ではない。

明治二十三年宮村朔三氏の發起で、福岡県郷友会が創設され、郷党の懇親互助が図られたが、植田翁もこの年来道したので、この会員になつたかと思われる。

この郷友会にも盛んな時も振わぬ時もあつたであらうが、明治四十年頃には松本騰四郎氏（福岡県小倉の人三十五年来道四十八年第七師団一等主計正を退役して札幌に居住、在郷軍人会初の札幌区分会長）を会長として、吉村徳義、加来庸雄、末松格平、星野健二の諸氏が幹部となつて大いに盛んとなり、その後会長には宮村朔三、吉村徳義、末松格平、菅忠三郎、加来庸雄の諸氏がなられたが、会員中には池田新三郎、南部源三、小金丸武季、福田新太郎、野見山良助、石野斐夫、細井新、大島居信光、上村晋、曾我祐光、山下雅実、富岡盛彦、内野太郎、今林一雄、河島卯一、西山茂、木庭源治、関茂樹、瓜生卓弥、梅岐純雄、江藤惣六、中国進、米倉芳雄等の諸氏があつた。

その後郷友会の名は福岡県人会に改められ、昭和十六年の名簿には赤司義人氏が会長となり、副会長には佐藤一雄、中山五平氏がなり、幹事長は遠山鶴彦氏である。幹事には秋穂茂、中垣光次、篠原締太郎、杉野洗一、中牟田健、中村輝夫の諸氏である。なお顧問には加来庸夫（元郷友会長）倉塚良夫（北大工學部長、工博）長尾巧（北大理學部教授、工博）中尾金蔵（札幌警察署長）松藤庄太郎（元釧山監督局長）吉松喬（札幌鉄道局長）の諸氏と翁等であつた。

その後は戦局の苛烈や終戦後の混乱等のため県人会の活動も自ら活潑なものではなくなつてしまつておるが、在札の福岡県出身は相当多数に上つてゐるかと思われる。

現在福岡県の出身の市内の名士としては、岩瀬喜彦（北大教授）黒岩保（北大教授）波上薫（資源技術試験所道支所長）真井耕象（北大教授）梶木治郎（道林務部長）後藤信雄（札幌矯正管区第二部長）緒方勇（北炭取締役）小橋一弘（油谷鉱業取締役）梶山幹六（第一物産札幌支店長）土田三郎（山一証券札幌支店長）藤吉輝満（大映支社長）その他旗生孝、中山五平、広田勝馬等の諸氏がある。

植田繁太郎翁思い出

その一

素晴らしい人

私が植田翁を考える時、太平洋戦争直前のころを思い起します。そのころ私はしばしば札幌の植

田家にお邪魔致しました。

夕食時に翁は食卓の中央に座り、翁の息子さんや四人のお孫さん達がその周りをとりまいていた食卓の楽しい雰囲気、私の心に深く刻み込まれています。

その時には翁は親切に私を隣の席に座らせて孫の英次君が通訳をして幾多の面白いお話を聞かせてくれました。

その頃翁は八十才近くでしたが非常に若く見えました。

翁は素晴らしい記憶力を持つておりました。そして私は明治維新前の話や明治時代初期の物語を非常に興味と喜びを以て耳を傾けました。

翁の幼年時代を物語られたお話を思い出されます。例えば鹿児島が英船によつて砲撃された事件、それを克明にお話しされ、この事件は翁のまだ幼い時の大事件だつたと思います。しかし翁のお話は眼ではつきり見たようなお話でした。

翁は観察力の鋭いまた賢明な老紳士でありました。丁度その頃私は二十四才位でありましたが、ある晩翁は私に口ひけを持つべきであると話されましたので、その忠告に従つて私は口ひけを蓄えました。

翁に対していまだに忘れ得ぬ印象は、翁の素晴らしい肉体と偉大な精神の結合であります。ですから翁はこのように長命を保たれたことは何も不思議ではないと思います。

翁が家の中を走り廻る元気な曾孫さん達と一諸に過ぎたことが非常に幸福だったと思います。私は常に戦後翁にお会い出来なかつたことを残念に思います。翁が御高令で輝かしい業績を残されて亡くなったことを聞き心から悲しく感じました。

翁は素晴らしい人でありました。

彼は北海道の発展に九州人の頑張りを發揮し大いに貢献されました。

G・R・ストリ

因みにストリ先生はオックスフォード大学出身、昭和十二年から十五年まで小樽高等商業学校の英語の教師を勤められ、英次君の恩師である。

太平洋戦争が起つた昭和十六年十二月キプロス島からシンガポールへ応召し、シンガポールの陥落数日前英船で脱出し、終戦直前までビルマ戦線に陸軍大尉として勤務し、終戦後東京に住まい、日本の現代政治史を研究されているが、本年九月帰国される予定である。

その二

植田翁の片鱗

式が終つて一同控えの間に引き揚げた。

「お芽出度うございます」の挨拶も晴晴しく、福茶をいただいていると、父君英武氏が「この御殿の建築、おやぢがむかし御用を勤めましてね」と例のもの静かな口調でいわれる。私はうなずいたまゝ見廻わした。

太い柱、木地もしろき書院、塵ひとつとめぬ欄間の彫り、広い渡り廊下、みじんもゆるがぬ造りのきびしさ、そして幾とせ古りた御殿の静けさである。

いつか立ちあがつていた私には、天晴れいまに残る工匠らの伎倆、そしてそれらをたばねて美事に工を竣せられた人の篤実さがひしひしと感ぜられた。

そしてまた広間の奥のかたに、静かに坐る老人の姿を見やつた。

植田繁太郎翁の端然たる坐りよう。あゝ浮世の塵を払つた端然たる姿！

—これは愛孫英次君の婚礼の日のことである。



烈しい暑さに東京の空気は喘いでいた。

中央線の電車は熱気と仕事に疲れた人々をのせて往復している。そのような一台の電車から、都の西郊井の頭の水清きほとりに降りたつた老人、そばにつきそう英武氏、手には金剛杖二本をつきたてておられる。

齢八十にして、六根清浄、富士登山をおえての帰り姿であつた。長身瘦軀、ひようひようとした

姿ながら、さすがに鍛えられた気魄がつやつやした皮膚にあふれている。

—ある年、七月すえの夕べであつた。

◇

私が植田繁太郎翁にお目にかかつたのは、そうしばしばではない。だがお目にかかるたびに、その姿のなかに北辺開拓のことに従われた先達の逞ましさと、北海総鎮守、札幌神社の氏子総代として多年つくされた敬神崇親のつつましさとが、ひとつに融け合つておのずからなものとして現われているのに、おどろいた。また北門まれにみる大きな事業を創りあげ、巨いなる産をなしながらその功をあらわにはせられぬ謙虚さにおどろかされた。晩年多くは、山鼻の山荘に起居せられたと聞いたが、一介の読書生にすぎぬ私どもが札幌へでて、植田家に厄介になるとときには、かならずいつてよいほど、本宅の方に姿をみせられて、親しい会釈をいただいたには恐縮せざるをえなかつた。

食卓に坐りたもうてビールを勧めたもういくたびかの折に、経営の一切を当文英武氏に委ねられつつも、なお時代の動きにしたがう運営につき、誤らない見透しをもち、適切な示唆をせられる、その達識におどろかざるをえなかつた。当主英武氏や子夫人ほか御一家のかたがたが、御老人に対する敬愛の深さについては、まことにこれこそ美しい御家風と仰がれたが、御老人もまた「わが家あと有り」と厚く信頼せられた御様子は、うかがうもまた奥床しいかぎりであつた。

◇

植田繁太郎翁、文字どおり福祿寿を享受せられ、英武氏、英次氏、英隆君と四代をつらね、御兄弟、御親類いよいよ茂く、御家門御事業ますます繁昌せられるのも、まことにこの翁に願われた積善の家、余慶ありと申しては、当主並びにその御一統に、礼を失するであろうか。

大 谷 敏 治

因みに大谷先生は英次君の小樽高商時代の恩師で、現在東京外国語大学教授である。

その三

植田翁を偲ぶ

私共が限らない敬愛の念を抱いていた植田繁太郎翁が長逝されて早くも一年を過ぎました。今更めてその風格を偲ぶ時、益々その死を惜しみ、在りし日を懐しむの情切なるものがあります。

翁は福岡県の産として明治二十三年渡道、札幌の北海道製麻会社に入社せられ、勤勉力行、模範的なものであつたそうです。その後現在の地に木工場を創設せられ今日の盛大な御事業の基礎を築

かれたのであります。

私の先代は早くより玉葱箱材を売つてもらひ、副業的にやつておつた石炭を買つてもらひ等して漸次親密な御交際を願うようになりました。

御令息英武氏は札幌一中の二期先輩であり、私が早く父を失つたので、翁は私に会う度毎に私の事業の状況・家庭の動静等細々と尋ねて下さいまして、常に私を自分の子の如く、慈父の如き温情を以て何くれとなく御指導御激励下さいましたことは、感謝に堪えない所であります。

思い出せば翁が北光小学校の保護者会会長をお勤めの時、私はその下で会計幹事をやつておつた当時、私を殊の外信任して下さいまして、私の提案は何事も常にそのまま採用して下さいました事は今だに忘れる事が出来ません。また翁は敬神の念強く私共今の鉄東・北光地区が十二区といつておつた当時、今より三十数年前、札幌神社祭典の年番の時、翁と柏野氏と私が代表委員となり、翁が理事長を勤められました時は、毎日事務所を引上げてから後も一か月以上も長い間翁の宅で夜遅くまで共に祭典を手違いなく奉仕するため熱心に協議されました。その熱意と努力とは、誠に頭の下がることであり、今も忘れることが出来ません。一昨年の年番には御令息英武氏が理事長を勤められ、翁も共に御神輿に供奉せられ、余所目にも非常に嬉しうでした。

札幌中の氏は皆感激しており、私も我が事の如く非常に嬉しかつたのであります。しかしあれが最後の御奉仕であつたことを思うと名残り惜しく存する次第であります。

人をして偉大ならしむる第一要件は、正しい人生観に徹することであると思います。翁は物いう相手の立場に立つて物を考える人であり、決して他人の悪口をいわぬ人で、人を賞める人でありました。自分を愛する如く他人を愛する人でありました。

「人を憎まざるものは悪まることなし」

「人の美を悦ばざるものは自己の大を為す能わず」

「人と交わるにはその長なるものを推し、その短なるものを避く、故に能く久し」
これが翁の人生観の一であつたと思います。

翁は実に徳と愛とを兼備した稀に見る偉大な人格者でありました。徳とか愛とかは力の弱いものに見えるが、人間が他人に心から厚意がもてるのは実にこの徳とか愛とかの力であつて、決して利害ではないし、また理窟でもないと思います。

次に人をして偉大ならしむるものは、宗教的信念即ち覚り、または悟道であり、人類社会に対する正義感であり、更に勤勉力行等であると思います。

翁は宗教的信念と正義感に徹した人であり、己の身を持つること儉素で、公共や慈善事業に消費を惜しまない人でありました。

また翁の勤勉力行は特筆大書すべきことで、植田家の磐石の礎石であり、代々の家憲伝統となつておるものと信じます。

翁は各々の職場に働くのは要するに職業を通じてその人の人生観を實行し、その人の人生を築き上げようとする目的を持つ、つまり職業は生活の手段ではなくして、人は職業を通じてその人生を完成すべきものであるという哲理を堅持しておられました。

翁は醇朴・潤達・明朗・氣宇の大きい人であり、動かし難い信念を持ち、磐石の如く揺がぬ人——腹の出来た人——度胸の据つた人で、逞ましい判断力と透徹した正しい人生観による偉大な実行力とその人格の力、統率力によつて自らの理想に向つて邁進されたのであります。

しかし翁の生涯は決して坦々たるものでなく、茨の道を切り開いて進まれ、努力された、苦勞人であり、立志伝中の人であります。苦勞人であつただけ、応揚磊落な中にも細かいことによく氣のつく人であり、一面玲瓏玉の如き円満なる慕わしい人格を持つておられました。謹嚴な半面、常に温容を以て人に接せられ、汲めども尽きざる温情の持主でありました。翁は真に嚙みしめれば嚙みしめる程、味の尽きない永遠に賞味せらるべき人でありました。

翁の感化により植田家は二代目英武氏、三代目英次氏は共に協力、家業に精励され、札幌否北海道の屈指の大実業家として活躍されつつあり、更に益々御隆昌御発展を信ずるものであります。特に英武氏の親孝行は衆の模範とすべきものであり、私共は常に感激しているところであります。

「親孝行、したい時には親はなし」と世にいわれておりますが、英武氏こそは例外であり、翁の生前中から稀なる親孝行の実践者でありました。翁はこの事を生前中よく知つておられ、私共にも常に洩らしておられ、強健を誇りつつ余生を楽んで、幸福に長生きされており、私共は父代りに何時迄も生きて下さることを願つておりましたが、遂に昨年大往生されました。誠に哀惜の情に堪えません。

人間味豊かな多年に亘る生きた薫染教化を追憶し、温き御交誼を反芻して、いやます翁への追慕を深くするものであります。

翁と縁の深いものの一人として拙なき一文を草し、筆を擱くに当たり、尽くることなき御庇護を賜りました翁に、深く感謝の意を表し、心からなる御礼を申し上げたいと思います。

村 川 嘉 一

因みに村川嘉一氏は昭和十三年から市會議員に当選し、市政の功勞者であり、現に札幌市議會副議長であり、また札幌商工会議所議員・監事を勤めておられる。

追 想 と 偶 感

開 拓 精 神

自由国家群の中に輝ける星として指導的役割を果たし、鉄のカーテンの彼方の惑星の中心と、あれこれ対比しても大部分に優位を占めるアメリカ、日本の財政・経済・機械力・文明生活等各般の水準と比較してもクダ違いにずば抜けた合衆国、地球上にまた歴史上にも偉大な進歩を誇る星条旗の出現。何が彼の国をそうさせたのか。

ある学者の説によると、それはアメリカ伝統の中に息づくフロンティア・スピリットの所産であるという。コロンブスが一四九二年大陸発見以来西へ西へと延び、拡がり伸びた果敢な民族は、ロッキー山を越えてなおも西へ西へと進んだ。そして次から次へと新しい州を加えていった。冒険を物ともせず、苦難と闘い、自然をも征服するたゆまない精神——開拓精神——こそ今日の彼の国を築いた土台であると唱えられる。

私は未曾有の敗戦に世界の四等国にも堕ちたわが国に明かるい明日を約束することの出来る精神力がありとすれば、アメリカの開拓精神にも似た不屈不撓の精神であると信ずる。

しかもその不屈の開拓精神は既にしてわれらが愛する北海道の開拓に既に実験済なのである。僅

か八十余年前まで荒涼たる蝦夷が島が今日四百数十万の人口を擁して陸に大きな生産を挙げていることを思えば、先人の開拓の逞ましい精神を思わずにはいられない。

その優れた先人の一人にわが植田繁太郎翁を数えることを私は誇りとするものである。

北海道にはまだ開拓適地もあり、豊富な森林資源、開拓すべき新漁田、豊富な鉱産資源等、領土が狭小となり、資源少いわが国にとつてまさに北海道は日本再建のホープである。

この日本再建のホープ北海道に住むわれわれは、より一層これが開発に当り、日本再建の一環としての国家的使命を果たすもまた意義なしとしない。かゝる際逞ましい開拓精神を長い生涯に貫かれた植田翁の伝記がこの度出版されることは喜びに堪えない。

しかもこの刊行に際して嗣子英武さんは私にも一文を寄せられることを申し出られた。

植田繁太郎翁の生涯には、私達の心に勇氣と希望の灯を点するものと信ずる。

英武さんは私の小学の同窓であり、中学のクラスメートである。

私はつらつら思うに今日の世相は冷たく、暗い記事にみちている、眼に映するもの、耳にきくもの暗鬱たる世相の反映ならぬはない。

この時、親を思う孝子の美拳、しかもこれがまた自ら世の人を鞭撻し、明かるさを加えることを思えば、好箇の記念であり出版の御企図も意義ありと心からなる賛意を表したい。

今から三十一年前の大正十三年の秋、当時札幌居住六十一才の有志六十一名で長壽の会が結成され、会名を發亥和合会と定め、お五百才まで生き抜くことを誓い、会旗（百々壽と名づけられ、最後に生き残つた人の手に帰するといふものとか）の下に年一回総会を催し、一面年々欠けてゆく仏の冥福を祈り、一面互に長壽を励まし合つたとかいふ。

伊藤龜太郎翁、大島喜一郎翁等本道実業界の豪の者がそのメンバーであつたとか、けれども八十八の米壽を祝われたのは僅かに三人、九十の関門を突破したのは繁太郎翁一人となつた。生前翁は百壽までも生き延びようとビール会等で行われたことが或る日の新聞にも見えたが、この念願もかなわず、昭和二十八年八月二十一日遂に他界された。

翁の仏前に樹てられた百々壽旗にはくさぐさの物語が秘められているであろうが、人眼をひくものであつた。

九十一才の高令は真に素晴らしい記録である。

俳聖とあがめられ、悟道の句数々をもした芭蕉翁が世を去つたのは元祿七年で五十一才の若さ、科学の進歩に伴い、生存平均年齢は近年向上、わが国で六十一才以上の老人は約六百万人、総人口の約七分に当るといわれている。百二十五才までを唱えて頑張つた大隈侯は八十五才で、渋沢栄一は九十二才、ヘンリー・フォードは八十五才を一期に人生の幕を閉じた。

翁の長壽の思い出に私のメモから死亡年令の横綱格を拾つて見る。昭和二十六年、九十二才の宮部金吾博士、アンドレ・ジイド八十二才、新聞王ハースト八十五才、昭和二十七年では八十才は藤井健次郎（植物学界長老）、本多静六（林学博士）、平沼騏一郎、土井晩翠、九十一才の下出民義（元代議士）、外国ではチャールズ・スコット、シェリントン卿（英人世界的医学者）九十四才、オルランド（伊元首相）九十二才等である。

また本年度では八十台今村力三郎（専修大学長）、寒川鼠骨（俳人）、本来乙彦（元東京市長）またハシント・ペナベンテ（スペインの生んだ世界的劇作家）が八十八才。これらによるも、翁の長壽は真に記録ものである。たゞ有名人の中で、御木本幸吉、尾崎行雄等何れも九十五、六才超々級型のつわものの現存は見のがせない。

不老長壽に心を致すのはひとり秦の始皇帝の専売特許ではない。しかし恵まれた健康体、注意深い反省と実践なしには、この成果は得られないだろう。翁は生前、早起され、小まめに働き、過食されず、禁煙、なるべく電車やタクシーの客とならず、テクシー主義で、遠い道も歩け、歩けを実行、庭造り等の趣味にも時を割き、忙中閑を味われ、悠々自適の気分、小事にこせつかなかつたこと等数々の自然にかなつた日々の生活の実践は、長壽の秘術を雄辯に物語っている。

印象と希望

翁は七十八才の高齢で富士の高嶺を踏破された。その記念写真の中に映る山男姿が印象的であった。日本人としては珍しい壮挙であつた。

翁が一家団欒の中、曾孫さんの起居動作を愛の眼を輝かせて見つめられていた有様が思い出に浮かぶ。ある漢学の大家が

団欒称慶 拳盃頻 (団欒慶を称して盃を挙げることに頻りなり)

稚孫遼膝 歎何極 (稚孫膝に遼して歎び何ぞ極らん)

と子や孫・曾孫に祝福された老境を詠われた状況そのものであつた。

自然木プラス翁の庭造りで、札幌のかくされた名所繁寿園(市内南十四条西十七丁目、二千坪)が生まれた。やがては市民のいこいの場として翁の生涯のよき記念塔となる日も遠くはないだろう。家なき人々、職を失い街頭に投げ出される数々の群——これら同胞の悩みをも心に銘じ、お互善処することこそ真に翁の輝かしい一生に報恩の所以と思う。

かくして植田御一家がいや繁り、いや栄えんこと、繁寿園のようにと希願しつつ、私はこの出版

に寄せる拙い言葉をおわることにする。

昭和二十九年九月

室 谷 慶 一

因みに室谷さんは英武さんの幼き時からの親友であり、従つて翁にも親しまれた方であり、大審院の判事を勤められたこともあるが、現在は札幌市南五条西十四丁目に居住されている。

その五

故植田繁太郎翁を憶う

去る八月廿一日は故植田繁太郎翁の一週忌にあたり盛んな法事が行われましたが、幸に私もその式典に参列することを得ました事は、実に有り難い事でありまして、心から翁の御冥福を祈つたのであります。その時故翁との永い間の交際に於ける思い出の数々が心に去来致しましたので、茲にその一端を記して見度いと存じます。

私は昭和二年に北海道庁拓殖部林務課に奉職致しました。その頃の担当事務が林産物処分係でありましたので、随分翁との交際がありそうで余り強く心に残る様な事件はありませんでした。然し

昭和十三年に私が札幌の営林区署長を拜命致しまして、故翁が札幌営林区署管内で造材する事になり急に交渉が多くなりました。その頃は資材確保の見地からは是非でも割当の資材を得なければならぬ事となり、随分故翁には無理な注文をして急に沢山な造材をお願いする事になりました。これ等の交渉は主として御子息の英武氏でありましたが現在に於ける国有林伐採の様子と思ひ合わせて転た感慨無量なものがあるのであります。そして故翁と親しく個人的に交際が始まつたのは、私が昭和廿一年春官界を去つてからであります。

翁は既に八十才を超えておられたのにもかゝらず、眼・耳・齒共に非常に丈夫で何時面会しても常に元気で、朗々たる音声で話をされるのには、相手の者をして何れもほゝえましむるものがあつたのであります。これはとりもなおさず若い頃から十二分に身体を鍛錬され、平常修養に志されたおかげであろうと思われまします。その証拠には翁が九十一才で昇天されたのにもかゝらず、その身体の組織が丁度五十代の人の如き健康を保つていたという報告が、北大医学部から齎されたという一事を以て知る事が出来るのであります。この様な事は誠に個人の一小事に属するが如くにも考えられますが、然し翻つて後進の者が後日故翁の尊き足蹟を考えた場合、如何に多くの教訓がその内に匿されているか、興味尽きざるものがあるのであります。

昭和廿二年春から私は紋別郡遠軽町に移転しましたから、何時も札幌に出た場合翁を訪ずれて、四方山の雑談に花を咲かせたものでした。翁は何時も麥らぬ元氣な朗らかな温容を以て接して下さ

るのには心温まるものがありました。これは永い交際に於いてなかなか容易ならぬことで、私はいつも俗に「人のふり見て我がふり直おせ」という教訓を得たのであります。それからこれは少々家庭内に立入つた事で、発表する事は如何とも考えられますが、翁の昇天さるゝ年の春頃であつたと思ひます。私が外出から植田家に歸つて挨拶した時、家の中の空氣に唯ならぬものを感じました。それは家庭の皆さんがお集りの席上で、何か翁が令息英武氏に教訓しておられる処であつたのです。だんだん伺つて見ますと英武氏がロータリー倶楽部へ出席して歸られる途中で、電車の中でチンピラに金入れを取られたという報告に接して、教訓しておられた場面でした。私は植田家に随分永く出入りしておりましたが、この様な状景に接したのは初めてでありました。大体小言をいう方とその小言を受ける方と何れも非常にむづかしいものである事は、家庭生活を営んだ経験のある者は誰も考えておる事でしょう。処が英武氏はその翁の小言に對し素直に「すみませんでした」とおわびを言うておられたのには、実に実に何と評しようか？これある哉、これある哉と、心の中で大拍手を禁じ得なかつたのであります。家庭生活は実にむづかしいものです。その至難中の至難事を斯くも平易に素直にやつてのける植田家は、実に弥榮えに榮ゆること間違なしと感心したというとは少々失言であるかも知れませんが、実に感に堪えざるものがあつたのであります。斯くて故翁の心は植田家の皆さんの心にあつて常にその前途を照らしその行動を見守つて下さる事を確信致します。

終りに甘露法雨の一節を抄録させて戴きます。

「人間は生命なるが故に常に死を知らず。想念に從い時に從い必要に從いて肉体と境遇とに様々の状態を顯わせども、生命そのものは病むに非らず、生命そのものは死するに非らず、想念を變うることによつてよく汝らの健康と境遇とを變うること自在なり。されど汝ら、ついに生命は肉体の藹を必要とせざる時到来ん。かくの如きとき、生命は肉体の藹を食い破つて一層自在の境地に翔らん。これをもつて人間の死となすなかれ。人間の本体は生命なるが故に死すること非らざるなり」

合掌

安 西 秀 三 郎

因みに安西氏は元北海道庁造林課長たりし人で、今は紋別郡遠軽町に居住されておられる。

あとがき

私は翁の伝記を小竹さんの遺稿を素材として短時日にまとめあげた。私をして意欲的に夜通しこれを執筆させたものは、翁の生涯に学ぶべきものが多く感得されたことに原因する。

私は日頃敗戦後の新日本建設について重大な関心をもっている。そのため終戦後の混乱と虚脱の中にあつて、世界の歴史の中から敗戦の国が復興した歴史的事実を色々と研究している。その一つにデンマークの歴史は興味深い。北欧の平和な酪農国デンマークは今から百五十年ほど前に、フランスに組してイギリスと戦つて大敗し、その後領土のノルウェイは分離独立してしまい、また九十余年前に独逸と戦つて南部の肥沃な地方を失つてしまった。その昔北欧に富強を誇つたデンマークはかくして領土は狭小となり、瘠土の弱小な国となつてしまったので、敗戦後の国民は信仰も失い、無気力となつてしまった。この時、これを救うために敢然立つたのがデンマーク復興の父と仰がれるニコライ・グルントウイである。

グルントウイは「外に失つた所を内に得よ」と叫んで「神を愛せよ、土を愛せよ、隣を愛せよ」と三愛主義をかかへて国民の脳裡に新たな開拓を余地を求めたのである。

かくてグルントウイらの努力によつてデンマーク国民には正しい信仰が復活し、三愛主義が実行されて、住み心地のよい平和な世界に誇るべき酪農王国として今日ある基礎が築き上げられたのである。

私はこのデンマークの復興のことを思い、その復興の父グルントウイを考えると、植田翁の生涯の中に、グルントウイの生涯に似通うものを見出すのである。

グルントウイは植田翁のように長寿をされた人で、その八十九才の生涯は、植田翁のように、勤勉精励の人であつた。貧しい牧師の家に生まれて、刻苦勉勵されたが、後には国王及び王妃等の庇護も受けて栄光ある生涯を終えられた人で、いわば翁と同じく、福祿寿を遂げた人といつてよい。

グルントウイは少年時代から「いつでも神さま見ておられる」「仕事は余念なくやれ」と教えられて、一生を通じて神を愛し、精励以て仕事をされた人で、ここもまた翁が同じく、神を尊崇し、勤勉精励働くことが人生だと思つたのと共通である。

グルントウイの長い生涯中にも苦難の時代はしばしばあつたが、神の愛を信する彼は、聖書の「患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ず」「希望は恥を来らせず、希望は神の愛を信することから生れる」の言葉のままに苦難に遇つても希望をすてず、刻苦勉勵して目的を達せられたのである。

神をおそれぬ自暴自棄が今日種々の敗徳を生んでいることを思うとき、植田翁の敬神こそは、また

世の光りとなることを私は改めて思うのである。

植田翁の信仰する神々は産土の神々であり、国土を開発し、産業を振興させる神であり、翁の信仰は宗教と人生のよき調和をみたのもグルントウイの信仰と通するものがある。

植田翁が国土開拓の神を信仰することは当然国土の自然を愛し、祖国日本を愛するものであり、殉国の勇士を祭られたのも当然であり、ここもまたグルントウイの祖国愛の強烈であつたのに通するものである。

また翁が祖先の靈を厚く弔い、肉親を愛し、博く隣人を愛したグルントウイが隣を愛せと力強く提唱し、世界に魁がけて協同組合を設置せしめたなども、その業績の一つではある。

植田翁の生涯中私の感すべきことと思うのは恩の思想である。翁が祖先の靈を厚く弔うのも、わが靈、わが肉体の根元である祖先に対する感謝の心が強く動いていると感ぜられる。祖国に対する感謝、世の中に対して感謝、恩義を受けた人に対する感謝は翁の生涯を通じての敬虔な心であり、恩の思想の東洋的なよさを失いつつある今日、人間的深みが翁の生活の中に強く表われているのは感恩報恩の思想が深く根ざしていることに基づく。

かように考えて見ると、私は祖国日本の再建の上に、植田翁の生涯は色々な示唆を含むものとするのである。

また私が特に植田翁のよさを感じるものに、家庭人としての翁のあり方である。

翁は夫人と共に植田家の隆昌を図り、その嗣子英武さんの協力も得て遂に今日あらしめた。この一家がよく和合協力したことは本文にも書いたが、植田翁が孝子であつたと共に、まれなるよき夫であり、よき父であつたことである。

終戦後わが国は民主的革新に伴つて永い間の半封建制的な家族制度も廃止され、民法の改正に伴つて、日本の家族道徳にも一大変化がもたらせられた。

しかし私をしていわしむれば、現在の道徳は西欧文化も未だ消化しきれず、また修身が教育からなくなつて在来の道徳の長所も發揮されず、一種の過渡的な、家族道徳の混乱時代といつてもよい。

かつて日本の道徳は修身科によつて保たれていたが、その修身にも缺陷があつて、従属的地位にあるものの道徳が強調されていたかに見られる。

今日個人の人權が同等となつてその道徳がまた多少の変更を見ることがやむを得ないものがあるが、親子關係も単なる人倫として取扱われることはさびしいことである。

私は植田翁の人としてよさを感じるものに孝子としてよりもよき夫であり、またよき父であつたことに重点を置きたい。

植田翁が嗣子英武さんを信ずること厚く、こよなく愛せられた。英武さんがまた最もよき子として父に対されたことも故あることであつて、美わしいものと信ずる。

平和国家の基盤は美しい家庭にあると信ずる私は、翁がよき父として人格を完成されたことを深く想うのである。そして実践躬行によつて語らずとも美しい家風をつくり上げられたのである。

民主的な革新に伴つて自ら半封建制的な家の觀念は改められるべきであるが、徒らに西欧の個人思想に支配されて、美わしい家庭の道徳も失いがちな世相に省みて、植田翁がよき父として終始されたことはよき家庭を後に残したものととして意義深いものである。

私は翁の築き上げられた植田家の家風によつて植田家のいよく栄えることを祈ると共に、世の家々がそれ／＼に和合協力して、まず平和な国家は明かるい家庭からの意義に徹し、人みながよき父、よき母として人格を完成されることを翁一家から学びたい。

(編者 田中潜)

追記

植田さんに始めてお会いしたのは大正も初め、今から凡そ四十年の昔であつた。

その春の夕、白線を巻きつけた真新しい帽子に紺の着物、小倉の袴の中学一年生は父に手をひかれるようにして、今の場所そのまゝの植田木工場を訪ねた。

木工業は未だ作業中で、二、三人の作業員が忙しく働いていたが、父はその中に植田さんを見つ

けると「植田さん！」と声をかけた。

「あゝ 古賀さん！ 珍らしい、今終わるけん、その茶の間で待つていて下さらんか」というようなことを、お国訛りで叫んでいた。

私だけ立ち止つて木工場の内部をのぞいていると、植田さんはビンとはね上つた口ひけを蓄えてはいるが、和服の上に黒い長目の作業衣を着用され、足にはチビタ下駄か草履をつつかけて、こちら向にロープを肩から両手で押え、前かがみになつていわば送台車の代わりをつとめていられた。やがて、手を洗い作業衣を脱ぎ茶の間にあらわれた植田さんは、父と対座して、相互に久瀾を叙し、近況からさては懐旧談に暫しの時間を過ごした。

下戸である父の前に出されたコップのビールは何時までも乾されずに放置されていたことを記憶している。

奥さんや当主の英武氏もおられ、私も父の側で皆さんのお話を熱心にきいていた。

それでわかつたことは、十三、四年前に札幌を去つてから、その日、始めて植田さんにお会いしたということだつた。

父にして見れば、中学校に入学するような大きい（？）息子もできたことだから、報告旁々お訪ねしたという意味であつたかも知れぬ。

植田さんも、中学生になつた私のことを言葉に出して褒めてくれて、英武氏も一昨年春同じ中

帰途父は、植田さんとは同県同村同字の出であること、製麻会社と一緒に働いたことがあること、英武氏の名づけ親は父の従兄の城戸熊次郎氏であること、英武氏の英は北九州に聳える「英彦山」からとつたものであることなどについて話してくれた。

また後父が札幌で病を養つている際は、植田さんは井田さんと一緒に度々見舞に来て下さり、葬儀のときは色々とお世話の上平岸まで送つて下さつた。

その櫃の中で親の戒名というものは、死後一週間位の間に覚えなければ一生覚えられないものだという話を話された。

私が父の戒名を暗んじているのは、そのときのお話のためではないかと思つている。

父は六十才で死んだが、植田さんはそのとき五十八才であつたであろう。

父は文久元年生まれ、植田さんは文久三年生まれであるからだ。

大正の初めに、あのようにして木工場を経営されていた植田さんは、その頃五十の坂を越していた筈である。その植田さんが九十才を越して大往生を遂げた晩年、「福祿寿」を兼ね備えた方として人々も羨ましがられ、又褒め讃えられたのは、努力の人であつたことはもとより、健康体に恵まれていたことにもよるが、常に神仏に帰依して大安心の上に立つて活動せられたことにも大きな原因のあつたことが推察される。

植田さんの生前、英武氏から小竹さんの筆になる植田さんの伝記ができたということを何かの折にきいたことがあつたが、そのときはそのまゝになり、葬儀が終わつてその後、例の伝記が見つかったから見せたいという葉書を貰つた。出向いたら、之を出版したいが骨を折つて見てくれぬだらうかということだつた。

見せて貰つたが、後半は小竹さんの御病床の中でものされたようなので、出版するには多少の補筆をする必要があるように考えられた。そのことを話し、それが糸口で具体化し、郷土歴史研究家の田中潜氏を煩わすことになり、同氏の補筆により上梓の運びとなつた。

こうして立派に本書が出来上ることになつたのは、同氏の好意と御努力との結果で、まことに感謝に堪えない。ここに記して深甚の謝意と敬意とを表するものである。

本書もとより植田さんの歩んで来られた九十年の歴史であることに相違はないが、一面、雄図を抱き故山を後に、はるばる津軽の海を渡つた開拓者の歴史でもあつて、読む人をして何等かの感慨を湧かしめるものがあるとともに、裨益せずにおかぬなものかのあろうことを信じて疑わない次第である。

昭和二十九年盛夏

古賀規矩之

しるす

お 禮 一 言

皆さまの御同情やお骨折によつて父の伝記が出来上つたことは誠に感謝にたえません。

特にまた生前色々と御厚情を戴いた額賀宮司さま、三沢元市長さん、北島宮司さま、石井宮司さま、その他福島利雄氏、穴釜升夫氏、ストリさん、笹原健三先生大谷敬治先生望谷慶一氏安西秀三郎氏など、御多忙のうちから懇切な書をお寄せ下さつて父もどのように喜んでいられるかと心の温まる思いがございます。またこれによつてこの本に一層の意義を加えて下さつたので本書の出版をはじめに企てられた今はなき小竹文次郎さんもまたあの世で喜んで下さることかと存じ、皆さまのおかげで、私の小竹さんの芳志に対する一つの務めも果たし得たように思います。

本書のなかに私のこともいろ／＼と褒めて書いておられ、面はゆく汗顔の至りでございます。

なき父を憶えば限らない思慕がございますが、裸一貫からどうやら今日を築き上げてくれました父の恩を思うにつけても私には多少の財産よりも父の残してくれた最大のもはその精神的な薫化であつたかとしみじみ思われます。

二代目は馬鹿でもやつていけるとよくいわれますが、父の努力に比すれば私ももつと奮励いたさ

ねばならぬとも存じ、また三沢元市長さんが下さった詩の中にある「家門仁風隨時薫」を服膺いたしまして父の名を辱かしぬよう一層精進いたしたいと考えております。

父の一周忌を迎え、九十一年の永い生涯、皆さまから深い御芳情を戴きましたことを今更に御礼申し上げ、小竹さんの遺稿を御多忙のうちからおまとめ下さった田中潜氏、古賀規矩之氏に厚く感謝の意を表します

植 田 英 武

年 譜

植田翁及び植田家のことを記録すると共に、その時代を知るよすがとして、国勢・本道事情・札幌に関することも併せて記載したので何かの参考となれば編者の幸とするところである。

植田家記録はゴシック、国勢に関することには○印、本道事情には◎印、札幌に関することには○印を附した。

年 号	西 暦	干 支	年 翁 の	翁 及 び 植 田 家 に 関 する 記 録	参 考 事 項
文久 三	一八六三	癸亥	一	福岡縣京都郡沖津村大字稻龍に彦平二男として翁が生まれた(四・二一)	◎攘夷親征の議があつた ◎三条実美らが脱走した
文久四 (元治元)	一八六四	甲子	二	翁の祖父儀平この年歿した(八十四才)	◎長州藩が英・仏・米・蘭の兵と戦つた
元治二 (慶応元)	一八六五	乙丑	三		◎將軍家茂が開港の勅許を乞うた
慶応 二	一八六六	丙寅	四	翁の弟弥市が生まれた	◎幕府軍が長洲を攻めた ◎大友亀太郎が札幌元村を開いた
慶応 三	一八六七	丁卯	五		◎將軍慶喜が大政を奉還した

慶応 四 (明治元)	一八六八	戊辰	六	この年植田の姓を名のつた	◎五箇条の御誓文がなされて明治維新の政治が整った ◎箱館裁判所が設置された ◎蝦夷府脱走軍が箱館を占領した
明治 二	一八六九	己巳	七	翁が寺小屋に遇いはじめた 翁の弟鷹平が生まれた	◎版籍が奉還されて封建制度が形式的に打破された ◎箱館に戦艦が脱走軍が破れて全国平定された ◎北海道開拓使が設置された ◎島嶼官に北海道と改められた ◎島嶼官に北海道と改められた
明治 三	一八七〇	庚午	八		◎樺太開拓使が設置された ◎島嶼官が東京に還り、札幌本府の建設が一時中止された ◎東本願寺が道路を開さくした
明治 四	一八七一	辛未	九		◎札幌再興がはじまった ◎札幌に消滅が行われて封建制度が実質的に消滅した ◎札幌に消滅が行われて封建制度が実質的に消滅した ◎札幌に消滅が行われて封建制度が実質的に消滅した
明治 五	一八七二	壬申	一〇	翁の弟末吉が生まれた	◎札幌の開拓使が札幌本府と改められた ◎札幌の開拓使が札幌本府と改められた ◎札幌の開拓使が札幌本府と改められた ◎札幌の開拓使が札幌本府と改められた

明治 六	一八七三	癸酉	一一	翁が近所のお寺に小僧にやられた(後一里半程あるお寺にうつされる)	◎徴兵令が公布された ◎札幌には札幌の建設事業が中止された ◎札幌には札幌の建設事業が中止された
明治 七	一八七四	甲戌	一二		◎この年も札幌が不景気で空家が増加した ◎札幌に牧場・果樹園などが官設された ◎札幌に牧場・果樹園などが官設された
明治 八	一八七五	乙亥	一三	翁の弟卯七が生まれた 翁が寺から逃げ歸り家事従事した この年から士族の子弟につき勉強しはじめた	◎樺太・千島の交換条約が成った ◎札幌学校が開校した ◎札幌学校が開校した ◎札幌学校が開校した
明治 九	一八七六	丙子	一四	翁の母堂そてが歿した(四十二才)	◎牧羊場・牧牛場・ビール製造所・木工場が官設された ◎札幌学校が札幌農学校と改め、クランクが校風を一新した ◎山鼻兵村が設置された
明治 一〇	一八七七	丁丑	一五	翁の父君彦平がコレラ病で急死した(五十一才) 長兄と共に翁は一家の柱となつて働く 弟末吉が死亡した	◎西南の役が起つた ◎屯田兵が出征してたてた ◎札幌警察署が設置された

明治一一	一八七八	戊寅	一六	○三吉神社が創立した ○西本願寺別院が創設された ○札幌神社の屯宮が設置された
明治一二	一八七九	己卯	一七	○札幌区役所庁舎が建設された ○屯田兵招魂碑が建設された
明治一三	一八八〇	庚辰	一八	○札幌はじめの新聞札幌新聞が発刊された ○札幌区役所が開庁した ○本道はじめの鉄道が手宮札幌間に開通した ○厚別水車機械所が官設された
明治一四	一八八一	辛巳	一九	○豊平館が落成した ○明治天皇が北海道に行幸あらせられた ○北海道官有物払下問題が起り、国会開設の詔が下された ○演武場に時計がすえつけられた
明治一五	一八八二	壬午	二〇	○開拓使が廃止されて函館・札幌・根室の三県が設置された ○札幌県庁が設置された ○札幌始審・治安裁判所が設置された ○札幌・幌内間鉄道が開通された ○札幌・幌神杜が設立された ○吉田健作が亜麻につきて建言した
明治一六	一八八三	癸未	二一	○北海道事業管理局が設置された ○札幌農業・工業両事務所が設置された

明治一七	一八八四	甲申	二二	○札幌県立師範学校が設置された ○札幌区を市街のみと改めた ○豊平神社が設立された
明治一八	一八八五	乙酉	二三	○札幌停車場通りにアカシヤ・柳・梅をうえ、並木のまちの基をなした ○三県を廃して北海道庁が設置された ○官営工場払下が行われて民業が盛んになった ○北海道師範学校が設置された
明治一九	一八八六	丙戌	二四	○北海道製麻会社・札幌麦酒会社が設立された ○北海道毎日新聞が発刊された（日刊新聞のはじめ） ○札幌木挽所（森源三）後藤木挽所（北五西五）が設立された ○中島遊園地がつくられた
明治二〇	一八八七	丁亥	二五	○北海道庁舎が新築落成された ○札幌の開港が大いに進められた
明治二一	一八八八	戊子	二六	○札幌子製紙工場分工場に働くことと
明治二二	一八八九	己丑	二七	○大日本帝国憲法が公布された ○北海道炭鉱鉄道会社設立された ○札幌女子小学校が設立された

明治三三	一八九〇	庚寅	二八	翁が城戸熊次郎の手引で渡道し吉田健作の指導で亞麻耕作に従事した 九月北海道製麻會社に入社した 一時退職し再び入社した 當別製線所浸水係・工業係となつた	○北海道製麻會社が開業した 公立札幌病院が設置された 教育勸励會が組織された 福岡郷友會が結成された
明治二四	一八九一	辛卯	二九	翁の勤勉が認められて大いに拔擢された	○北海道電燈會社が開業し札幌市街に電燈がともる
明治二五	一八九二	壬辰	三〇	翁が五等技手となり雁木製線所詰となる 渡道の宿願百五十圓を家兄に送り郷里に山林田畑を購つた	○札幌鉦山監督局が設置された ○札幌大火（八八七戸焼失）市街の五分一を焼失 ○北海の道物産共進會が開催された ○北海のため産米進會が開催された
明治二六	一八九三	癸巳	三一	翁が三月竹中トヨと結婚した	○札幌鉦山監督局廃止 ○北海道農會が設立した ○前年の大火のため戸数著しく減じた、空家一千戸とも称せられる ○日清の風雲險惡であつた
明治二七	一八九四	甲午	三二	翁の嗣子長男英武が生まれた （一・一・一） 戦等のため製麻會社の事業が盛大となり翁大いに働く	○日清戦争が勃発した ○北海道が第七師管区と定められた ○雁木神田が設立した ○伊藤龜太郎が土建請負業をはじめた
明治二八	一八九五	乙未	三三		○屯田兵を以て臨時第七師團が編成された ○庁立札幌尋常中学校が設置された

明治二九	一八九六	丙申	三四	翁が二等技手となり雁木製線所長を兼務した	○札幌鉦山監督局が再設置された ○札幌に第七師團が設置された ○北海の道木村會社（大通西三）が設立した ○創成高等小学校が設置された ○屯田司令部が、第七師團司令部となつた
明治三〇	一八九七	丁酉	三五	翁が妻子を伴つて渡道以來はじめて郷里を訪問した	○札幌税務監督局及び札幌税務署が開庁した ○札幌支庁が設置された ○郡役所を廃して支庁が置かれた ○大谷地・信濃両神社が設置された
明治三一	一八九八	戊戌	三六	十一月十八日雁木製線所工場が焼失し、翁は責任上減俸に處せられた	○北海道区制が公布された ○札幌鉦山監督局が創立した ○札幌製米場（北五西五）が設立した
明治三二	一八九九	己亥	三七	一月七日再び雁木製線所工場に火災起り責任上翁は退職した 蘭越の共同農場の監督となる 四月札幌の選定に苦心する（農場などにも行く） 後下宿屋をはじめた	○北海道区制が函館・札幌・小樽の三区にしかれ、自治制度が充足した ○札幌神田が官幣大社となつた ○札幌招魂碑保存會が設立した
明治三三	一九〇〇	庚子	三八	英武の妻となつたスエが柳澤善五郎三女として生まれた（七・一七）	○札幌電話交換局が設置され一般電話交換を開始した（當時加入者一七〇） ○北海の道拓殖銀行が設立した ○第七師團が旭川に移転した

明治三四	一九〇一	辛丑	三九	翁が製麻會社の屑糸で紐網製造をはじめた	◎北海道会北海道地方費法が公布された ◎第一回道會議員選挙が行われた ◎北海道の自治が発足した ◎北海タイムス社が設立した ◎豊平川西岸未開地処分により発展しはじめる ◎重谷木工場が設立された(北五西六)
明治三五	一九〇二	壬寅	四〇	翁が札幌神社祭典区代表委員となる	◎本道第一回の衆議院議員選挙が行われた ◎道會議事堂が落成した ◎北海道林業会が設立した(北二西一) ◎札幌材木商組合が設立した ◎札幌精穀工場が設立した(南七西一)
明治三六	一九〇三	癸卯	四一		◎札幌農学校校舎新築落成した ◎札幌農学校の風雲急となる ◎円山墓地が開設された ◎東小学校在河身改良、旧河床埋立によつて中島遊園地地帯に新町ができた ◎旧農学校敷地に新町が形成された
明治三七	一九〇四	甲辰	四二	翁が製糸業をはじめた	◎日露戦争が勃発した ◎野島製罐工場が設立した(南二西三後大通東三に移転)

明治三八	一九〇五	乙巳	四三	翁が精米機械を買い麻糸をつくる	◎日露講和条約が締結された ◎北海中学校が設立された ◎札幌工作株式会社が設立した(北四東四)
明治三九	一九〇六	丙午	四四	翁が精米事業をはじめた(二月北九東二ノ一)	◎札幌麦酒会社が日本麦酒会社札幌支店となる ◎山鼻と円山が合併して藻母村となる ◎札幌商業会議所が設立した ◎藤沢精米精粉工場が設立した(南一東四) ◎札幌木挽所合資会社となる(北一東四)
明治四〇	一九〇七	丁未	四五	翁が東京の博覽會に製材機をさがしに行かれた宿願の製材機を得て業材業をはじめた	◎中島に忠魂碑が建てられた ◎札幌農学校が東北帝国大学農科大学となった ◎北海道製麻会社が帝國製麻会社支店となる ◎札幌材木株式会社が設立した(北五東二後北一東四) ◎札幌大火三七戸焼失した ◎復興のため製材業盛んとなる ◎札幌駅が焼失した
明治四一	一九〇八	戊申	四六		◎林業試験場が設置された ◎札幌営林区署設置された ◎洪水 ◎三井物産札幌材販売所が設けられた(北四西三)

明治四二	一九〇九	己酉	四七	翁が札幌神社の第十二區年番祭典委員長をつとめる	○大場木工場が設立した(北四東二)
明治四三	一九一〇	庚戌	四八	中島遊園地を公園と改称した ●拓殖十五年計画が実施された ●豊平白石札幌藻岩の一部市域に合併された ●北海道逓信管理局が設置された ●北海製材所が設立された(北五東三) ●山野木工場設立 ●山鼻旧墓地が宅地となつて新町が形成された	
明治四四	一九一一	辛亥	四九	翁が皇太子殿下札幌神社御参拜の折歡喜迎送委員となつて奉仕する ●札幌神社改築につき伊勢神宮材の木曳式に奉仕された	○北海道瓦斯会社が設置された ●札幌幌馬鉄が供與された ●札幌大通が開設された ●皇太子殿下行啓あらせられた ●藤沢木場の社殿改築がはじまつた ●札幌神社の社殿改築がはじまつた
明治四五 (大正元)	一九一二	壬子	五〇	英武札幌中学校卒業し、上級學校進學を断念し翁を助けて家業についた	○豊平川洪水 ●明治天皇崩御あらせられた ●伊夜日子神社が設立された ●安彦木工場が設立した(南四西六)

大正 八	一九一九	己未	五七	英武次男武夫が生まれた	○月寒種半場が設置された ○北大医部が設置された ○札幌飛行場が設置された ○小川合名会社工場が設立された
大正 九	一九二〇	庚申	五八		○世界恐慌により財界不況となった ○私立札幌商業学校設立、その地 ○札幌の発展が著しくなつた ○市立高等女子学校が設立した ○合名会社木材製材所が設立した ○北日本製材株式会社が設立した
大正一〇	一九二一	辛酉	五九	翁が宮澤宮司に札幌神社の参道開さくを提案しこれを實現した	○常備消防が設置された ○札幌貯蓄銀行が移転した ○札幌神社電宮が炎上した
大正一一	一九二二	壬戌	六〇	英武三男繁が生まれた(四・九) 翁が札幌神社奉賛会評議員に囑託された 翁が札幌神社に石燈籠を寄進した	○ワシントン海軍条約が調印された ○札幌宮殿下が設置された ○札幌招魂社が設立された ○札幌市に市制が施行された
大正一二	一九二三	癸亥	六一	大島喜一郎・伊藤龜太郎と翁が 発起して癸亥和合會を結成され 翁が札幌神社第十二區年番祭典 委員長として奉仕された 翁が屯宮造営につき盡力された	○札幌市に都市計画法が適用された ○北大工字部が設置された ○関東大震災が起り、各業界にもその影響が大きかつた

大正一三	一九二四	甲子	六二	英武四男彦吉が生まれた(一・二・二四)	○狸小路が舗装された ○札幌養老院が設立した ○北海道工業試験場が設置された
大正一四	一九二五	壬戌	六三	翁が新たに造材事業を併せて行うこととなつた	○北海道農事試験場が要似に移転した ○第一回少年野球大会が開催された
大正一五 (昭和元)	一九二六	丙寅	六四		○札幌市に市街地建築物法が適用された ○北海タイムス社が定期航空を開始した ○庁立図書館が開館した
昭和 二	一九二七	丁卯	六五	翁が養老院事業に參與しはじめた	○電車市営となる ○豊平館の新館が建設され公会堂となる ○金融恐慌がはじまる
昭和 三	一九二八	戊辰	六六	翁が膽石病を患つて泰博士の執刀で快癒した	○札幌放送局が設置された ○菅原木材店が開業した
昭和 四	一九二九	己巳	六七		○第一高等小学校女子高等小学校が設立した ○木工業界が沈滞した
昭和 五	一九三〇	庚午	六八	翁の妻トヨ子歿す(六十二才) この年金解禁等にて翁の事業六万圓の損失を招く	○金輸出が解禁された ○島判官の碑が円山に建設された ○北大理学部が設置された ○本道の収穫米三百万石をこえる

昭和一六	一九四一	辛巳	七九	翁が札幌神社崇敬の顧問に推された 英次小樽高商卒業 武夫日大藝術学部音楽科入学	◎大政翼賛会北海道支部が結成された
昭和一七	一九四二	壬午	八〇	唐吉札幌一中卒業 東京商大専門部入学 武夫應召 英次和合會に長壽の賀宴を催した	◎札幌市防空本部が設置された ◎札幌市地方燃料局が設置された ◎道内新聞が統合し北海道新聞社が設置された
昭和一八	一九四三	癸未	八一		◎北海道中央バス札幌支店が設置された ◎アッツ島の日本軍全員が玉砕した ◎北道憲兵司令部が設置された ◎日北道憲兵隊司令部が設置された ◎戦日北道憲兵隊司令部が設置された ◎戦日北道憲兵隊司令部が設置された ◎戦日北道憲兵隊司令部が設置された
昭和一九	一九四四	甲申	八二	英次結婚（一・二三） 翁の知已伊藤龍太郎翁が死去された 英次應召年内除隊	◎札幌市消防署が設置された ◎戦局が激化し全国的に強化された ◎戦局が激化し全国的に強化された ◎戦局が激化し全国的に強化された ◎戦局が激化し全国的に強化された ◎戦局が激化し全国的に強化された

昭和二〇	一九四五	乙酉	八三	英次長男英隆が生まれた（四・八） 統制會社出現にて造材事業を中止した 武夫除隊結婚	◎米機動部隊本土を空襲した ◎義勇兵隊が挺身隊が出動した ◎義勇兵隊が挺身隊が出動した ◎義勇兵隊が挺身隊が出動した ◎義勇兵隊が挺身隊が出動した ◎義勇兵隊が挺身隊が出動した
昭和二一	一九四六	丙戌	八四	英次二男淳慈が生まれた（六・一三） 翁の弟卯七が死去した（七十二才） 翁の弟弥市が死去した（八十二才） 翁が伊藤豊次氏の貴族院議員選挙に盡力す	◎天皇年頭詔書下賜され新日本建設の方途を示された ◎軍国主義指導者の追放命令された ◎新憲法が公布された ◎官幣制の官制が廃止された ◎菅原木工場の北海木材工業株式会社となる ◎勸業銀行支店が設置された
昭和二二	一九四七	丁亥	八五	三月二十八日株式會社植田鐵工場が設立した（社長英武） 十月十五日個人經營を改め植田木材工業株式會社を設立し、翁社長となる 翁が札幌彰徳神社の顧問に推された 翁が膀胱の手術をうけて経過が	◎インフレーションが昂進した ◎預金が封鎖された ◎新金封鎖令が施行された ◎市役所出張所が設置された ◎食糧事情が厳格化された ◎食糧事情が厳格化された ◎食糧事情が厳格化された ◎食糧事情が厳格化された ◎食糧事情が厳格化された

昭和二十九年九月十日印刷
昭和二十九年九月十日發行

原著者 故小竹文次郎

編集者 古賀規矩之

田中 潜

札幌市北九条東二丁目

発行者 植田英武

札幌市北七条西一丁目

印刷者 石川 正

札幌市北七条西二丁目

印刷所 北海道土地株式会社

印刷部